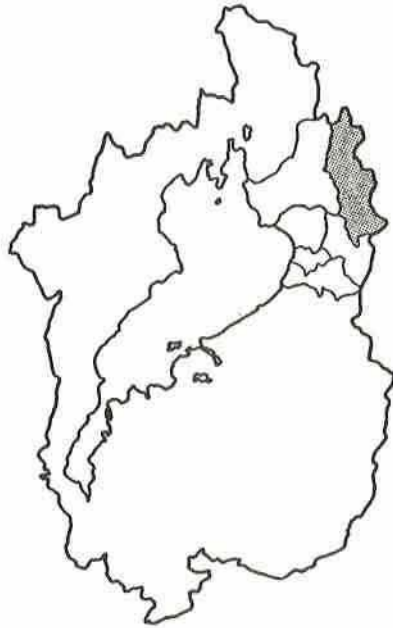


伊吹町文化財調査報告書第3集

伊吹町内 遺跡分布調査報告書



1992. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

琵琶湖の東にどっしりとした山容でそびえる伊吹山は、神々の住む霊峰として古くから畏敬の念で仰がれてきました。特に、山麓に広く分布する縄文遺跡に住んでいた人々は、空をおおうようにして眼前に立つ伊吹山から、自然の恵を得、時に脅威を感じながら、これを神とみなし祭を行っていたのではないのでしょうか。そのような伊吹山をめぐる縄文世界を、杉沢遺跡で発見された祭祀的な一群の石器類を通してかいま見ることができます。

伊吹町内において埋蔵文化財の発掘調査がなされた件数はほんの僅かです。今後社会の急速な変化に伴い、大規模な土地改良や道路建設等の各種開発行為が予想されます。過去にも予期しなかった所から偶然に遺跡が発見されたことも現実にもありました。このようなことに対処するため、周知されている遺跡の周辺でも遺跡確認の為の調査を実施するなど、開発と文化財保護とのトラブルを未然に防ぐ努力をしています。しかしながら、地中に眠る埋蔵文化財はその存在すら知られないままに、破壊されてしまったものも数多くあると考えられます。また、発掘調査を実施しても、記録を保存するだけで破壊されてしまうのが現状です。

このような現状は、各種の開発行為に備えて埋蔵文化財の正確な位置や範囲を周知徹底できていなかった行政側の責任でもあります。本町教育委員会では、このような問題の解消をはかるために、3ヶ年にわたり町内遺跡詳細分布調査を行い、その成果を本報告書にまとめました。今後も新たに遺跡が発見されることが予想され、完全な資料とはいえませんが、これを基に各関係機関との連絡調整を密にし、文化財保護の推進と充実を図る次第であります。

最後になりましたが、調査にあたりまして、御協力を賜りました関係機関・各位に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

伊吹町教育委員会

教育長 石河竹二郎

例 言

1. 本書は、伊吹町教育委員会が実施した、伊吹町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫補助事業として総事業費2,887,000円のうち、国庫補助金1,443,000円、県費補助金721,000円を受けて、平成元年度より平成3年度までの3ヶ年間で実施した。
3. 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	伊吹町教育委員会	教育長	石河竹二郎
調査事務局	〃	社会教育課 課長	山田 登(平成元・2年度)
	〃	〃	堀内安夫(平成3年度)
	〃	課長補佐	山本忠明(平成3年度)
	〃	係長	篠原 渡(平成元年度)
	〃	主任	谷口隆一(平成元・2年度)
	〃	〃	藤敦幸子(平成3年度)
	〃	主事	松井富美子(平成元・2年度)
	〃	〃	的場文男(平成3年度)
調査担当者	〃	技師	高橋順之

4. 現地調査および整理作業には、下記の方々の協力を得た。
(調査参加者) 西川宏・後藤美智子・宮川満子・藤敦正幸・松田輝・高橋佳宏・石河輝男・福永豊・桑山碧・奥井昭三
5. 本書をまとめるにあたって、下記の諸機関ならびに諸氏には、未公開資料の調査、掲載および指導・助言等種々の協力を得た。ここに記して厚く謝意を表する。
滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会、滋賀県立近江風土記の丘資料館、長浜城歴史博物館、福永円澄(伊吹町史編纂室長・伊吹町文化財専門委員)、藤田英男・高橋友彦・的場和夫・草野秀明(伊吹町文化財専門委員)、藤田和彦、武田喜知雄、大澤寛泉拓良、丸山竜平、磯部敏雄、兼康保明、用田政晴、中井均、宮崎幹也、丸山雄二、中川通士、桂田峰男、土井一行、桜井信也、中川治美、有安秀喜
町内出土遺物個人所有者(本文末に一覧)
6. 本書に使用した遺跡分布地図(付図)については伊吹町発行の1万分の1地図を2万分の1に縮小して使用した。
7. 参考文献については文末の文献目録で一括し、遺跡一覧表の文献欄に目録の番号で明記した。

8. 新しく発見した遺跡は、原則として所在する小字名をとって遺跡名とした。また、従来の遺跡名のうち、今回訂正したものについては、文末の遺跡一覧表備考欄にその旨を記入した。
9. 本書の遺跡分布地図は、平成4年3月の状況であり、今後遺跡の範囲が大きく異なったり、新たに遺跡が発見されたりする可能性もあり、開発等に当たっては事前に伊吹町教育委員会社会教育課へ問い合わせ、十分に協議されたい。また、伊吹町教育委員会としても、数年毎に遺跡地図の見直しをおこなっていく予定である。
10. 調査の記録写真・図面・出土遺物は伊吹町教育委員会等で保管している。
11. 本書の執筆、編集は高橋順之がおこなった。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第2章 伊吹町の地勢	2
第3章 遺跡の概要	4
第1節 主要遺跡の概要	4
1 神ノ木塚遺跡	4
2 杉沢遺跡	5
3 高番遺跡	6
4 上平寺城跡	7
5 上平寺遺跡群	8
6 井の田遺跡	11
7 弥高寺遺跡	16
8 東野遺跡	18
9 伊吹遺跡	20
10 太平寺遺跡・太平寺城跡	21
11 長尾寺遺跡	22
12 曲谷石造建造物と関連遺跡	26
第2節 各遺跡の概要	28
第4章 杉沢遺跡出土石器	41
第5章 付 表	65
附表1 伊吹山寺関連略年表	66
附表2 伊吹町埋蔵文化財関係文献一覧表	68
附表3 伊吹町内遺跡一覧表	70
付 図 伊吹町内遺跡分布地図	

挿 図 目 次

第1図	伊吹町周辺の地勢図	3
第2図	神ノ木塚遺跡断面土層図及び土壌実測図	4
第3図	杉沢遺跡出土甕棺実測図	5
第4図	高番遺跡出土土器実測図	6
第5図	上平寺城跡縄張図	7
第6図	上平寺城下古図	9
第7図	上平寺館遺跡略測図	10
第8図	井の田遺跡出土石器・土器実測図	12
第9図	井の田遺跡出土縄文式土器実測図①	13
第10図	井の田遺跡出土縄文式土器実測図②	14
第11図	井の田遺跡出土縄文式土器実測図③	15
第12図	弥高寺跡測量図	16
第13図	弥高寺跡出土陶器実測図	17
第14図	東野遺跡出土石器実測図	19
第15図	伊吹遺跡出土石器実測図	20
第16図	長尾寺遺跡測量図	23
第17図	長尾寺遺跡出土遺物実測図	25
第18図	曲谷宝篋印塔未完成台座拓影	27
第19図	治山遺跡略測図	28
第20図	起し又遺跡表採縄文式土器実測図	28
第21図	小泉遺跡出土土器	30
第22図	伊吹山頂遺跡出土石器実測図	31
第23図	松尾寺遺跡出土梵鐘実測図	32
第24図	赤谷遺跡出土土器実測図	33
第25図	祢宜田遺跡出土土器実測図	34
第26図	神戸遺跡表採土器実測図	35
第27図	十蓮寺遺跡表採土器実測図	35
第28図	大清水遺跡出土石器実測図	36
第29図	長福寺遺跡出土陶器実測図	37
第30図	寺林遺跡表採土器実測図	38
第31図	甲津原採集石器実測図	39

第32図	その他町内出土遺物	40
第33図	杉沢遺跡出土石器実測図①	47
第34図	杉沢遺跡出土石器実測図②	48
第35図	杉沢遺跡出土石器実測図③	49
第36図	杉沢遺跡出土石器実測図④	50
第37図	杉沢遺跡出土石器実測図⑤	51
第38図	杉沢遺跡出土石器実測図⑥	52
第39図	杉沢遺跡出土石器実測図⑦	53
第40図	杉沢遺跡出土石器実測図⑧	54
第41図	杉沢遺跡出土石器実測図⑨	55
第42図	杉沢遺跡出土石器実測図⑩	56
第43図	杉沢遺跡出土石器実測図⑪	57
第44図	杉沢遺跡出土石器実測図⑫	58
第45図	杉沢遺跡出土石器実測図⑬	59
第46図	杉沢遺跡出土石器実測図⑭	60
第47図	杉沢遺跡出土石器実測図⑮	61
第48図	杉沢遺跡出土石器実測図⑯	62
第49図	杉沢遺跡出土石器実測図⑰	63

写真目次

写真1	永正三年銘五輪塔	8	写真4	石造板碑(白山神社)	26
写真2	井の田遺跡	15	写真5	伊豆畑遺跡出土土師器	33
写真3	旧太平寺集落風景	21	写真6	天清城跡遠望	36

図版目次

図版1	杉沢遺跡付近から伊吹山を望む	図版5	(上) 弥高寺遺跡
図版2	(上) 姉川上流・甲津原集落		(下) 伊吹山頂
	(下) 調査風景(表面採集)	図版6	(上) サナギ谷遺跡
図版3	(上) 杉沢遺跡調査風景		(下) 治山遺跡
	(下) 杉沢遺跡甕棺出土状況	図版7	井の田遺跡出土縄文式土器
図版4	上平寺城古図		

第1章 調査の経過

伊吹町では、近年各種の開発が進んでいる。ほ場整備事業を例にとれば、春照、高番、杉沢、村木、大清水で既に実施されている。今後においても、公共・民間をとわず開発行為は増加の一途をたどるものと思われる。

このように、埋蔵文化財破壊の危機に直面している現状の中で、改めて遺跡の所在ならびに範囲の確認をすることが急務となった。そこで、平成元年度より3ケ年にわたり、町内遺跡の詳細分布調査を実施することとなった。この調査によって、長期的展望に立脚した文化財保護行政を進めるために基礎資料となる遺跡台帳を整備し、今後の土木工事等にそなえ、埋蔵文化財の保護をはかっていくことを目的として本調査を計画した。

今回の分布調査は町内全域をその対象地域とし、小学校の学区に分けて各年次に踏査を実施した。

(平成元年度) 春照学区

(平成2年度) 伊吹学区

(平成3年度) 東草野学区

踏査の基本姿勢として、『滋賀県遺跡地図』等にもとづく周知の遺跡の位置再確認、現状の把握および新しい遺跡の発見に努めた。しかし、実際に分布調査をおこなっていく過程で時間的制約等の問題が生じ、平野部の水田・畑地における地表面採集が中心となり、町域の大部分を占める山間部は未踏査区域として残ることになった。このような区域については、後日機会をみて補っていきたい。

踏査に際しては、2,500分の1地図を携帯し、随時遺跡の記入をおこなった。踏査期間は、稲刈りの終了と山林に入りやすい時期ということで、毎年11月～3月に実施した。しかしこの期間は降雪日が多く、北部山間部では雪が春まで残り、思うように踏査ははかどらなかった。

現地踏査後の整理にあたっては、採集遺物の実測とともに、杉沢遺跡を中心として、個人の所有物や過去に公表されていない遺物の所在地確認と遺物実測に集中してあたった。

最後に、本町では現在町史編纂事業が進められており、山間部の寺社跡などの精力的な調査によって、その成果物刊行の暁には新たに遺跡として加わるものがあるものと思われるが、迅速に対応していきたい。

第2章 伊吹町の地勢

滋賀県坂田郡伊吹町は、近江盆地の北東縁部、滋賀県と岐阜県の県境として南北に連なる伊吹山地の西に位置している。北西および西は、姉川をはさんで伊吹山と対峙する七尾山とその北方につづく山系によって東浅井郡浅井町に接し、南西および南は坂田郡山東町に、東側は伊吹山地を境として岐阜県となり、北から揖斐郡坂内村、同郡春日村、不破郡関ヶ原町に接している。

町域は、東西7km、南北22.7km、面積109.17km²で、帯状に南北に延びる。そのうち山林が約85%を占め、伊吹山系を中心に海拔600m以上の地域が町の総面積の50%と、地形的に山岳部が多い。町内の最高地点は、県下最高峰である伊吹山山頂の1,377mで、最も低いのは、村木地先の138.2mである。主要河川としては、町内最北の伊吹山地新穂山付近に水源をもつ姉川がある。途中瀬戸谷川・足俣川・板名古川等を合わせて南北に貫流し、伊吹の集落をでたところで大きく西に流路を変えて、湖北平野を潤しながら琵琶湖へそそぐ。また、伊吹山に水源をもつ弥高川は、上野から流れる大谷川・春照からの油里川と合流し、山東町で天野川に入り琵琶湖へ流れる。同じく伊吹山から発した政所川も天野川に流入する。特異なのは藤古川で、伊吹山南麓に発した後、東流して関ヶ原に入り、牧田川・揖斐川を経て伊勢湾にそそぐ。

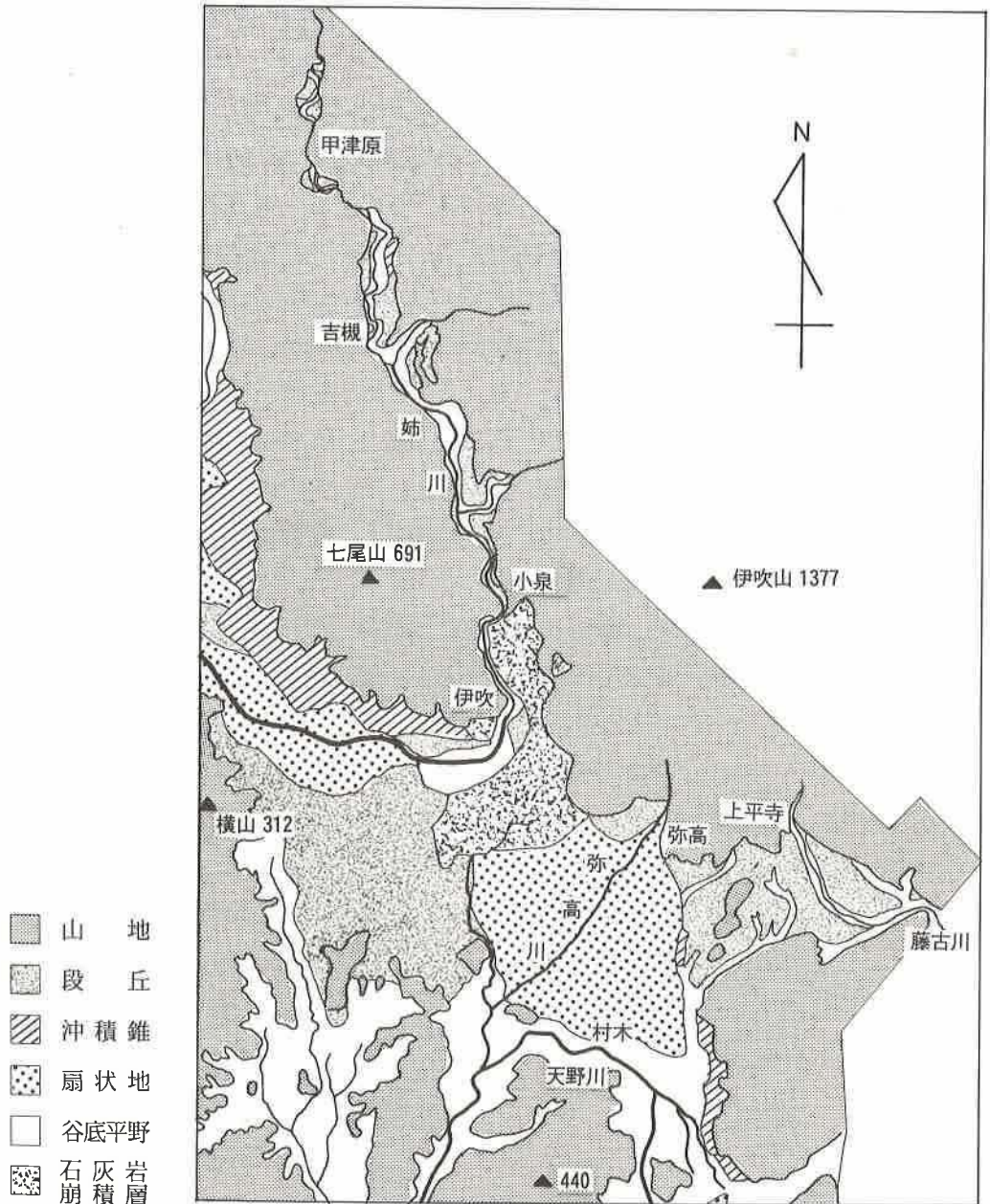
地形的にみると、町の北中部は、姉川とその支流がつくる河谷部からなり、とくに姉川の源流に近い北部では、穿入蛇行の壮大な峡谷美が形成されており、その上流の谷底平野に甲津原、下流に曲谷の集落が立地している。姉川の中流部では、2段の河岸段丘が発達しており、とくに下位の段丘はよく連続し、現河床からの比高は5~15mで、段丘面上には水田が開け、北から甲賀・吉槻・上板並・下板並・大久保・小泉・伊吹などの集落が立地している。伊吹山南麓に広がる町南部は、石灰岩崩積層に立地する旧太平寺・上野、弥高川と政所川が形成する連合扇状地の扇頂部に大清水・弥高、下縁部に春照・高番・杉沢・村木、藤古川が形成する連合扇状地に上平寺・寺林・藤川などの集落がある。

また、町域南端の伊吹山と鈴鹿山地北端の霊仙山塊の間には、南北5~7kmの幅で地溝状の「関ヶ原低地帯」が発達している。ここは、近江盆地と濃尾平野、伊勢湾地方を結ぶものであり、日本列島における代表的な通谷の一つであり、古代から現代まで、西日本と東日本を結ぶ交通の要衝である。

山地の地質は、上板並より北、甲津原付近のみ花崗岩からなっているのを除けば、すべて古生層で、その中でも伊吹山から北北東に広がる相当広大な石灰岩層があるのが特色で

ある。低地は、いわゆる沖積層からなっているが、太平寺を中心とした石灰岩崩積層や、伊吹山南麓の扇状地堆積物の分布が特色となっている。

気候的には、裏日本気候区の北陸型に入り、特に冬期の季節風は日本海岸からまともに伊吹山腹から頂上部一帯に衝突し、ここで大量の降水を見ることになり、寒期には山麓一帯に豪雪をもたらす結果となる。



第1図 伊吹町周辺の地勢図

第3章 遺跡の概要

第1節 主要遺跡の概要

ここでは、過去に発掘調査が実施された遺跡、ならびに出土遺物や遺構により遺跡の性格がある程度把握できる遺跡を取上げ、その概要について述べる。

1 ^{かみのきづか}神ノ木塚遺跡 (遺跡番号49)

村木の東南部、字神ノ木塚の水田中に所在していた神ノ木塚遺跡は、明治年間の発掘で多量の玉砂利が出土したことから、経塚遺跡として伝承されてきた。

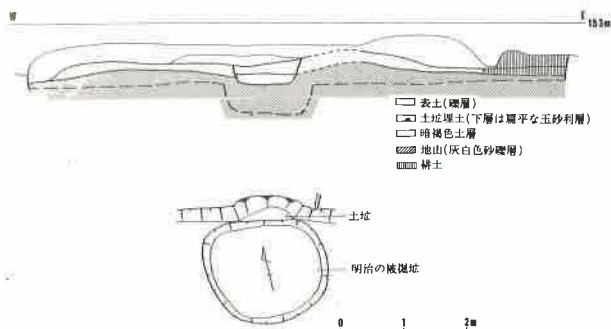
昭和五十五年に当遺跡が団体営ほ場整備工事の範囲内に入ることに伴い、県教育委員会による発掘調査が実施された。

発掘当時の状況は、周囲の水田によって変形した12m×7m程の変五角形状で、最高50cm程の盛り上がりを示していた。ここに東西、南北2本の直交するトレンチを設定して、遺構・遺物等を確認することにより、神ノ木塚の性格、年代の究明が行われた。

確認された遺構は、明治年間の被掘墳及び玉砂利が出土したと伝えるものに関連すると考えられる土壌で、明治年間の被掘墳は、直径1.6mの正円形のものであった。土壌は、この被掘墳により破壊されており、わずかにトレンチ断面付近に残るのみであった。土壌の底には20cm程の厚さで、径5cm程の玉砂利が充填されていた。

遺構からの出土遺物は、被掘墳より出土した土師器の小皿片と五輪塔片のみで、当遺跡の年代、性格を考える上で有用な遺物ではあるが、十分なものではない。

調査の結果として、神ノ木塚遺跡が長さ2m以内、上端幅1.1m、深さ0.4mの長方形の土壌で、横断面凹字形を呈し、底に玉砂利を充填したものであることがわかった。また、出土した五輪塔あるいは土師器の小皿が土壌に伴うものと考え、墓跡でないかという推察ができるにとどまる。



第2図 神ノ木塚遺跡断面土層図及び土壌実測図

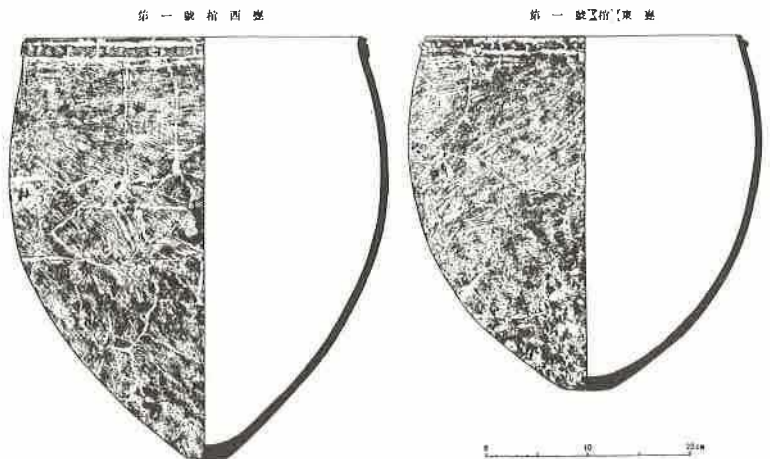
2 杉沢遺跡 (遺跡番号44)

杉沢集落の北西を除くほぼ全域に及ぶ範囲で杉沢遺跡が所在する。明治以来、杉沢では石器が出土することが知られ、樋口元氏をはじめ地元の方々の熱意により現在まで良好な形で多くの遺物が保管されている。研究史としては、大正十三年に中川泉三氏が御物石器と磨製石斧を『考古學雜誌』に紹介しているのをはじめとして、昭和三年に島田貞彦が石器類(御物石器1、磨製石斧9、石棒2、多頭石斧1)を紹介しており、その後、昭和十一年には粕倉亮吉も石器を中心に杉沢遺跡について述べている。しかしこれに伴う土器については、「縄紋式なるを辛うじて認識するに止まっている」(島田)程度であった。

昭和十三年小林行雄らにより、「これらの石器を伴出する土器の性質を確かめる」目的で発掘調査が行われた。調査の結果、2組の縄文時代晩期後半の合口甕棺を検出し、縄文時代の葬法の一つとして広く紹介された。この時の調査では「土器の様相をなるべく全面的に知りたいと願った当初の希望は果すことが出来なかった」が、当時の調査報告には中期か後期前半の土器片が3点示されており、杉沢遺跡が縄文時代の終わり頃だけの遺跡でないことは明らかであった。

昭和六十三年には場整備事業に伴う発掘調査を集落の南端で実施した。この時の調査では縄文式土器や石器が投棄された大きな土壌が検出され、その他の遺構はわずかなピットのみであった。しかし、土器は二枚貝による調整を施した無文の深鉢を主体に、櫃原式紋様の浅鉢も比較的多く含まれ、縄文時代晩期前半の良好な一括資料である。この結果、時期と場所を代えて集落が営まれていたことが判明した。土器の中には中部山岳地方の特色を持つ浅鉢が1点あり、東日本との広い交流圏の存在をも知ることができる。平成三年の範囲確認調査では、平安時代の遺構面と共に、今まで未調査であった集落から東の部分で、わずかであるが遺物と遺構を検出し遺跡の広がりの可能性を認めた。

石器については第4章でふれる。



第3図 杉沢遺跡出土甕棺実測図(文献7より)

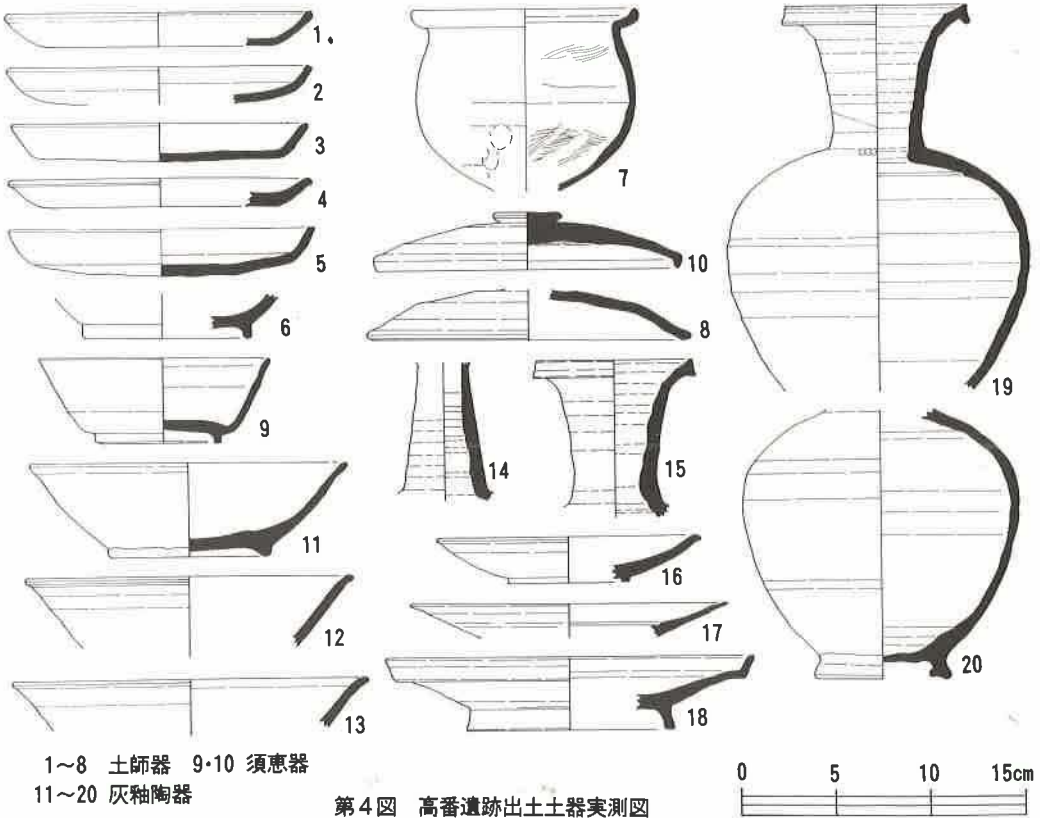
3 たか ばん 遺 跡 (遺跡番号42)

高番遺跡は、従来縄文時代の遺跡として周知されていた。今回の分布調査によって小字千万歳、縄手を中心に須恵器、灰釉陶器などを表採したことから、遺跡の継続した時代とその範囲がさらに広がることが予想された。

高番遺跡からは、縄文時代の敲石、石鏃、石斧、石棒、勾玉が出土したと『改訂近江國坂田郡志』に記されている。勾玉は昭和十二年八月に小字北出で発見されており、「質は硬玉にて頭部半分は乳黄色、半分は淡青色、扁平を特徴とし」、縦2.8cm、頭部最広幅1.7cm、厚さ7mmを計る。さらに今回の分布調査中にサヌカイト製の石鏃を縄手の水田中で採集した。(第32図 5. 石鏃、6. 勾玉、7. サヌカイト片)

平成二・三年に実施した縄手地区の調査では、建造物などの遺構は検出されなかったものの、自然の落ちこみ状遺構から弥生時代から平安時代中頃にかけての遺物が出土した。

調査区は弥高川扇状地の緩斜面上にあり、土器の出土した状況から、比較的近いところから流されてきたものと考えられ、調査区の上手にこれらの遺物が所属した遺跡がある



ものと考えられる。また、出土した遺物は弥生式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗と鉄器の刀子である。土師器と須恵器は8世紀末から9世紀初めのものである。灰釉陶器は10世紀のものと考えられる。遺物の中には磨かれた上質の土師碗や、灰釉碗の底裏に墨の付着した転用硯とみられるものがあった。また仏器として使用される浄瓶も出土していることから、遺物が所属した遺跡は単なる一般集落ではなく、富農層や寺院的遺跡である可能性も考えられる。本遺跡が町内の遺跡群の中でどのような位置付けになるか判らないが、縄文時代以降の遺跡が明らかとなっていない伊吹山南麓の扇状地で、弥生時代から平安時代にかけての資料の出土は貴重である。

最後に、高番遺跡周辺で製鉄に伴う鉄滓、フイゴ羽口や土師器、焼土などが発見されたことが樋口清之氏の文献中に記されている。詳細は不明であるが、世に言われている伊吹山麓の古代製鉄文化に関わるものであり、今後の調査が期待される。

4 上平寺城跡 (遺跡番号34)

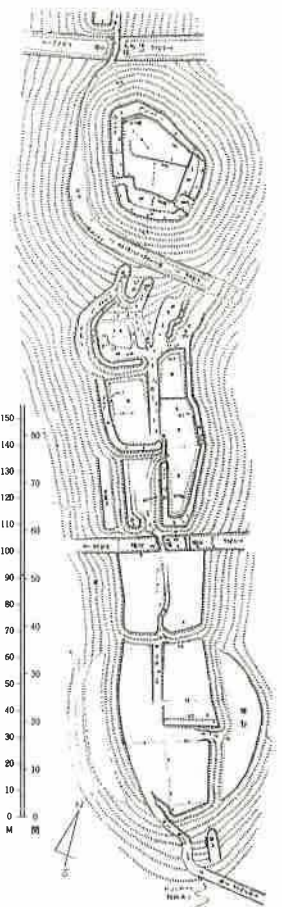
滋賀県と岐阜県の県境に近い上平寺の北西背後の標高約660m、比高約360mの伊吹山腹尾根上に所在する上平寺城跡は、上平寺館の詰め城である。また、西方の谷を隔てた尾根上には、標高約700mの地点に弥高寺跡が所在し、『今井軍記』によると、

「明応五年（1496）六月治部少輔殿御出陣とき中務少輔殿（京極高濂）弥高寺にまします御時……（今井）清遠一身引切弥高寺の御陣へ馳参り」

とあり、京極氏の城砦として利用されていたようである。近年上平寺城跡と弥高寺跡を総合して「一城別郭の城」、あるいは周辺の遺構を含めて「弥高上平寺城塞群」との捉え方もある。

上平寺城は別称を刈安尾城・桐（霧）ヶ城・上平城といい、京極氏の築営である。京極家は代々伊吹山西麓の太平寺城や、柏原城（山東町）・勝楽寺城（甲良町）を時に応じて居城としていたが、15代高濂が上平寺館を居館として構築整備したのと同時に詰め城として当城が整備されたものであろう。

歴史的概要を文献からみると、明応四年（1495）に京極政高（政経）が弥高山より出兵したことが『船田後記』にあり、翌年には前述したような『今井軍記』の記事がある。大永三年（1523）



第5図 上平寺城跡縄張図 (文献50より)

三月には浅井町大吉寺梅本坊公事に際し、北近江の国人土豪衆が守護の京極高澄を攻撃し刈安尾城が焼かれたように伝えられている。その後主権が浅井氏に移ってからも、江濃の境目に位置する当城は浅井方の城として機能していたようで、『信長公記』の元亀元年(1570)六月十九日の条に、

「かりやす……に要害を構へ候」

「かりやす……退散なり」

とあり、刈安尾城に立て籠った浅井方が織田信長の招降に応じて開城したことが記されている。

城跡の規模は東西約54m、南北約306mで、北端には幅約9m、主郭からの深さが約23.5mもある堀切があり、山頂への尾根を切断している。主郭は土塁で固められ、中央の郭群にも土塁が多用されており、枳形状を呈する部分がある。遺構は町内の中世城館の中では比較的良好な状況で残っているが、笹の密生地で冬季以外の踏査は困難である。

5 じょうへいじいせきぐん 上平寺遺跡群 (遺跡番号58・59・60)

上平寺遺跡群を構成するのは、上平寺館遺跡・上平寺南館遺跡・上平寺遺跡である。上平寺館遺跡は、伊吹山寺関連寺院の上平寺から中世の京極氏の館へと継続する遺跡であると考えられる。また、上平寺遺跡は上平寺の坊跡ならびに城下町の遺跡である。ここでは、城館としての上平寺遺跡群について記述し、寺院としての上平寺については第2節に取り上げた。

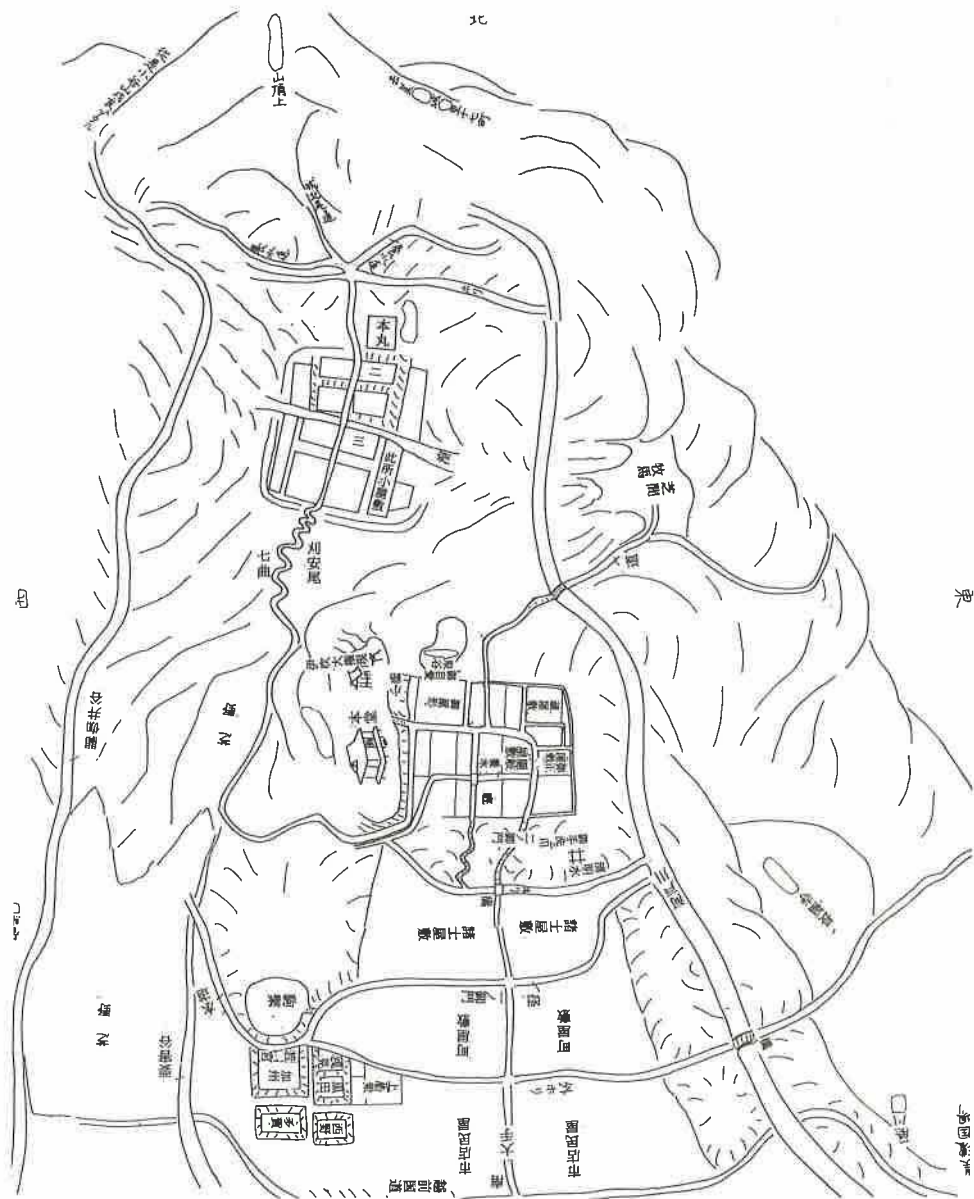


写真1 永正三年銘 五輪塔

上平寺には本来同名の寺院が所在し、京極氏の館跡である上平寺館はその寺院施設を利用したものであると考えられる。ここは西側を尾根と谷、東側を藤古川の谷ではさまれた自然の要害に立地しており、館として整備したのは第15代高澄と伝えられている。その主要年代は京極政経・材宗との和議が成立した永正二年(1505)から国人一揆により上平寺城が焼かれた大永三年(1523)の可能性が高い。現在遺跡地にある伊吹神社の南側に一族の女人の墓といわれている五輪塔群があるが、その中には「浄光院殿芳室宗□大禅尼 永正三年四月七日」銘のものなどがある。

上平寺城館と城下については近世に作られたと思わ

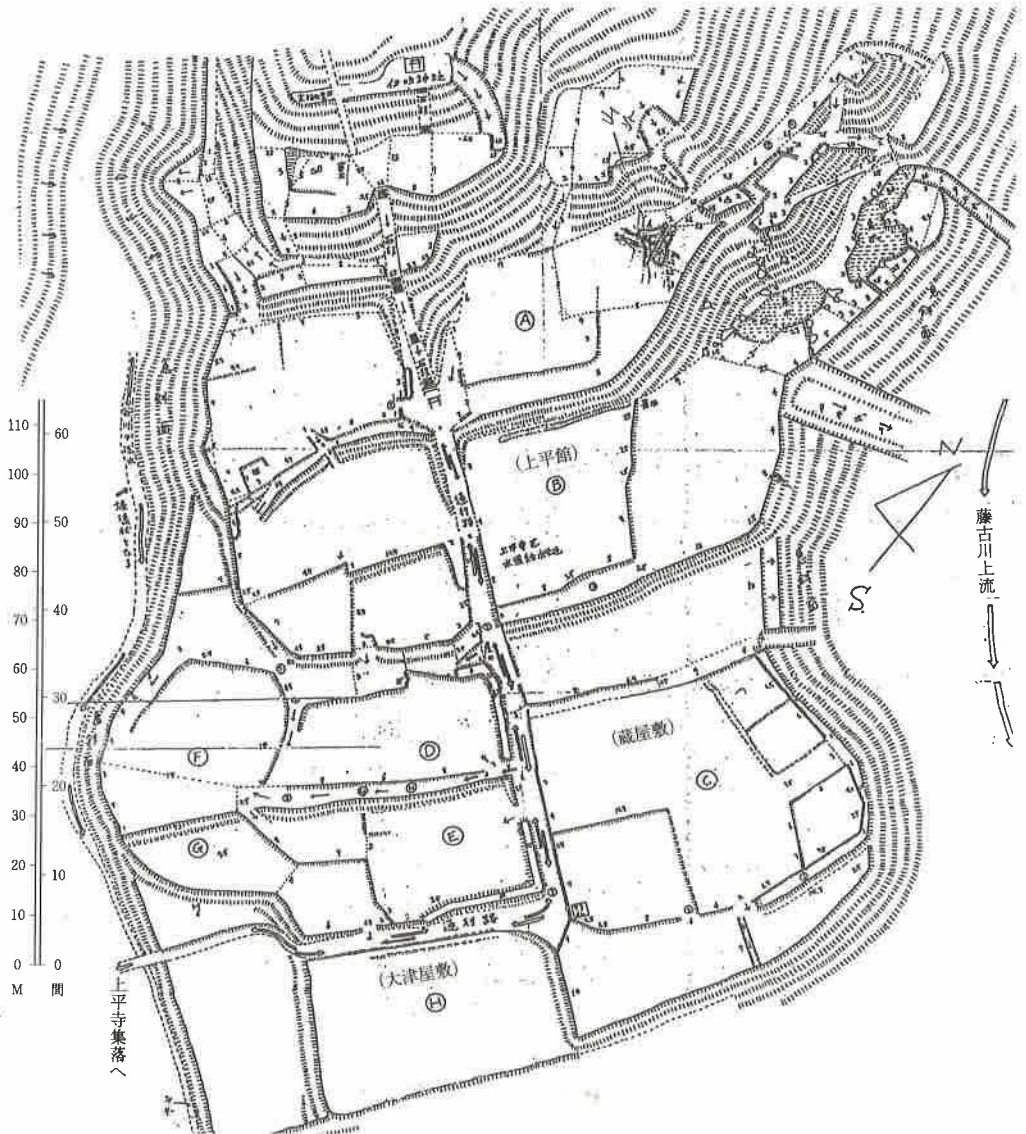
れる絵図があり（図版4参照）、次の5つの区画に大別できる。①「刈安尾」「本丸」等と記された山城の部分、②「ホリ」内の「御屋形」「隠岐屋敷」「弾正屋敷」等の京極氏の館と重臣屋敷の部分、③「外ホリ」内の「諸士屋敷」「町屋敷」等の家臣団と商工業者の居住区と思われる部分、④「越前口道」（北国脇往還）沿いの「市店民屋」部分、⑤西の尾根上の「若宮」「加州」「浅見」「黒田」「多賀」「西野」「上臈衆」等と記された重臣屋敷部分である。①は上平寺城跡、②は上平寺館遺跡、③④は上平寺遺跡、⑤は上平寺南館遺跡に該当する。



第6図 上平寺城下古図（文献48より）

上平寺館遺跡は集落の北の溝（内堀）から伊吹神社境内にいたるまでの間に、第7図のように通路の両側に平坦地が連続し、一部に土塁・石垣を備えた遺構が存在する。また京極氏の館跡の奥には2つの池と大きな立石を配した庭園跡が残り、中世大名の庭園跡として貴重である。また、上平寺南館遺跡は集落の西側の台地上、小字高殿に展開している。広域農道に分断されているものの、ここにも土塁と空堀を備えた郭が存在する。ここは城下の入口にあたり、城下の守りとして重要な位置をになった部分であろう。

上平寺から寺林にかけての一带および藤古川を隔てた東側をも含めて、以上のように県下でも有数の中世城館とその城下町遺跡であり、三つの遺跡を中心に周辺の遺跡を総合してとらえ解明していくことが今後の課題である。



第7図 上平寺館遺跡略測図 (文献50より)

6 井の田遺跡

(遺跡番号51)

井の田遺跡は伊吹山南麓の大清水に所在する。大清水集落は政所川と弥高川が形成する連合扇状地の扇頂部に位置する。

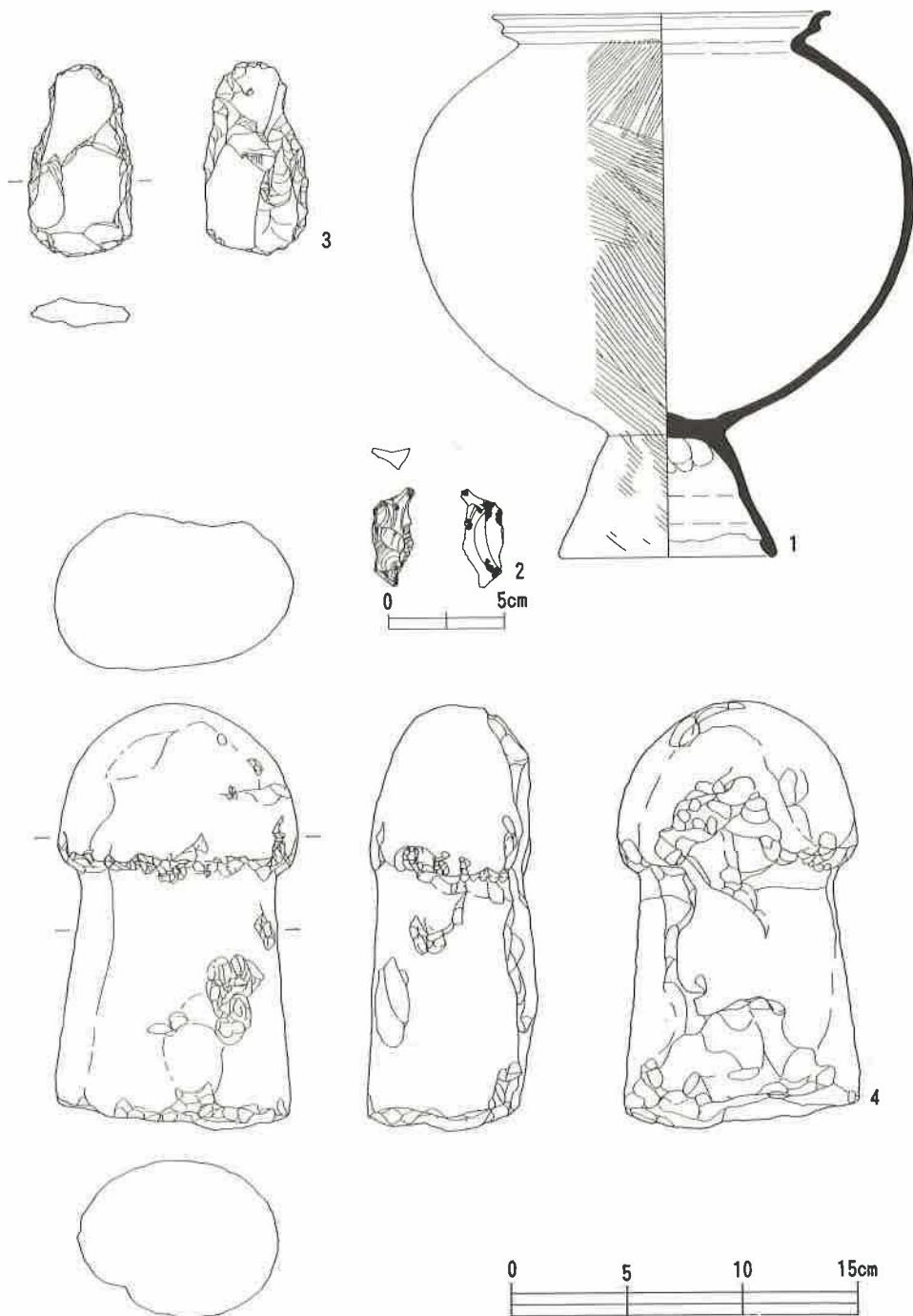
『改訂近江國坂田郡志』に本遺跡から出土した弥生式台附埴についての記述がある。それによると、昭和十二年三月二十九日に春照村大字大清水小字井の田に於て、水田畦畔周囲に石垣築堤作業中に偶然土器を発掘し、京都大学の小林行雄氏に指導を依頼したところ尾張系薄手弥生式台附埴との教示を得たとある。土器は『弥生式土器聚成図録』に紹介された後、『土師式土器集成 本編1』において古墳時代前期の台付甕形土器として取扱われている。この中では大清水遺跡出土と記されているが、井の田遺跡として扱うのが妥当であると思われる。土器は高さ約23.5cmで、胴部最大径はその中位よりやや上にあり、頸部ははげしく屈曲して、外反する小規模の口辺部がつく。口辺部には特徴的な有段が認められる。器面には斜行する刷毛目は認められるが、横なでのものはない。東日本的な土器である。(第8図1)

また、平成元年に遺跡の周辺で団体宮ほ場整備が実施された際、縄文式土器をはじめとする遺物が採集された。残念ながら工事はほとんど終了しており、遺跡の性格を把握することはできなかった。

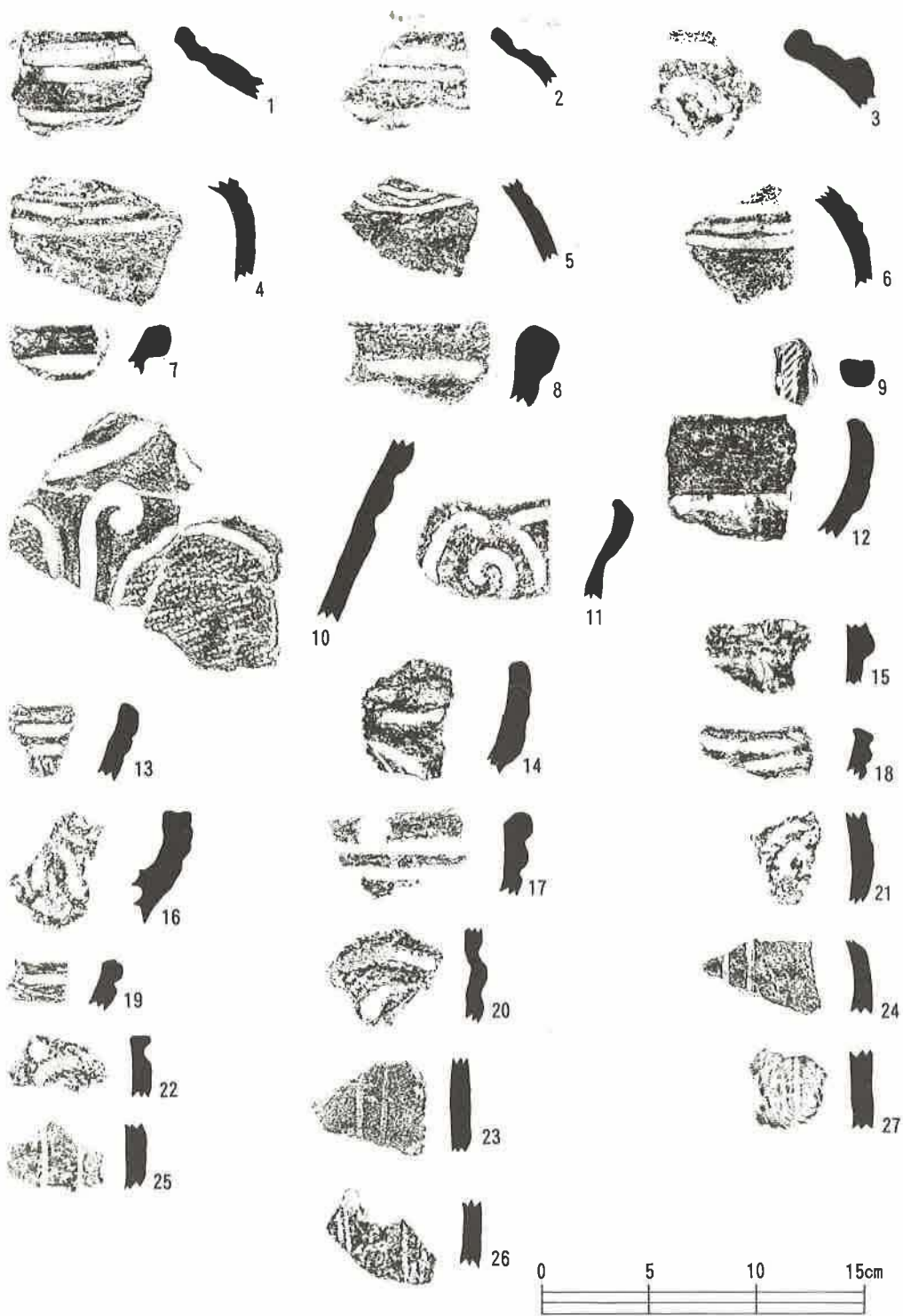
採集した遺物は、縄文式土器がほとんどで、土師器、須恵器、石器がわずかにあった。縄文式土器に関しては縄文時代中期の後半から終末を中心として、若干後期中葉から後葉のものも出土した。地域的には東海系の土器が主体をなし、ごく少量畿内の土器が伴う。本遺跡は地理的に東西の接点に位置し、基本的には美濃地方の土器と差はみられない。

東海系の土器としては、咲畑式、神明式、取組式、島崎皿式、山の神式までほぼ継続して存在する。これらを中心に瀬戸内の里木Ⅱ式、在地の醍醐式が含まれる。その他、取組式あたりに並行すると思われる垂下沈線をもつ土器や、醍醐式あたりに並行すると思われる櫛状紋の土器、縦に蛇行する沈線をもつ土器、頸胴部に沈線をもつ土器などがあり、中期の土器群を形成する。また後期の土器には、北白川上層式と考えられるものや、北陸系のものも含まれる。さらに本遺跡では、黒曜石(2)が1点出土していることが注目される。また、石器は撥型の打製石斧(3)と石棒(4)・磨石が出土した。

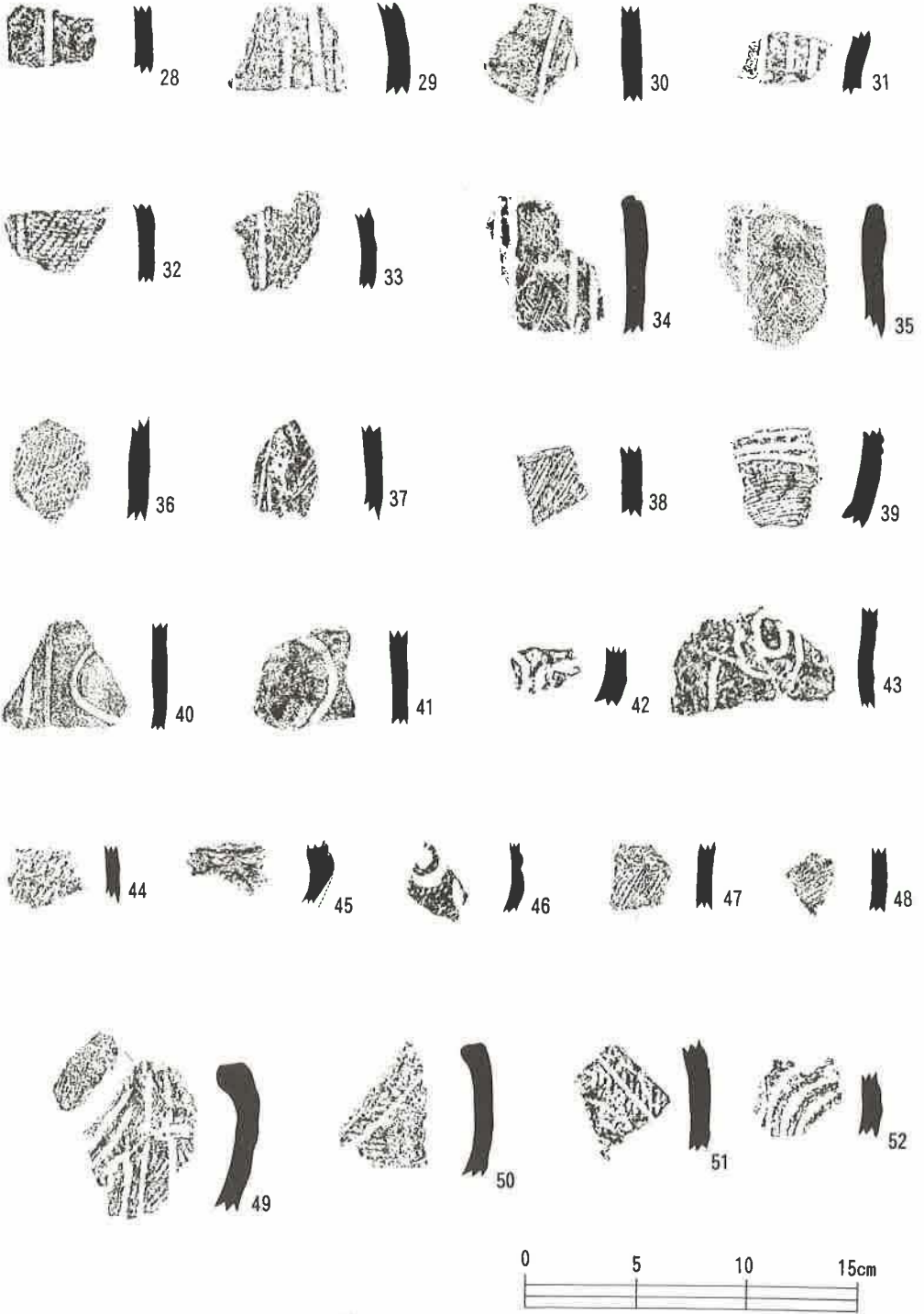
周辺には、二段にくびれた頭部をもつ大型の石棒が出土した大清水遺跡や、異形局部磨製石器が採集されている東野遺跡などがある。井の田遺跡は縄文時代中期から後期にかけての伊吹山麓扇状地上の中核となる遺跡ではないだろうか。



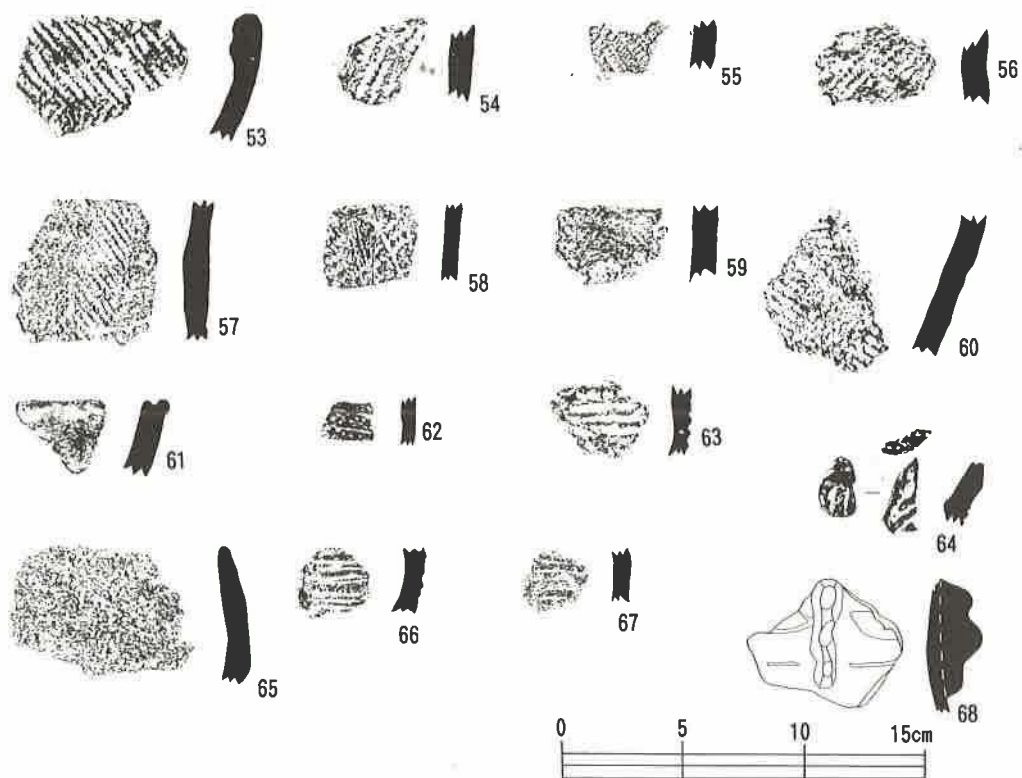
第8図 井の田遺跡出土石器・土器実測図



第9図 井の田遺跡出土縄文式土器実測図① (中期 東海系土器)



第10図 井の田遺跡出土縄文式土器実測図② (中期の土器)



第11図 井の田遺跡出土縄文式土器実測図③ (中期・後期の土器)



写真2 井の田遺跡

7 やたかじ 弥高寺遺跡

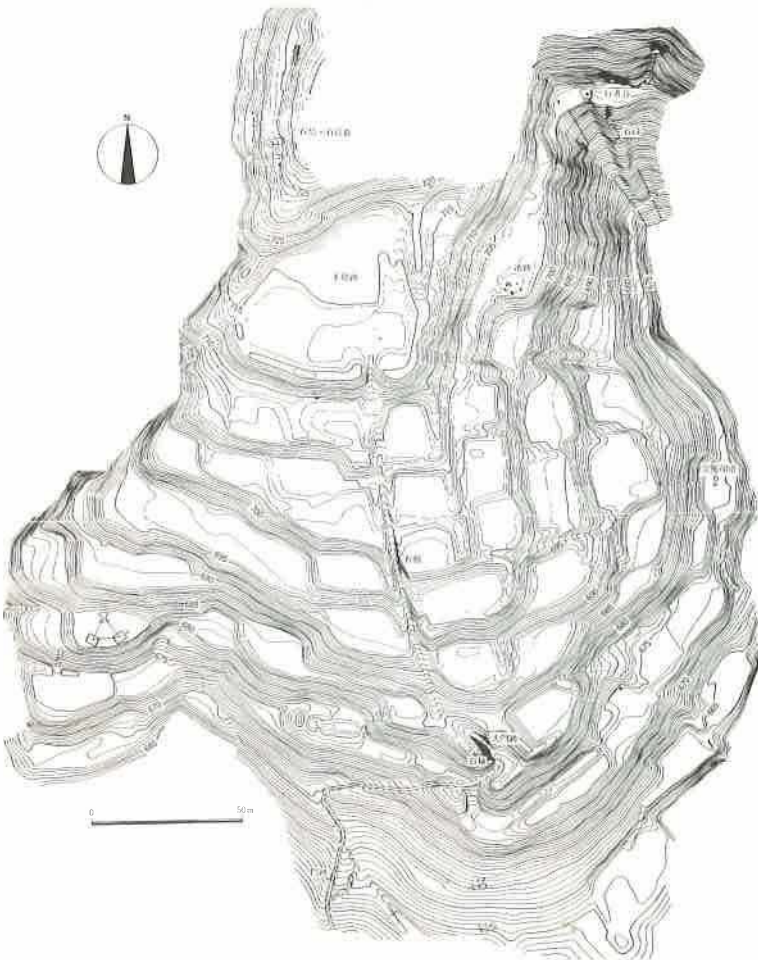
(遺跡番号33)

伊吹山（標高1377m）は、古くから山岳仏教の聖地として知られ、平安時代には比叡山、神峯山、金峯山などと共に七高山の一つに数えられていた。この山に仁寿年間（851～854）三修によって建てられ、のち展開していったのが地元で伊吹四大寺等と呼ばれる山岳寺院群である。その中心寺院の一つである弥高寺の遺跡は、伊吹山の南に張り出した尾根上の標高約650～750mを計る場所に所在する。

『三代実録』によると、伊吹山寺は元慶二年（878）二月十三日に国家公認というべき定額寺に列せられている。したがってこの頃には規模も内容もある程度整備されたものになっていたと考えられる。『観音寺文書』中には、徳治三年（1308）四月十日に弥高寺・太平寺間の本末寺の相論について「伊福貴山弥高太平両寺衆僧和与状」があり、当時この

両寺が最も勢力を持っていたことが伺える。また、嘉暦二年（1327）正月二十二日に後醍醐天皇の令旨が伊福貴社に届き、その中に弥高・長尾・観音寺の名が見える。

その後明応八年（1499）正月二十四日と永正九年（1512）六月の2度焼失したと伝えられるが、天文五年（1536）五月の「伊富貴大菩薩奉加帳」、天文九年（1540）「伊吹三宮奉加帳」（『伊夫気文書』）には、弥高寺の坊名が見られる。



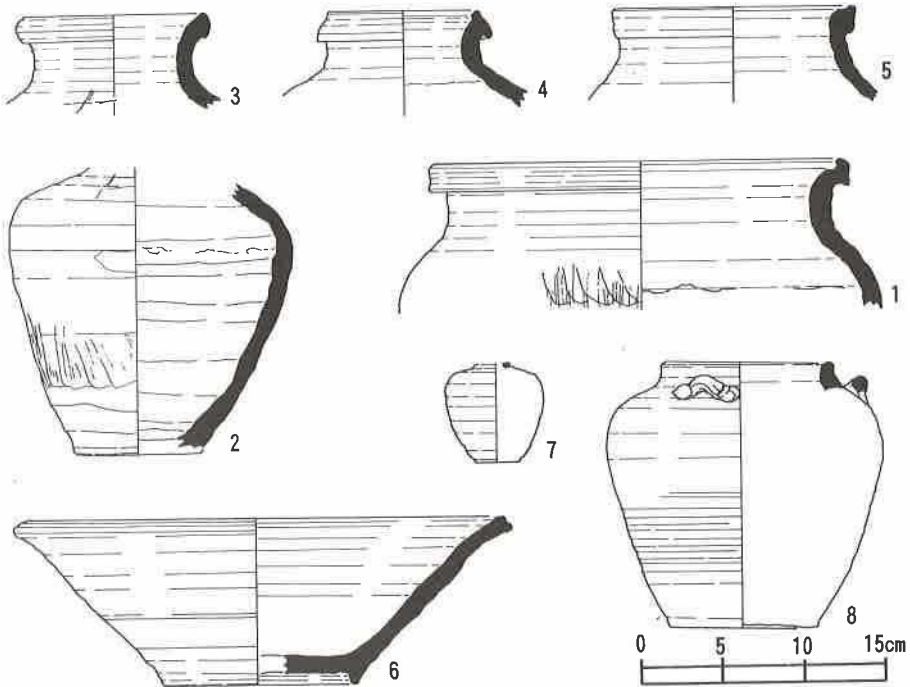
第12図 弥高寺跡測量図

しかし、最終的には天正八年（1580）に山の西麓に移ったと言われ、現在は悉地院、安養院がその法灯を守る。

現存する遺構は、古代から中世にかけての山岳密教寺院の典型的な遺跡として、昭和六十一年に県史跡に指定された。東西約64m、南北約55mを測る本坊跡を頂点に、約56の坊跡と門跡等が、南北約300m、東西約250mの範囲に扇形に広がっており、地元では弥高百坊と呼んでいる。本坊跡の傍には池を備えた坊跡や入定窟の残る修行の場も遺存している。また、本坊跡の背後には五輪塔・石仏からなる墓地がある。

さらに弥高寺遺跡をとらえるとき、「上平寺城跡」の項でも述べた通り、寺自身や京極氏が城郭としての機能を持たせたことを考慮しなくてはならない。それは一部郭の土塁や大門跡の虎口状遺構、本坊跡背後の2条の堀切などに見られる。

昭和六十年の墓地跡の試掘調査では、13世紀後半～15世紀末、16世紀初め頃までの遺物が検出された。1は常滑の中型甕、2、3は越前の壺で肩部に「十」のへら刻みがある。4は常滑の壺、5は同じく小型甕、6は大平鉢である。7は瀬戸小壺、8は瀬戸の鉄釉三耳壺である。出土した遺物から、弥高寺の最盛期が室町時代であったことがうかがわれ、また永正九年の兵火で焼失したのち、山上の機能の大半が麓へ下ったことを推測させる。



第13図 弥高寺跡出土陶器実測図

東野遺跡は伊吹山南麓の弥高に所在する。集落は弥高川が形成する扇状地の頂点に位置し、弥高寺の登り口に当たる。

伊吹山南麓の扇状地上には、杉沢をはじめ多くの縄文遺跡が所在することが知られているが、従来弥高には、弥生時代の集落として周知されてきた弥高遺跡が知られているだけであった。しかし今回の分布調査で、第14図のように石鏃、石匙、チャート片などが善通寺に保管されていることが確認できた。また、杉沢の樋口家資料中にも小字東野、川畑、堂ノ前、平野などで、石鏃が採集されていることが精巧な図付きで紹介されている。

第14図のうち1と8は樋口家資料中の図と対比することが出来る。それによると両方も小字東野で採集されたもので、善通寺保管のものが東野出土と言われているのと符合する。

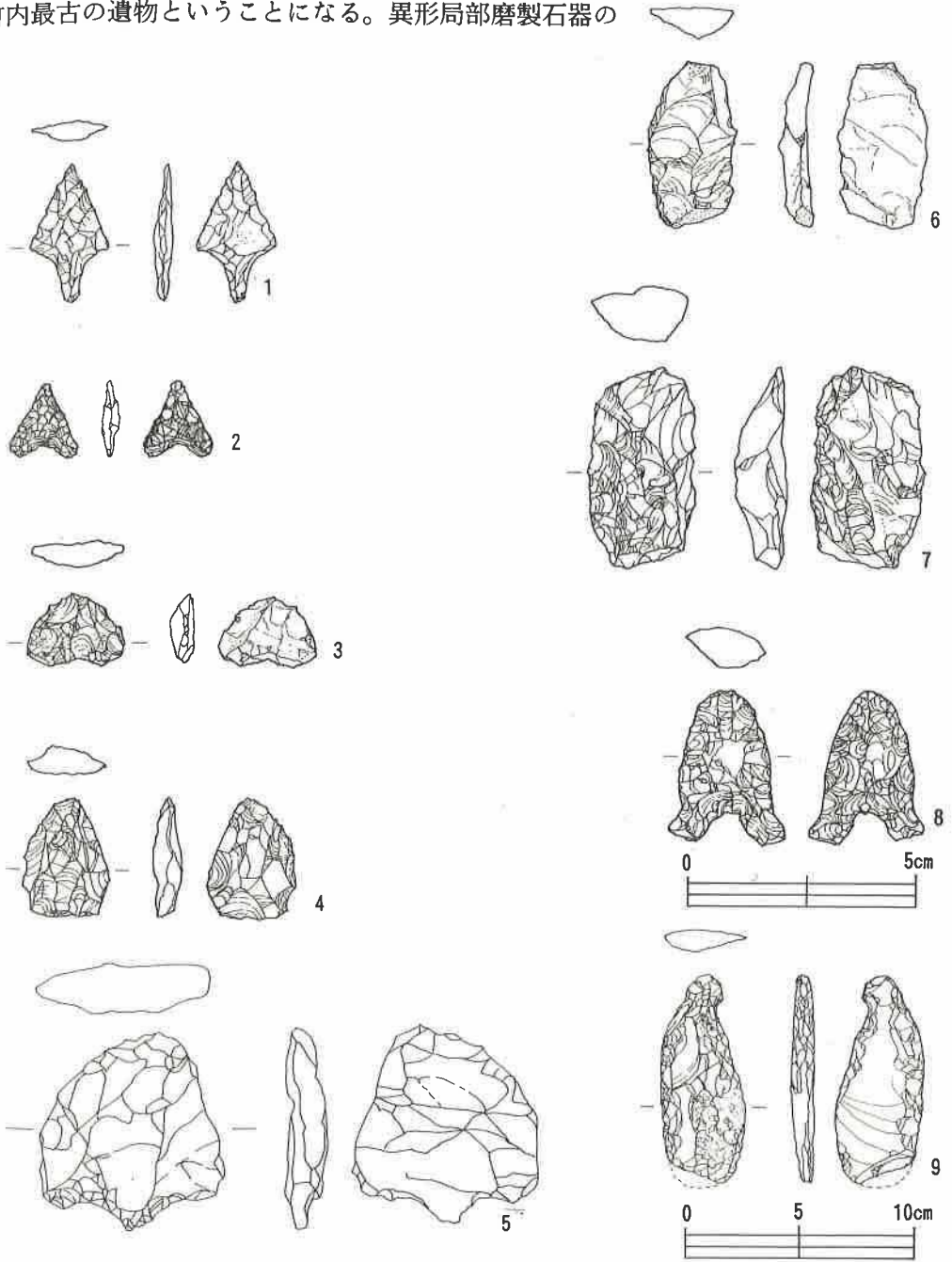
1～4は石鏃である。1は基部が突出する形の有茎石鏃でサヌカイト製のもの、2、3は、小形の無茎鏃で基部に抉りが入り、2は三角形を呈す。4は直線的な基部の無茎鏃である。5は石鏃の未製品とも考えられ、基部になると思われる部分に調整剥離が施されている。1を除き石質は青または赤系色のチャートである。6、7はチャート片である。9はサヌカイト製の石匙で、長身縦型の形態をもつ。先端を欠いているが、丸味を帯びていたものと考えられる。

遺物の中で注目すべきものは8であろう。これは青灰色に白が入ったチャート製の“異形局部磨製石器”または“異形部分磨製石器”と呼ばれる石器であると考えられる。この石器の特徴に対し安達厚三は次のような見解を述べている。

1. 形態は通常先端が丸味を帯び、基部に抉りを入れて石鏃状の脚部をつくりだす。
2. ずんぐりしたのと細身のものがあり、大きさは石鏃大から10cm近くのものまでである。
3. 剥片の周辺は丹念に調整するが、中央部は第1次剥離面または節理面とみられる平坦部を残す。
4. 石匙のつまみ部のような脚部は、両側縁との接点で少しくびれるのが普通である。
5. 通常の磨製石器のようにきれいに磨きあげられるのではなく、表面を軽く研磨するだけで、全体に手ずれかローリングによって磨滅したようにつつつしている。
6. 本石器はほとんどチャートを素材としている。用途・機能については研磨法が特殊であり、先端も丸くなっていることから鏃や槍としての機能をもつとは考えられない。
7. 異形局部磨製石器の所属時期は押型紋土器の終末期に位置づけられ、大小の時期差は

認められない、等。

本資料は、1～5の形態と6の材質についてほぼ該当する。7については表採遺物であるのでわからないが、逆にこの石器が縄文時代早期の押型紋土器の終末期にほぼ限定できることを考えたとき、町内最古の遺物ということになる。異形局部磨製石器の



第14図 東野遺跡出土石器実測図

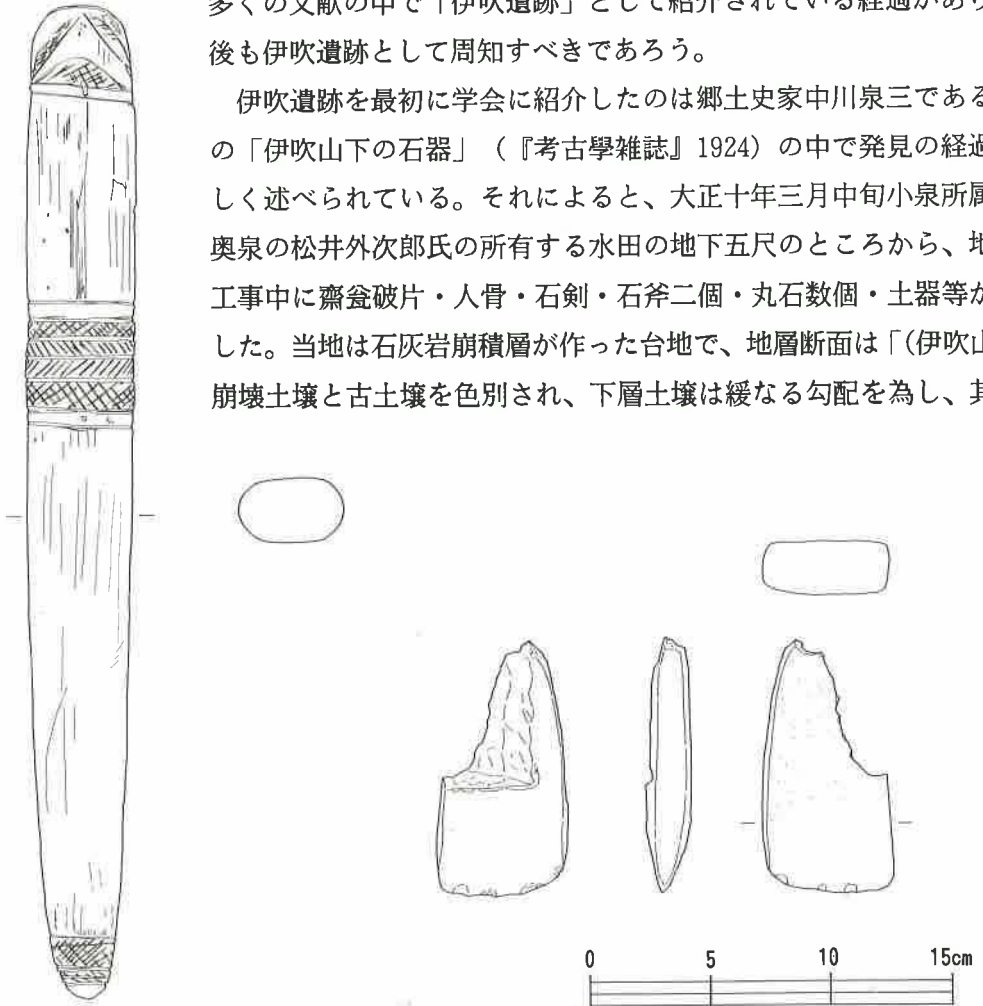
分布は九州・近畿・東海にやや集中しているようであるが、県内の例は大津市石山貝塚出土のものと同蒲生郡日野町旧比都佐村採集例がある。

(参考文献：安達厚三 1966「異形部分磨製石器について」いちのみや考古第9号
 岡本東三 1983「トロトロ石器考」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集』麻生優編)

9 伊^い吹^き遺跡 (遺跡番号17)

伊吹遺跡は小泉の小字奥泉周辺に所在する縄文時代の遺跡として周知されていた。伊吹は小泉の南に隣接する集落であり、本来なら当遺跡はその出土地点の名をとって奥泉遺跡とするのが妥当と思われるが、大正十年に石剣等が発見されて以来、多くの文献の中で「伊吹遺跡」として紹介されている経過があり、今後も伊吹遺跡として周知すべきであろう。

伊吹遺跡を最初に学会で紹介したのは郷土史家中川泉三である。その「伊吹山下の石器」(『考古学雑誌』1924)の中で発見の経過が詳しく述べられている。それによると、大正十年三月中旬小泉所属小字奥泉の松井外次郎氏の所有する水田の地下五尺のところから、地下げ工事中に齋盆破片・人骨・石剣・石斧二個・丸石数個・土器等が出土した。当地は石灰岩崩積層が作った台地で、地層断面は「(伊吹山の)崩壊土壌と古土壌を色別され、下層土壌は緩なる勾配を為し、其上に



第15図 伊吹遺跡出土石器実測図

崩壊土壌が約二尺」堆積していたという。

遺物のうち齋瓮破片は「内面に波紋状あり、外面に細密なる模様」があるもので、須恵器である。また、土器は底部で「いと尻」裏面の中央に在ることから須恵器の可能性が高い。さらに『有史以前の近江』には伊吹遺跡出土の縄文式土器片の拓影が1点ではあるが掲載されている。これは粗い縄文を地文とし、棒状工具による円形刺突を列点状に施したもので中期初頭の船元式土器と思われる。

これらのことは、伊吹遺跡が単に縄文時代のみでなく、須恵器が出土していることから、古代にも集落などが営まれていたことを推測させる。

次に石器であるが、石剣は頭部・中央部・先端部に刻み文が施されている。刻み文は平行線と、その間を埋める斜線文、袈裟禪文である。全長約44.5cmで断面は扁平な楕円形を呈し、石質は緑泥片岩である。二点の石斧のうち一点が石剣と共に琵琶湖文化館所蔵となっている、これは定角式の精巧な磨製石斧で、材質は白色系の蛇紋岩である。縦約10.7cm、刃部の幅約4.9cmで基部の一部を欠いている。

伊吹遺跡をはじめ姉川沿いの段丘や崩積層の形成する台地上には、今回の分布調査でも遺跡が点在することが確認できた。今後の調査で姉川上流域の古代史を解明していきたい。

10 ^{たいへいじ} 太平寺遺跡・^{たいへいじじょうあと} 太平寺城跡 (遺跡番号21・22)

旧太平寺集落は伊吹山の中腹、琵琶湖を西に望む標高約450m地点に位置し、昭和三十八年に大阪セメント鉾山の区域内となることから、山麓の春照に集団移住し廃村となった。

伊吹山寺の中心的寺院である太平寺は、この地に所在したものと考えられ、『改訂近江國坂田郡志』にも「陞は是れ伊吹村大字太平寺一圓の地なり」と記されている。また、京極家が初代・氏信以来の居城とした太平寺城跡も、山岳寺院太平寺をそのまま城館として機能させたものと考えられ、『滋賀県中世城郭分布調査6』に



写真3 旧太平寺集落風景（移住前）

においても旧集落の中心に当たる氏神太平神社境内をその中枢部に比定している。

伊吹山寺の起源については「弥高寺遺跡」の項でふれた。鎌倉時代には太平寺と弥高寺とが本末寺をめぐって争論し、徳治三年（1308）に和与が成立している。これは、当時の伊吹山寺における太平寺の勢力をうかがわせる資料である。太平寺が歴史的に最も注目されるのは鎌倉幕府末期で、元弘三年（1333）五月に京都を逃れて東国へ落ちる六波羅探題北条仲時を、京極導誉が伊吹山寺の衆徒らと共に番場宿で襲撃したときも、太平寺城を拠点としたようである。また、この前後には亀山天皇の皇子守良親王をはじめ皇族が逗留したことが伝えられている。その後太平寺城は、柏原城（山東町）・勝楽寺城（甲良町）とともに時に応じて京極氏の居城となったと思われるが、15代高濑が一族・被官等の内紛で、明応五年（1496）から八年（1499）にかけて海津（マキノ町）に流寓し、その後復帰して上平寺に館を整えた時点で城としての機能を終えたものと推測される。

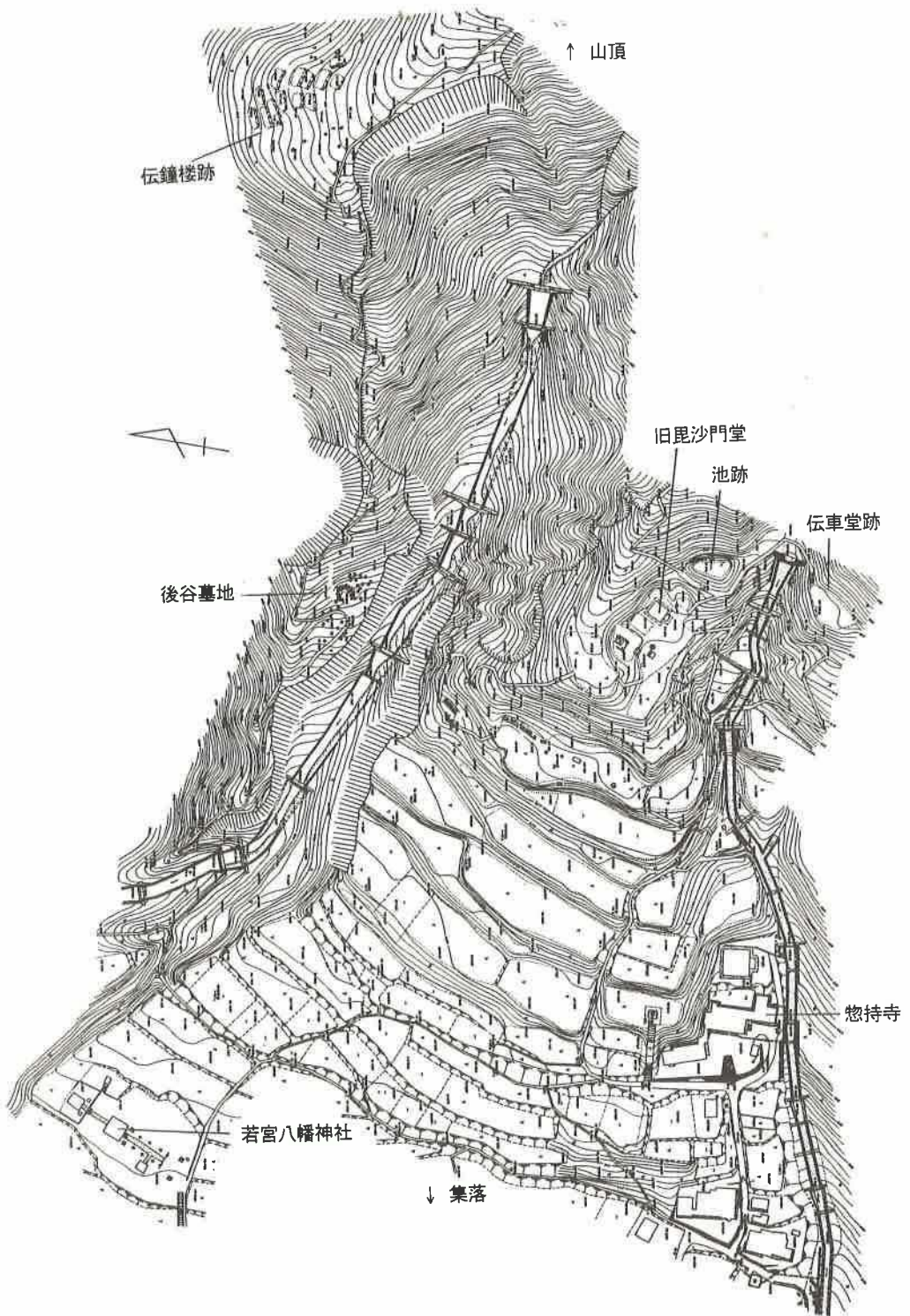
天文五年（1536）の『伊富貴大菩薩奉加帳』には、太平寺の塔頭と思われるものが約三十六坊あり、この時点では寺院としての体裁がまだ整っていたようである。その後次第に衰退したようで江戸期の『近江輿地志略』には中之房・圓藏房・兵部房の三坊と名超権現社の名が見えるが、明治維新後には最後の般若院仲之坊も廃亡したと伝えられる。

寺院ならびに城郭の遺構は明確ではない。しかし『改訂近江國坂田郡志』の記述の中に「太平神社の前を大門通りと称し、また兵部坊の遺名を存す」とある。大門通りの左右には屋敷地や坊跡が所在していたという。このように主郭から中央に主道を設け、左右に削平地が並ぶ縄張プランは、伊吹山寺の弥高寺跡・上平寺（館）跡・長尾寺跡と共通のものであると考えられ、旧太平寺集落が太平寺跡であることはほぼ間違いない。今後、寺院と城郭の関係を解明する機会があることを願いたい。

11 ^{ながおじ}長尾寺遺跡 (遺跡番号14)

長尾寺もまた伊吹山寺の関連寺院で、弥高・太平・観音寺と合わせて伊吹四カ寺と俗に呼称される。遺跡は大久保集落の背後、伊吹山頂から姉川の溪谷に向かって北西に延びる支尾根の、標高約230～450mの山腹およびその山麓に広がる。

長尾寺に関する記述の初見は、『観音寺文書』中にある嘉暦二年（1327）の伊富貴社にあてた後醍醐天皇の令旨で、弥高・観音両寺と共に名を連ねている。また、江戸時代に成立したと思われる『長尾寺縁起書』には、文和年間（1352～56）、高僧深宥が寺塔の荒廃を嘆き、壇徒を募り大いに修繕を加え、壯観を旧に復したという記録があり、現在の長尾寺跡墓地には「中興開山深宥」と銘のある高さ 109cmの一石五輪塔が、他の歴代住職の墓



第16図 長尾寺遺跡測量図 (S=1/2500)

とともに残っている。永享十一年（1439）に、長浜八幡神社三重塔建立に壺貫文を、文明八年（1476）には、観音護国寺本堂建立に脇柱一本を奉加していることが資料中に散見する。その後、永正年間（1502～21）に兵火にかかり、再建されて四十九坊あったと伝えられるが、この頃より衰退をはじめていったようで、天文五年（1536）の『伊富貴大菩薩奉加帳』には、長尾寺の塔頭と思われる名が十六坊記されているにすぎない。

下って、元禄五年（1692）六月の調書には、

- 一、居屋敷山の半腹東西十二間二尺、南北十二間、寺梁行三間、桁行七間、廂三尺
- 一、堂屋敷東西六十五間、南北三十七間
- 一、毘沙門堂梁行二間、桁行二間半、昔は六間四面
- 一、鎮守権現堂三尺四面、古は二間四面
- 一、新堂、鐘楼、堂頭屋敷、車堂、深宥上人屋敷、地藏堂以下六ヶ所悉退転仕り、屋敷計り御座候て、除地に候
池之坊梁行二間半、桁行四面
昔は此外二王門等御座候云々

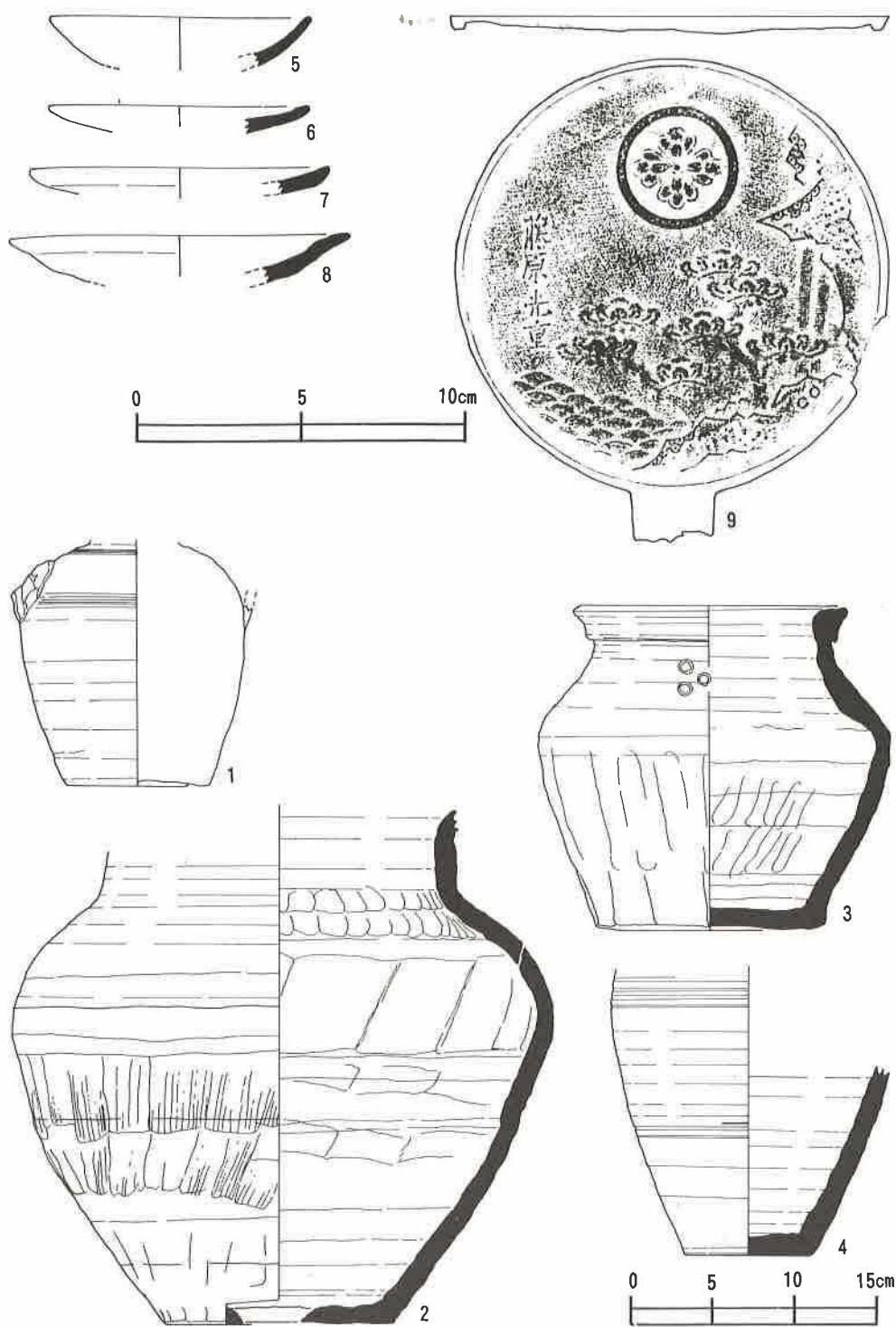
元禄五年六月 大窪村長尾寺之内宗持坊住持義海 印

池之坊住持左京 印

とあって、この頃には本堂・宗持坊・池之坊・毘沙門堂・鎮守権現堂のみ残り、新堂以下既に廃亡している。結局、明治九年に大火もあり、惣持坊（現・惣持寺）のみが法灯を残す。

平成元年からおこなった測量調査では、毘沙門堂を中心に集落に向かって扇形に展開する中枢の遺構群と、北の通称後ろ谷の尾根上の遺構を対象とした。毘沙門堂のある削平地は尾根の南半分を削り取ったような形で約24cm四方の区画をもち、そこにあった建物は南面していたと考えられる。また、上手に池跡が付随する。現存する道はいったん南の谷へ下りた後、郭群の中央を集落に向かって下る。このように中枢となる遺構から延びる道が、扇形に広がった郭群の中央を通る平面プランは、地形による差異はあるものの伊吹山寺共通のものであると言える。調査で確認できた削平地は約67ヶ所を数える。削平地は集落と南の尾根の一部にも所在すると思われることから、永正年間兵火にかかり、再建されて四十九坊あったという伝承に該当する遺構であろう。また、北に位置する後ろ谷の尾根上には、元禄の調書に見える鐘楼跡と伝えられる地区と下手に墓地があり、墓地は昭和五十六年に組織的な盗掘をうけた。この尾根にはこれら寺院に付属する施設があったものと考えられる。

出土遺物のうち、1は瀬戸の水注、2は常滑の中型甕で底部に穿孔のある。3も常滑産でソロバン玉形の小型の甕、4は渥美の三筋壺である。いずれも、後ろ谷墓地出土であり、



第17図 長尾寺遺跡出土遺物実測図

蔵骨器として用いられたものであろう。また、毘沙門堂の周辺で採集した遺物には、5の陶製小皿、6～8の土師質皿があり、9の手鏡は過去に畑より出土したものである。本遺構は出土品や遺構内に散在する石塔から室町時代を中心とするものと考えられる。またさらに標高の高い地点に、古い本堂跡が所在するという説もある。

12 ^{まがたに}曲谷石造建造物と関連遺跡 (遺跡番号4・5)

曲谷は姉川上流の谷部に所在する。北は溪谷部を約6km遡ると、本町最奥の甲津原に至り、新穂・品又などの峠をこえて美濃に通じる。南は甲賀、吉槻を経て、七曲峠を越え浅井町鍛冶屋に至る。

曲谷では、石臼づくりが生業とされていた時代があった。曲谷から姉川の支流をさかのぼった東北方の山手に花崗岩床がある。この近辺の花崗岩は、黒雲母を多く含み、粒子が粗く、石質が粘くて角が立てにくいもので、ひき臼に適していた。往時はここから石材を切り出し、山で荒どりしたものを、持ち帰って冬仕事に仕上げたという。現在集落内の至る所に、荒どりした石臼用石材や、失敗品の石臼が散在している。三輪茂雄によると、その分布範囲は東限が岐阜県郡上郡美並村、南限が同県養老郡上石津町とし、湖北では長浜、木之本あたりまで広く分布しているという。

曲谷での石材加工の始まりについて、地元には「西仏房」という12世紀頃の人物が加工技術を伝えたという伝承はあるが、明確ではない。



写真4 石造板碑(白山神社)

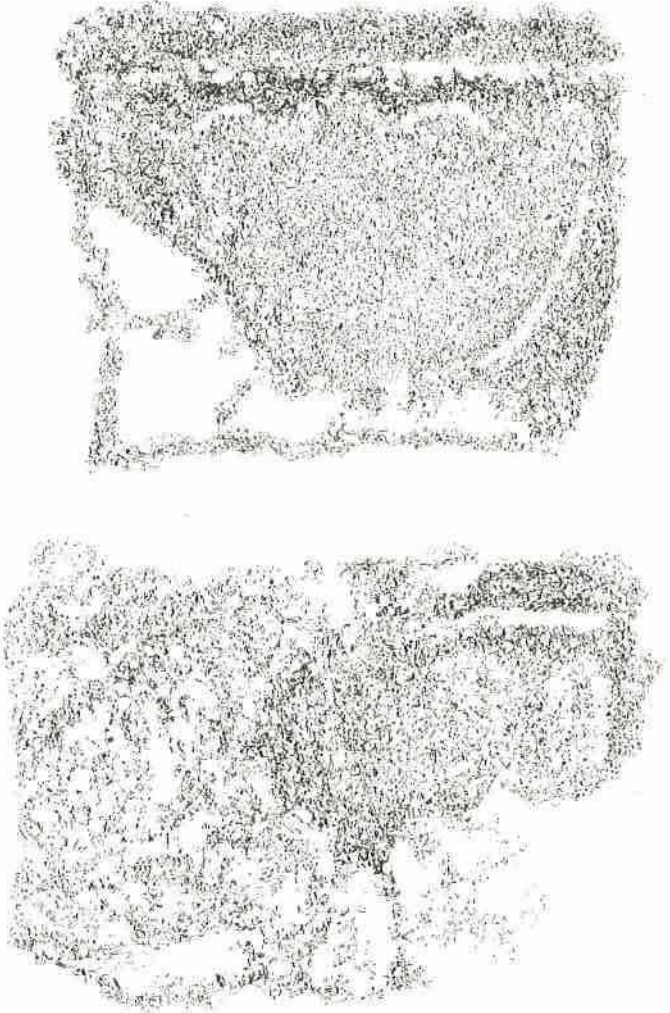
集落内の白山神社には、花崗岩製の二基の石造板碑(町指定文化財)がある。右塔は鎌倉時代末期、1310年頃の造立と推定される弥陀三尊形式のもので、高さが153.5cm。左塔はやや粗製ではあるが、これも鎌倉時代末期のもので推定されている。その他、境内には南北朝中期のものと思われる宝塔の塔身や、宝篋印塔の笠、基礎三基などがある。これらは、石臼製作以前の曲谷における石材加工を物語るものであると考えられる。

今回の分布調査で、石材の産地・曲谷において、鎌倉後期から南北朝のものと思われる宝篋印塔の未完成の台座を発見した。これは縦約50cm、横約52cm、高さ約39cmで、底部の一部が欠落している。側面の二面は

格狭間が彫られており、他の二面はほぼ手付かずの状態です。自然の玉石の特徴を残しています。第18図の拓本は、四面のうち二面のもので、格狭間を彫りかけている様子がわかります。下は、一部加工されているものの、左半分が自然面のままで放棄されている。石材加工技術に関する定説は、建久六年（1195）の東大寺大仏殿再建の際、中国から伊行末が伝えた切り石加工技術が鎌倉中期には畿内・近江で確立したというものであった。しかし、今回発見の台座は、鎌倉後期以降に玉石（転石）を加工していることから、採石技術が確立された時期に再検討を加えるものとなり、中世の石加工技術を知る上で貴重な資料である。また、曲谷における石材加工技術の始まりを鎌倉後期に据えることのできる証ともなる。製作工程としては、玉石の上下を叩きにより平にし、最初に上から造っていったものと判る。ただし、下は土に埋まるために全面フラットにはしていないようで、上二段を造り、対面する格狭間を二面造りかけたところで放棄しているようである。

生産遺跡としての石切場は2カ所確認できた。1つは姉川の支流・起し又川上流のサナギ谷（ミズガタニ）にある石切場。もう1カ所は寺谷の支谷・岩井谷の石切場である。サナギ谷の石切場は起し又地区から1時間近く山中に入ったところで、周辺には荒どりのされた石材や石で組み萱で屋根を葺いたという作業場（石屋）が3カ所確認できた。ここでは主に玉石を加工していたようで、「矢穴」跡の残る石も確認した。両遺跡とも現在は利用されていない。

（図版6参照）



第18図 曲谷 宝篋印塔未完成台座 拓影（S=1/12）

第2節 各遺跡の概要

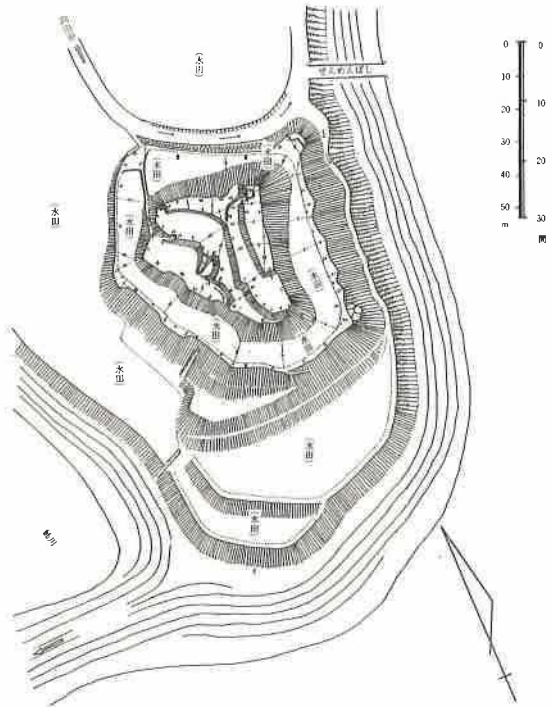
ここでは、上記以外の各遺跡の概要について述べる。

(1) 瀬戸山遺跡 (遺跡番号 1)

大字甲津原字瀬戸山に所在する。現況は水田で土師器片を採集した。瀬戸山谷は集落の北東に位置し、品又峠を越えて岐阜県坂内村諸家に通じる。

(2) 治山遺跡 (遺跡番号 2)

甲津原の集落の南西に位置し、南から集落に入る道を約2kmまで一望する位置にあることから、砦的な遺構である可能性が高い。小丘陵で土塁や帯郭状の水田がみられる。近くには「的場」という地名も残る。甲津原は新穂、品又両峠を越えて美濃に通じる間道沿いにあり、落人説や秀吉の母、本願寺教如等が身を寄せたことなどの地元の伝承を併せて考えると、あながち納得できる。(図版6参照)



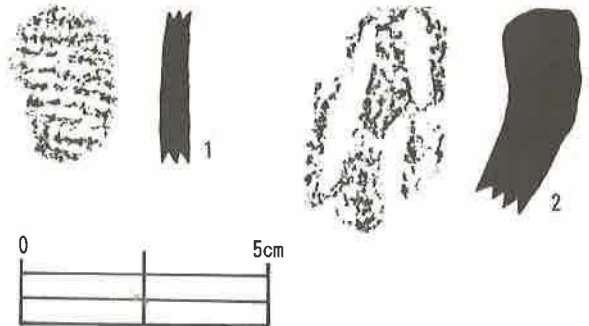
第19図 治山遺跡略測図 (文献50より)

(3) 下津原遺跡 (遺跡番号 3)

大字甲津原字下津原に所在する。現況は水田で、集落の南の谷間が広がった所にある。土師器や須恵器を採集した。

(4) 起し又遺跡 (遺跡番号 6)

大字曲谷字起し又に所在する。現況は起し又川沿いの谷間に広がる水田である。図のような縄文式土器を10点ほど採集した。1は全面に縄文が施してあり中期のものかもしれない。2は口縁部で、縄



第20図 起し又遺跡 表採縄文式土器実測図

文の地紋の上に太い沈線を施している。縄文時代後期の縁帯文土器で、北白川上層式あたりを想定したい。伊吹山麓から谷合を10km近く遡ったこの地で、縄文時代の遺跡の存在を確認できたことは貴重であるし、後期の遺跡が比較的湖岸沿いに分布する湖北地方において、山間部の状況を考える資料ともなる。

また今回の調査では、甲津原で採集された石斧を1点確認した。姉川上流における縄文文化の存在を示す資料である。

(5) ムカイラ遺跡 (遺跡番号 7)

大字曲谷字ムカイラに所在する。現況は水田である。土師器を採集した。

(6) 大平遺跡 (遺跡番号 8)

大字甲賀字大平に所在する。現況は水田である。土師器の皿と思われる口縁部を採集した。

(7) 大カイト遺跡 (遺跡番号 9)

大字甲賀字大カイトに所在する。集落の南東背後にある水田で、姉川が形成した段丘上の平地である。土師器、須恵器を採集した。

(8) カン谷遺跡 (遺跡番号10)

大字甲賀字カン谷に所在する。姉川が形成した段丘上に立地する。平安時代のものと思われる須恵器の坏底部や土師器を採集した。

(9) 七廻り峠遺跡 (遺跡番号11)

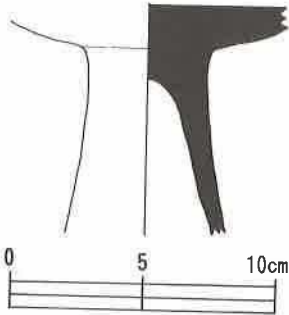
『滋賀県中世城郭分布調査6』に「七廻り峠の砦」として略測図が掲載されている遺跡で、大字吉槻と浅井町鍛冶屋を結ぶ七廻り峠の左右の山頂に郭と竪堀状遺構がある。七廻り道は昭和初期まで山間の主要道として利用されていた。

(10) 内座遺跡 (遺跡番号12)

大字上板並字内座に所在する。姉川と足俣川によって形成された段丘上の平地にあり、現況は水田である。土師器を採集した。

(11) ^{はせ}長谷遺跡 (遺跡番号13)

大字下板並字長谷および長谷ノ下に所在する。集落の東背後に広がる段丘上の平地に立地し、現況は水田と畑地である。須恵器、土師器、陶器を採集した。また、『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』(1936)中に長谷ノ下出土の石斧についての次のような記載がある。「昭和四年頃、長谷増五郎氏宅地の山裾を掘穿中、出土。磨製で、蛤刃、頭部を缺失し、刃部のみ10糎程を残存する。」



第21図 小泉遺跡出土土器

(12) ^{こいずみ}小泉遺跡 (遺跡番号15)

大字小泉字中河原に所在する。集落の南の姉川沿いにある水田である。平成元年に、弥生式土器の脚部が出土した。

(13) ^{みねどう}峯堂遺跡 (遺跡番号16)

大字小泉字峠平他に所在する。集落の南、姉川の峡谷が最も狭まった所の高台上に立地する。『滋賀県中世城郭分布調査6』に詳細な図とともに概要が説明されている。それによると、遺構内は石塁、石垣などによって区画され、東山腹の太平寺城との関係から、その要害性が指摘されている。

(14) ^{いぶきじょうあと}伊吹城跡 (遺跡番号18)

所在は明確ではないが、香照寺の背後の山中が比定されている。『江州佐々木南北諸士帳』という佐々木氏の時代の近江における城名と城主名を書き上げた文書に、「伊吹 宮仕住 伊吹出雲、同 住 同 式部」とある。

(15) ^{いわのうえ}岩ノ上遺跡 (遺跡番号19)

大字伊吹字岩ノ上周辺に所在する。姉川が大きく西へ流れを変えたところの段丘上に立地する。現況は水田である。弥生式土器、サヌカイト製の石鏃等を採集した。(第32図の1)

(16) ^{たいへいじ}太平寺遺跡 (遺跡番号20)

『改訂近江國坂田郡志』に石斧が採集された記事があるが、不明である。石斧は蛇紋岩製の磨製石斧残欠で、縦7.6cm、最大幅4.5cm、厚さ2.3cmであったという。

(17) ^{いぶきやま}伊吹山遺跡 (遺跡番号23)

『改訂近江國坂田郡志』に僧三修の墓と言われる弥勒堂と、南面して経塚があると記載

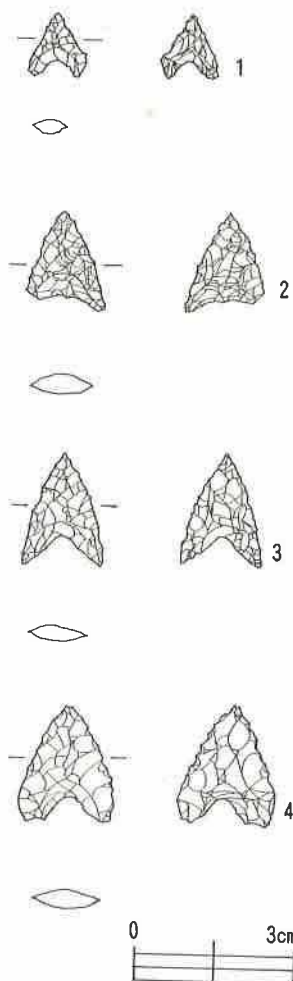
されている。また、観音寺覚書にも「頂上に弥勒堂。拾町ばかり北に濃州経塚有り。それより拾町東の近江の経塚有り。」とある。

(18) 伊吹山頂遺跡 (遺跡番号24)

滋賀県の最高峰・伊吹山(標高1377m)の山頂からは、少なくとも八個の石鏃の出土が確認されている。『改訂近江國坂田郡志』によると、昭和十二年の五月、九月、十月に計5点の無茎石鏃が発見されている。また、地元山小屋経営者が4点の石鏃を所蔵しておられる。第22図がそれであるが、1については『郡志』記載の1点と同一の可能性が有る。共に無茎石鏃でチャート製である。『郡志』記載のものもおそらくチャート製であると思われる、山頂からの出土品に形態(無茎)、石質(チャート)の共通性が見られる。

山の頂や、高山の山頂近くから石鏃が出土した例については、県内では伊吹山の他に比叡山がある。ここからは、縄文時代の早い時期の石鏃が1点、チャートの石屑とともに発掘された。また、大正の頃にも1点採集されているという。県外では、白山、八が岳、富士山等でも発見されている。多くはその山容が美しいなどの特徴があり、古代人のみならず現代人をも引きつける山々である。

(参考文献: 兼康保明 1978「比叡山出土の石鏃をめぐって」
『滋賀文化財だより』)



第22図 伊吹山頂遺跡出土石器実測図

(19) 行導岩遺跡 (遺跡番号25)

伊吹山八合目の南斜面に高さ約15m、周囲約50mの大岩が突出している。古来伊吹山寺を開いた三修が練行を積んだ行場と言われる。伊吹山中には他にも行場があるが、三修伝承と関わり貴重である。

(20) 高屋端出遺跡 (遺跡番号26)

伊吹山三合目のスキー場の北上方の尾根上、標高約850mの高所に位置する。『滋賀県中

世城郭分布調査6』に記載があり、のろし砦跡としている。

(21) ^{うえのなかのおか}上野中ノ岡遺跡 (遺跡番号27)

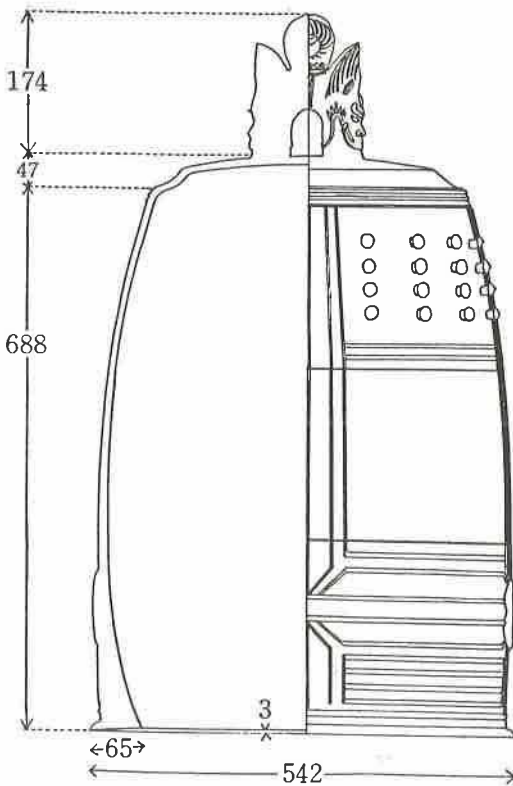
大字上野と大字伊吹の境にかつて一丘陵があった。小字名では上ノ岡、中ノ岡、下ノ岡にあたる。『改訂近江國坂田郡志』に「石仏・五輪塔・宝篋印塔を集む。相傳ふ、古へ寺院の在りて繁昌の所なり」とある。現在は工場の敷地等になっており、わずかに峯の薬師堂が面影を残す。

(22) ^{うえの}上野遺跡 (遺跡番号28)

かつて石斧が出土しているが、詳細は判明していない。上野出土の石斧が個人所有されているが、これに該当するものかもしれない。(第32図の4)

(23) ^{かんのんじ}観音寺遺跡 (遺跡番号29)

観音寺は、弥高寺、長尾寺、太平寺とともに伊吹四カ寺と呼ばれた山岳寺院で、現在は山東町朝日に天台宗寺院として所在している。この地に移ったのは、鎌倉時代中期の正元年中(1249~60)と推測されている。以後、在地の地頭大原氏の庇護のもとに寺勢を延ばした。元の位置については、弥高寺悉地院の東にある観音山、三合目の通称「桑の本」、その他の候補地がある。一応『滋賀県遺跡地図』の記載に従った。



第23図 松尾寺遺跡出土梵鐘実測図(文献19)

(24) ^{まつおじ}松尾寺遺跡 (遺跡番号30)

松尾寺もまた伊吹山寺の関連寺院である。天武天皇の勅願によって松尾童子が開基したと伝えられる。伊吹山二合目の小高野にあったと言われ、天文五年(1536)の「伊富貴大菩薩奉加帳」には松尾寺の坊として約二十七坊がある。その後衰退したようであるが、貞享年間(1684~88)に山麓近くの松尾に復興され黄檗宗となる。昭和四十二年に、元の小高野

に再建された。翌年、境内から明応七年銘の梵鐘が工事中発見された。

(25) 人塚遺跡 (遺跡番号31)

大字上野字人塚に所在する。伊吹山麓の扇状地の扇頂近くに立地する。現況は水田である。縄文時代の早い時期と思われるサヌカイト製の石槍が採集されている。(第32図の2)

(26) 野頭遺跡 (遺跡番号32)

大字上野字野頭に所在する。弥高川扇状地の扇頂近くに立地する。現況は畑地である。過去に石鏃が採集されたことが樋口家資料中にある。

(27) 堂ノ前遺跡 (遺跡番号35)

大字弥高字堂ノ前に所在する。弥高川扇状地の扇頂に立地する。現況は畑地である。従来「弥高遺跡」として弥生時代の遺跡とされていたが、過去に石鏃が採集されたことが樋口家資料中にあり、周辺の東野遺跡、野頭遺跡同様縄文時代の散布地か。弥生の遺物は不明である。

(28) 伊豆畑遺跡 (遺跡番号37)

大字弥高字伊豆畑に所在する。現況は伊吹山麓の山林である。過去に出土した土師器が善通寺に所蔵されている古墳時代の遺跡か。

(29) 赤谷遺跡 (遺跡番号38)

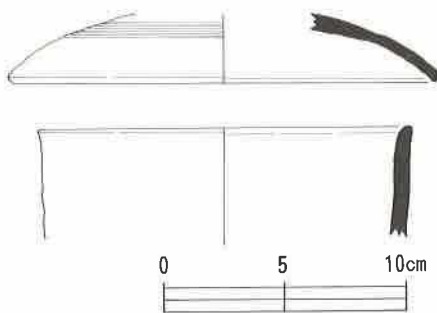
大字弥高字赤谷に所在する。現況は伊吹山麓の山林である。土師器、須恵器、陶器が採集されている。

(30) 祢宜田遺跡 (遺跡番号39)

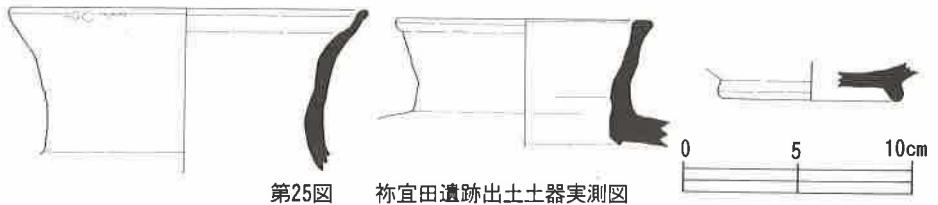
大字春照字祢宜田周辺に所在する。現況は水田である。ほ場整備事業が終了しており、土師器、須恵器、陶器を採集した。周囲には岡神社古墳群(山東町間田)がある。



写真5 伊豆畑遺跡出土土師器



第24図 赤谷遺跡出土土器実測図



第25図 柵宜田遺跡出土土器実測図

(31) ^{しのつかやかた}篠塚館遺跡 (遺跡番号40)

大字春照字細窪に所在する。低丘陵に立地している。現況は山林である。『改訂近江國坂田郡志』に「篠塚伊賀守重廣の居趾なりと称す」とあり、近代になって桑畑を開く際、武器や陶器が発掘されたという。

(32) ^{すいしょうやかた}春照館遺跡 (遺跡番号41)

春照氏は、大原氏第三代時綱の第三子貞頼を始祖とする。その詳細は明らかになっておらず、館跡も推定にすぎない。一応『滋賀県中世城郭分布調査6』の記載に従った。

(33) ^{だいがんじ}大願寺遺跡 (遺跡番号43)

大字高番字堂ノ森に所在する。大願寺という寺院の跡であるというが、現在は阿弥陀堂一字と石仏、五輪塔、宝篋印塔残欠が残っているのみである。大願寺については、その開基等明らかになっておらず、元龜あるいは天正の頃に兵火にかかり焼失したという。

(34) ^{じゅうおうどう}十王堂遺跡 (遺跡番号45)

大字杉沢に所在する。創建の年代等は明らかになっていないが、明治四十年頃まで何らかの堂があったようである。字内には「真経堂」などの仏堂と思われる地名が残る。

(35) ^{しょうみょうじ}正明寺遺跡 (遺跡番号46)

大字杉沢に所在する。創建の年代は明らかでない。『改訂近江國坂田郡志』の編者は、正明寺が勝居神社の別当寺であると推測している。また嘉永年間(1848～54)に、法林院を正明寺の跡に移し修理を加え、正明寺を廃寺にしたと記載する。法林院は、現在の集会所に所在したという。

(36) ^{むらぎ}村木遺跡 (遺跡番号47)

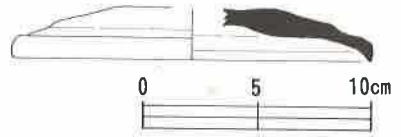
大字村木に所在する。扇状地の裾野に立地する。昭和十三年に字宮西において石斧が二点採集されたという。伴う土器がないが、縄文時代と思われる。

(37) ^{むらぎじょうあと}村木城跡 (遺跡番号48)

『江州佐々木南北諸土帳』に「村木 住佐々木末 川瀬万五郎」とある。位置については、一応『滋賀県中世城郭分布調査6』の記載に従った。

(38) ^{こうと}神戸遺跡 (遺跡番号50)

大字大清水字神戸に所在する。弥高川と政所川の形成する扇状地の扇頂部に位置する。現況は水田ならびに山林である。須恵器を採集した。



第26図 神戸遺跡表採土器実測図

(39) ^{たけがはな}竹力鼻遺跡 (遺跡番号52)

大字大清水字竹力鼻に所在する。ほ場整備中に古墳時代前期の土師器、須恵器が採集された。

(40) ^{おおしみずやしき}大清水屋敷遺跡 (遺跡番号53)

大字大清水字井の田に所在する。遺構は北国脇往還で分断破壊されており、明瞭ではない。多賀氏の居城・天清城に関連する施設が所在した可能性もある。

(41) ^{おおしみず}大清水遺跡 (遺跡番号54)

大字大清水字丸山等に所在する。出土遺物に縄文時代中期のものと思われる大型の石棒と祭祀用と思われる石器がある。石棒の材質は灰色の凝灰岩で、頭部二段の笠形をしている。残存長は約32cmである。同様の石棒は杉沢遺跡でも見つかっている。(第28図)

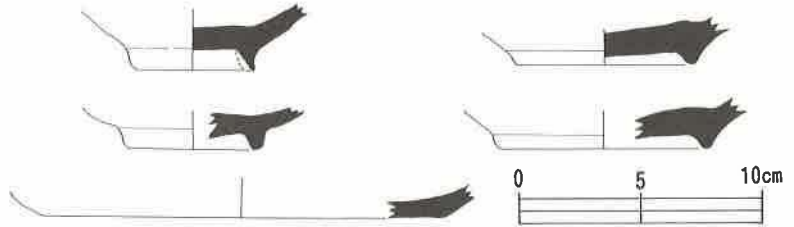
(42) ^{じゅうれんじ}十蓮寺遺跡 (遺跡番号55)

大字大清水字堂ノ前に所在する。集落の南の水田中に台地状に残る。創建年代等は明らかになっていない。過去に石仏、仏器等が出土したという。周辺の水田から須恵器、陶器を採集した。

(43) ^{いわそやま}岩碓山古墳

(遺跡番号56)

大字大清水字西岩原に所在する。岩碓山(蓑着山)山頂に立地



第27図 十蓮寺遺跡表採土器実測図

する。過去に須恵器等が出土したという。現地は酷いブッシュで現状確認は難しいが、円墳と言われている。

(44) 天清城跡 (遺跡番号57)

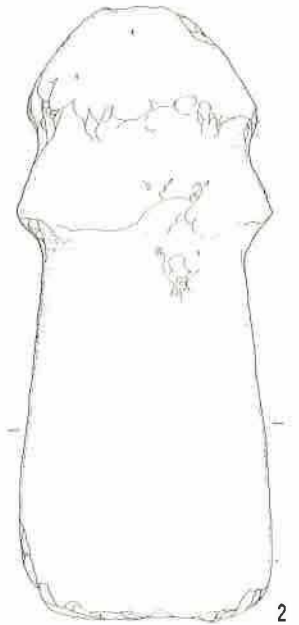
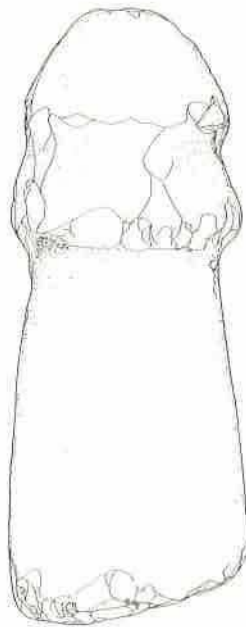
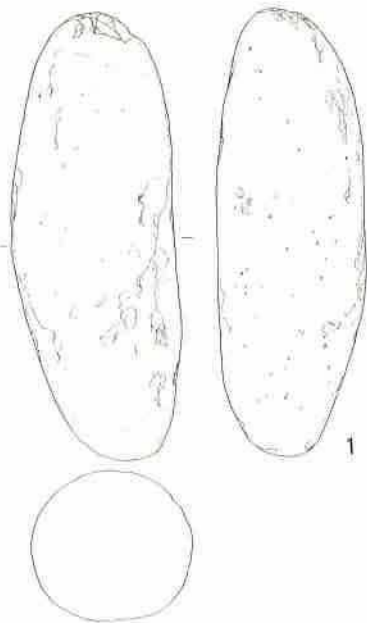
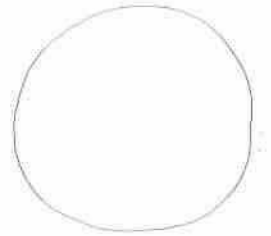
大字大清水字西岩原に所在する。集落の背後の山頂に立地する。京極氏の被官多賀左近将監正信が居城としたと伝えられている。土塁、堀切、郭が残る。

(45) 上平寺遺跡 (遺跡番号60)

上平寺遺跡は、伊吹山寺の関連寺院・



写真6 天清城跡遠望



第28図 大清水遺跡出土石器実測図

上平寺から中世京極氏の城下町にいたる遺跡である。

寺院としての上平寺は、城館あるいは城下町の上平寺に先行すると思われる。伊吹山寺の関連寺院と考えられるが、創建年代等は明らかではない。永正年間（1504～）に京極高清が上平寺に館を構えた際、その菩提寺にしたと伝える。天文五年（1536）の「伊富貴大菩薩奉加帳」には上平寺の坊と見られるものが約三十坊あり、京極氏の庇護のもとに寺勢を誇っていたものと考えられる。現在は長浜神照寺末の杉本坊のみ残る。

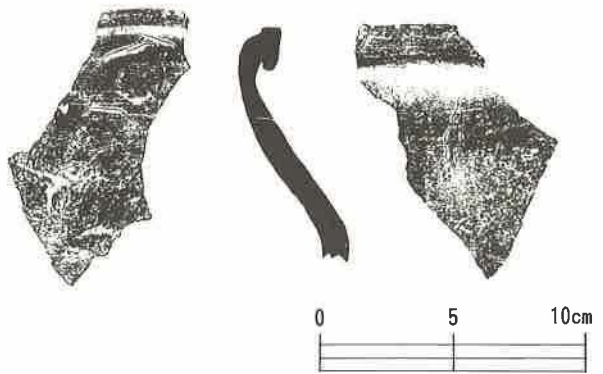
集落の上手西を「大門西」、東を「大門東」、下手を「大門尻」という小字名が残っている。また大門東には、杉本坊の他に「キュウラン坊」という寺跡があり、大門西にも三カ所ほど寺院跡があるという。

(46) 上平畑遺跡（遺跡番号61）

大字上平寺字上平畑に所在する。現況は山林および畑地、水田である。明治四十年頃、畑耕作中に磨製石斧が発見された。（第32図の3）

(47) 長福寺遺跡（遺跡番号62）

大字上平寺字山神戸他に所在する。藤古川を隔てて上平寺の向いに位置する。上平寺に関連する寺院か。江戸前期の古図中にも記載されている。現状は山林および水田で、広域農道の両側に坊跡と思われる削平地が並ぶ。出土遺物に常滑の中型甕がある。



第29図 長福寺遺跡出土陶器実測図

(48) 寺林遺跡（遺跡番号63）

大字藤川寺林集落の南に所在する。藤古川が形成した扇状地上に立地する。現況は水田で、広範囲にわたって土師器、須恵器を採集した。奈良から平安時代の遺跡と思われる。（第30図）

(49) 藤川城跡（遺跡番号64）

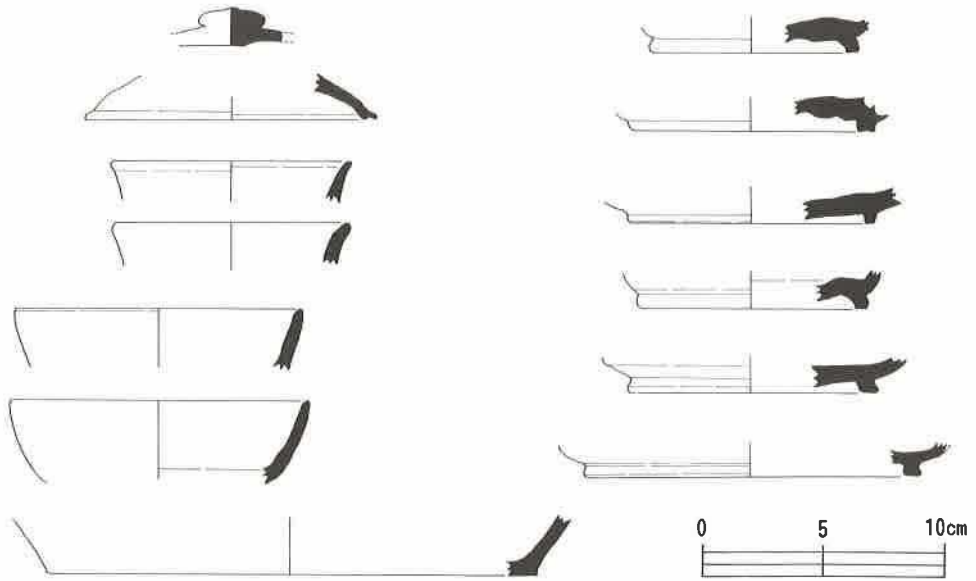
大字藤川字菜洗に所在する。『江州佐々木南北諸土帳』に、「藤川 住是所定家卿屋敷村上源氏 児玉兵庫介」とある。現在集落内に藤原定家の寓居跡と伝えられている所があり、『滋賀県中世城郭分布調査6』は、ここを児玉兵庫介の館跡に推定している。

(50) ^{ぬくみじ}暖水寺遺跡 (遺跡番号65)

大字藤川字暖水に所在する。『改訂近江國坂田郡志』中に「暖水八十八坊」の記載があるが、詳細は不明である。地名からその場所を推測するに止まる。

(51) ^{いますみち}今須道遺跡 (遺跡番号66)

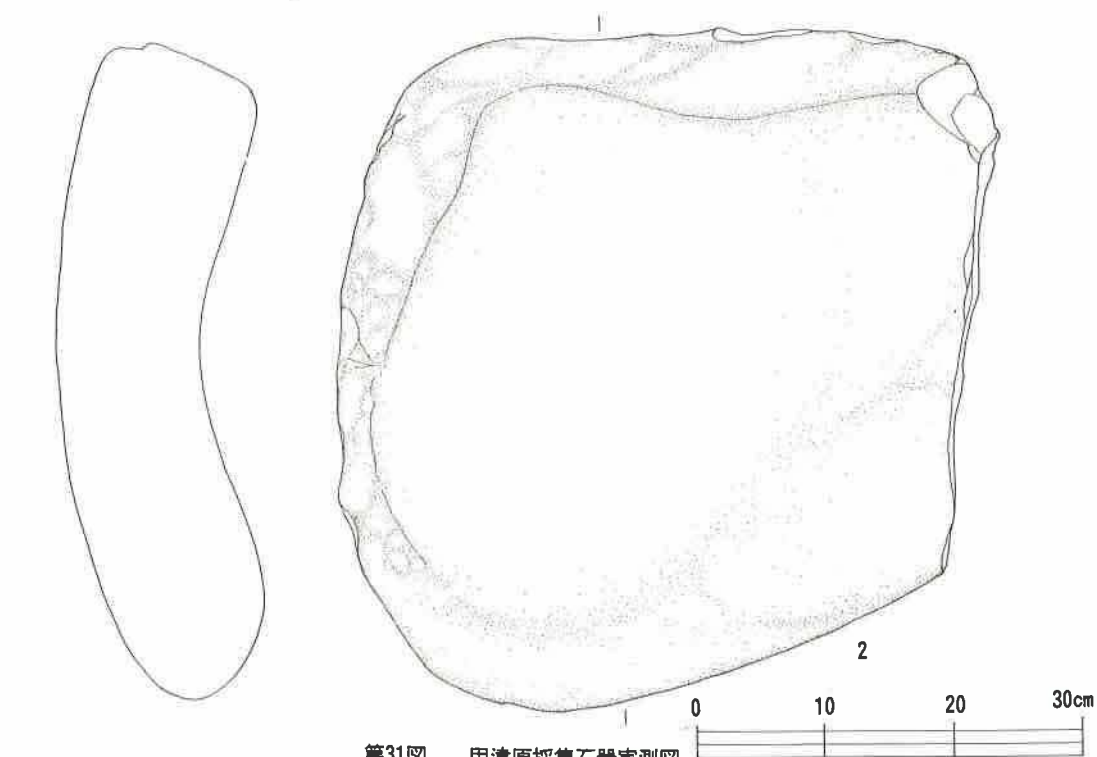
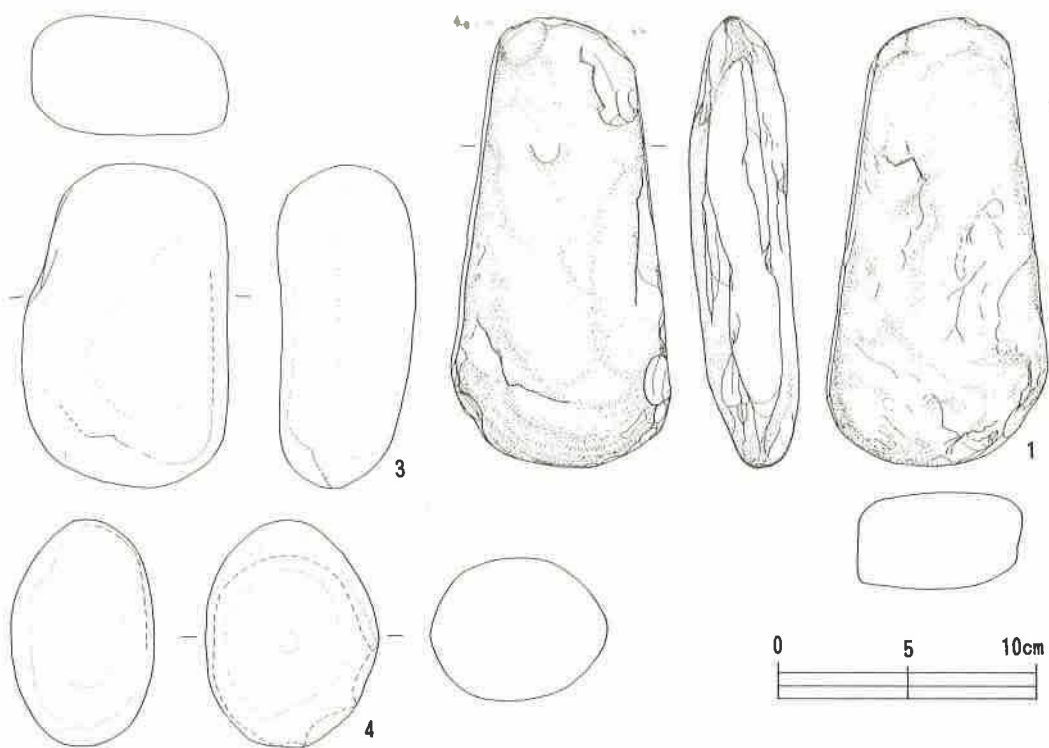
大字藤川字赤坂に所在する。藤川と関ヶ原町今須を結ぶ間道の周囲の尾根上に、物見的な遺構が存在する。



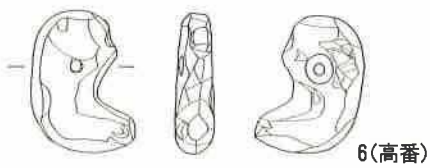
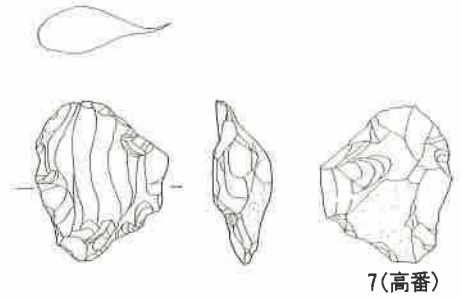
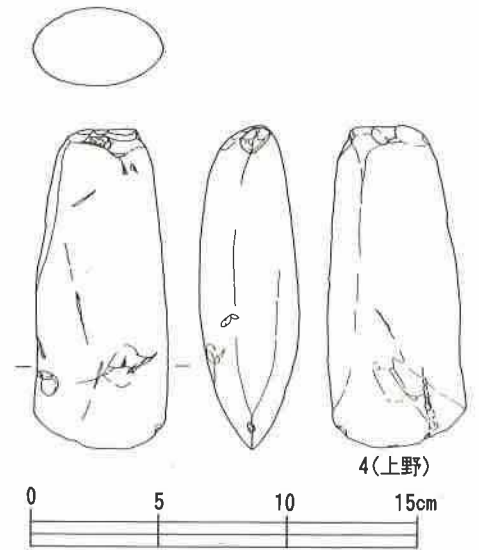
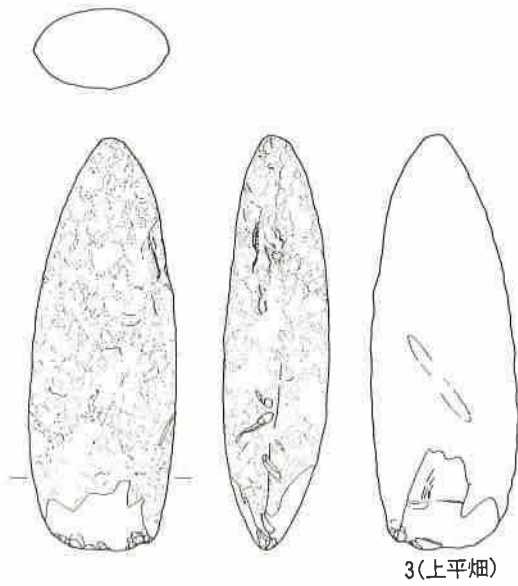
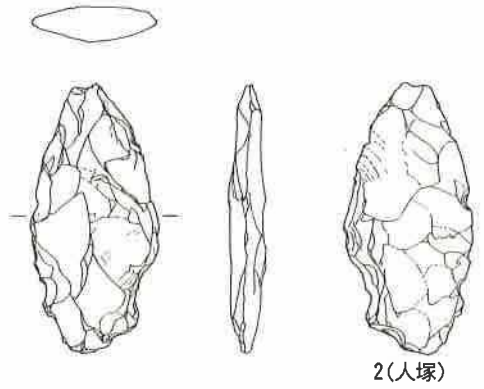
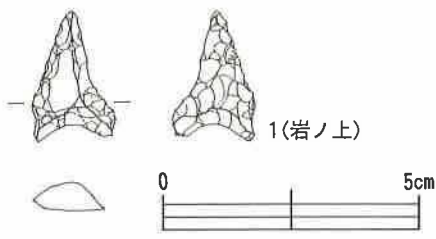
第30図 寺林遺跡表採土器実測図

(52) ^{こうすはら}甲津原採集石器

第31図は甲津原で採集された石斧(1)、石皿(2)、磨石(3,4)である。1の石斧は縄文時代のものと考えられる比較的大型のもので、蛇紋岩に近い材質である。両側縁が研磨されており、主面との間に明瞭な稜をつくるが、刃部・頭部は調整が不十分で未製品の可能性もある。2の石皿は火成岩質のもので、上面が磨られて凹んでいる。おそらく製粉に使われたものと考えられるが、民俗例を含めた検討が必要であろう。時期は不明である。4点とも採集地点が大字甲津原であることが判っているのみで、具体的に遺跡地図には明示できなかった。



第31图 甲津原採集石器実測図



第32図 その他町内出土遺物

第4章 杉沢遺跡出土石器

ここでは、大字杉沢に所在する杉沢遺跡の石器について紹介する。第3章でも述べたとおり、杉沢地区では古くから考古遺物の出土が知られており、発掘における出土品はじめ、耕作中などに発見された遺物が、記録と共に地区内で保管されている。これらは、出土した土器と同様に杉沢遺跡を考える上でなくてはならない資料である。また、伊吹町公民館において保管展示している杉沢出土品を併せて記載した。

杉沢出土の石器類は、その量の多さと器種の多様さに特徴がある。三回の部分的・局部的な発掘しか行われていない当遺跡において、このように多くの石器が集落内の広範囲から出土していることは、地下に眠るであろう遺跡の規模の大きさと質の良さがうかがわれる。器種には、石鏃、石錘、石皿、敲石、磨石、石斧、多頭石斧、砥石、玉、石棒、石刀、石剣、御物石器などがある。

実測図の中には、既に『改訂近江國坂田郡志』等に記載のあるものも含まれる。

石鏃 (1~9)

杉沢出土の石鏃は、『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』と『改訂近江國坂田郡志』にそれぞれ3点が掲載されている(同一の可能性有り)。他に昭和六十三年の発掘で2点が出土している。『郡志』記載のものの石質は、2点がチャートで1点はサヌカイトと推測され、発掘出土品はサヌカイトに近い安山岩である。

1から9の石鏃は、全てサヌカイト製である。ほとんどが小字門田で採集されている。石鏃は、縄文時代の石器の中で最も代表的で、かつ、矢じりという機能上その消費量が多く盛んに製作されたと考えられるが、杉沢遺跡における出土数は、石斧などに比べてはるかに少ない。

石錘 (10~12)

確認しえた石錘は3点である。10は半分欠けているが、12と同様に円石の両端に縄掛け用の切り目を入れたものであろう。11は円石の両端を打ち欠いたものである。石質は10と11が流紋岩、12はホルンフェルス(熱変成岩)である。

石皿・磨石・敲石 (13~43)

主に調理の道具として利用されたとと思われる三器種を取りまとめて扱う。磨石あるいは

敲石として取り上げたものについても、食糧粉碎のためと思われる敲打痕跡と製粉のための磨痕の両方を持つものも多い。地元ではその形態から団子石と呼ばれている。石質は砂岩、硬砂岩、花崗岩、輝緑凝灰岩などで、目の粗いものと、緻密なものがあり、用途による使い分けがあるものと考えられる。

13～15は大型の石皿である。特に13は、中央に直径約10.5cm。深さ約1.5cmの凹みがある。縄文時代には属さないかもしれない。14・15の表面は滑らかである。15は小字門田出土。16～39は磨石あるいは敲石である。16～19は比較的小さい円礫で、表面か側面に磨痕がある。20～26・29は断面楕円形のもので、25のように表面は叩かれた跡、側面には叩いた跡が観察できるものがある。27・28、30～39は断面が扁平なもので、35～37は手で握りやすく、その大きさや規格、石質が非常に似ている。41～43も磨石・敲石の一種と考えられる。特に43は乳棒状のもので、一方の端部に顕著な磨痕が残る。

石斧 (44～93)

石斧は全て磨製である。石質は蛇紋岩、流紋岩、硬砂岩、輝緑凝灰岩、安山岩、ホルンフェルスなどである。この内、硬砂岩やホルンフェルスのように比較的入手しやすいものとは別に、赤っぽい流紋岩や安山岩など当地域にはない石材が用いられたものもあり、縄文時代の石材の移動について考える上で有用であろう。

44～46は長さ3.3～5cmの小型の磨製石斧で、特に45・46は研磨がいきとどいた精巧なものである。44は基部が欠損した後、もう一度磨かれているようである。これらは実用品としての機能と装飾あるいは呪術的なものとしての機能が考えられる。47～55は、両側縁が研磨され石斧主面とのあいだに稜を作り、断面が隅丸方形となるもので、いわゆる定角式磨製石斧である。特に47は頭部も研磨されており、白色の緻密な凝灰岩で作られた美しいものである。56も精巧に研磨された滑らかな器面を持つ石斧である。また、57は胴部にわずかなくびれの痕跡があり、着柄のためかとも考えられる。58・59・61などは敲打痕が見られる。64～66、81、83・84は断面がほぼ円形を呈する。刃部を欠いているものが多いが、66のように鈍い刃部を持っていたものと考えられる。65は刃部が磨り潰されている。93は大型の石斧の基部と思われる。

多頭石斧 (94)

円盤状の周縁に深い切り込みを入れ、数個の突起を作り出した磨製石斧で、杉沢遺跡の資料は半分に割れており、おそらく6個の突起を持っていたものと考えられる。石質は粘板岩である。多頭石斧は縄文時代後晩期に限られ、中部地方に濃密に分布する。

砥石 (95)

95は砥石と思われる。1面のみ使用されていたようで、滑らかになっている。表面に7条ほどの細い溝状の痕跡がある。石質は凝灰岩か。

玉 (96)

直径約0.7cm、厚さ約0.5cmの石製小形丸玉である。一方から穿孔している。

石棒・石剣・石刀 (97~109)

97~104は石棒である。98~100は表面が滑らかに研磨してあり、98は先端を円棒のままにした無頭のものであろう。97・101は打ち欠いたままである。102・103は先端頭部を男根状にしたもので、102は断面円形、103は断面楕円形を呈し、頭部下方に線刻を1条施す。104は、杉沢の玉泉寺墓地で発見された大型の石棒で、頭部を2段の笠状に成形している。残存長は約38.5cmあり、石質は凝灰岩である。このような大型の石棒は縄文時代中期に多く、杉沢発見の他の石棒が小型あるいは扁平化しているのに比べると、時期的に古いものであるといえる。同様の石棒は大清水遺跡で発見されている。

105~109は、扁平で両側縁あるいは一側縁に刃を持つ。106・108・109は頭部を作りだしている。

御物石器 (110)

杉沢出土の御物石器は、現存長約22cmで、黒色粘板岩製である。全面に研磨を施しているが、やや粗製の点が見られる。下部の一端を欠いているが、おそらく他の御物石器同様に、中央の抉り部をはさんで下部の盛り上がりがあったものと考えられる。断面は三角形に近い形態をもつ。おそらく横に安置したものであろう。上部先端にはくびれを持つ瘤状の突起が付いている。本品は無文で、多くの例に見られる三叉状連結文や渦巻文、弧状文、E字状文などは見られない。天羽利夫の分類では第三型式に入り、文様構成が複雑から単純へ至った時期のものである。橋本正の型式分類では、北陸型の瘤付面包頭式1に該当する。御物石器は晩期前半の時期に岐阜県を中心とした狭い地域に分布している。

(参考文献：天羽利夫 1966「御物石器の研究」『考古学雑誌』52-1

橋本 正 1976「御物石器論」『大境』6)

その他 (111~112)

111は鯉節型の石器で用途は不明である。石質は安山岩である。112も用途は不明で、扁平な形態を持ち穿孔を有す。あるいは石刀の頭部かもしれない。

剥片 (113~119)

113のみチャート剥片で、あとはサヌカイト片である。

石器観察表

石鏃

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備	考
1	1.6	1.5	0.3	サヌカイト	完形	個		
2	2.2	1.0	0.4	サヌカイト	脚部欠	個		
3	2.0	1.4	0.5	サヌカイト	完形	個		
4	1.8	1.6	0.4	サヌカイト	頭部欠	個		
5	2.5	1.6	0.4	サヌカイト	完形	個		
6	2.6	1.8	0.7	サヌカイト	胴部欠	個		
7	2.0	1.9	0.3	サヌカイト	完形	個		
8	2.9	2.1	0.7	サヌカイト	完形	個		
9	2.6	1.9	0.4	サヌカイト	完形	個		

石錘

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備	考
10	2.8	2.4	1.6	不明	1/2欠	個		
11	5.3	4.3	2.0	流紋岩	完形	公		
12	6.8	3.7	1.5	ホルソフェルス	完形	公		

石皿

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備	考
13	37.0	25.7	9.6	砂岩系	完形	個		
14	24.0	14.2	6.8	凝灰岩系	欠	個		
15	28.8	19.2	3.9	凝灰岩系	完形	個		

敲石・磨石

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備	考
16	5.5	4.2	4.0	砂岩	完形	個		
17	6.0	5.3	4.1	硬砂岩	完形	個		
18	6.9	7.2	4.0	花崗岩	完形	個		
19	7.9	5.9	4.8	不明	完形	個		
20	8.2	5.1	5.2	不明	完形	個		
21	7.8	4.8	5.0	足俣石	1/4欠	個		
22	9.7	6.5	6.1	硬砂岩	1/2欠	個		
23	9.1	6.0	5.5	花崗岩	1/2欠	個		
24	9.2	4.8	4.5	不明	1/2欠	公		
25	10.1	7.1	6.0	不明	1/2欠	公		
26	10.9	5.1	5.7	不明	1/2欠	個		
27	9.8	9.1	4.3	不明	完形	個		
28	11.2	3.9	3.7	不明	完形	個		
29	9.7	5.8	5.0	不明	1/2欠	個		
30	11.1	10.8	4.7	輝緑凝灰岩	完形	個		
31	9.9	8.2	4.3	輝緑凝灰岩	完形	個		
32	9.0	7.6	3.6	花崗岩	完形	個		
33	10.8	10.1	6.5	足俣石	完形	個		
34	10.0	4.8	4.7	砂岩	1/2欠	個		
35	11.2	7.5	4.0	砂岩	完形	個		

36	11.7	7.7	5.7	砂	岩	完	形	個
37	13.1	8.1	6.0	砂	岩	完	形	個
38	6.0	8.4	5.0	不	明	1/2	欠	公
39	5.9	8.2	4.5	不	明	1/2	欠	公
40	11.2	5.2	5.6	不	明	1/4	欠	個
41	16.6	5.7	4.5	不	明	完	形	個
42	14.6	5.5	3.5	不	明	完	形	個
43	23.8	4.7	5.5	不	明	完	形	個

石斧

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石	質	遺存状態	所有	備	考
44	3.3	2.9	0.6	不	明	1/2 欠	個		
45	4.5	3.0	1.0	蛇	紋	完	形	個	
46	5.0	3.2	1.1	不	明	完	形	個	
47	8.5	4.0	1.7	凝	灰	完	形	個	小字辻村出土
48	8.9	5.3	2.4	不	明	完	形	個	
49	12.9	5.6	2.8	不	明	完	形	他	
50	11.6	5.8	2.9	流	紋	完	頭部欠	公	
51	14.8	6.3	3.0	不	明	完	形	公	
52	5.3	4.9	2.0	硬	砂	1/2 欠	公	公	
53	7.4	2.8	6.1	輝	緑凝灰	1/2 欠	個		
54	5.0	4.7	2.3	硬	砂	完	刃部欠	個	
55	5.0	4.5	3.3	不	明	完	刃部欠	個	
56	7.9	5.5	1.7	不	明	完	形	個	
57	9.5	5.5	4.3	安	山	完	形	個	小字南川出土
58	9.6	4.4	3.1	流	紋	完	形	公	小字大沢出土
59	9.3	3.8	2.5	不	明	完	形	個	
60	11.2	5.0	3.0	蛇	紋	完	形	個	
61	11.7	4.9	3.6	流	紋	完	形	公	明治44年出土
62	10.2	5.4	2.6	流	紋	完	頭部欠	公	
63	10.4	5.0	3.2	流	紋	完	形	公	
64	12.1	4.7	4.2	安	山	完	刃部欠	公	
65	13.5	5.4	4.3	流	紋	完	刃部欠	公	
66	12.3	4.6	3.4	ホ	ルソフェルス	完	刃部欠	公	
67	9.5	4.0	3.1	凝	灰	完	頭部欠	個	
68	9.2	6.2	2.8	不	明	1/2 欠	個		
69	10.0	5.5	3.1	不	明	完	頭部欠	個	
70	9.9	5.7	3.0	蛇	紋	完	頭部欠	個	
71	10.6	5.5	2.7	ホ	ルソフェルス	完	刃部欠	公	
72	14.7	6.2	3.4	硬	砂	完	刃部欠	個	
73	11.8	5.3	3.8	不	明	完	刃部欠	個	
74	9.5	4.4	2.9	砂	岩	完	刃部欠	個	
75	6.7	5.4	2.8	不	明	1/2 欠	個		
76	9.4	6.0	3.3	不	明	完	頭部欠	公	
77	7.0	6.0	3.4	流	紋	完	刃部欠	公	
78	12.5	5.9	2.5	不	明	完	刃部欠	個	
79	14.9	5.2	3.3	不	明	完	刃部欠	個	
80	6.5	4.1	2.8	輝	緑凝灰	完	刃部欠	個	
81	10.6	4.6	3.7	不	明	完	欠	公	
82	6.9	4.1	2.3	輝	緑凝灰	完	刃部欠	個	小字門田出土
83	12.2	5.1	4.1	蛇	紋	完	刃部欠	個	
84	11.5	5.1	3.7	蛇	紋	完	刃部欠	個	

85	11.7	5.7	3.6	硬砂岩	刃部欠	個
86	6.2	5.6	3.0	安山岩	1/2 欠	公
87	8.9	4.2	3.2	不明	刃部欠	個
88	9.6	4.8	3.2	蛇紋岩	刃部欠	個
89	7.2	4.9	2.2	砂岩	刃部欠	個
90	9.1	4.6	1.7	砂岩	欠	公
91	7.7	4.9	3.2	流紋岩	1/2 欠	公
92	6.6	5.3	3.4	蛇紋岩	欠	公
93	10.5	7.5	5.5	輝緑凝灰岩	欠	個

多頭石斧

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備考
94	6.7	10.3	2.6	粘板岩	1/2 欠	他	

砥石

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備考
95	22.7	12.5	6.8	凝灰岩	完形	個	

玉

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備考
96	0.7	0.7	0.5	不明	完形	個	小字門田出土

石棒、石剣、石刀

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備考
97	10.2	3.7	2.4	粘板岩	欠	公	
98	8.2	3.5	2.3	砂岩	欠	公	
99	11.0	3.0	2.1	輝緑凝灰岩	欠	個	
100	6.2	2.7	2.5	砂岩	欠	個	
101	5.8	3.6	2.0	不明	欠	個	
102	13.8	4.3	3.2	蛇紋岩	欠	個	
103	9.0	6.2	2.7	輝緑凝灰岩	欠	個	
104	38.5	14.3	12.0	凝灰岩	欠	個	
105	12.0	3.0	1.4	ホルンフェルス	欠	公	
106	21.3	3.0	1.7	ホルンフェルス	欠	公	
107	5.9	2.9	1.8	粘板岩	欠	公	
108	17.7	3.6	1.7	不明	欠	個	
109	9.7	2.8	1.4	ホルンフェルス	欠	公	

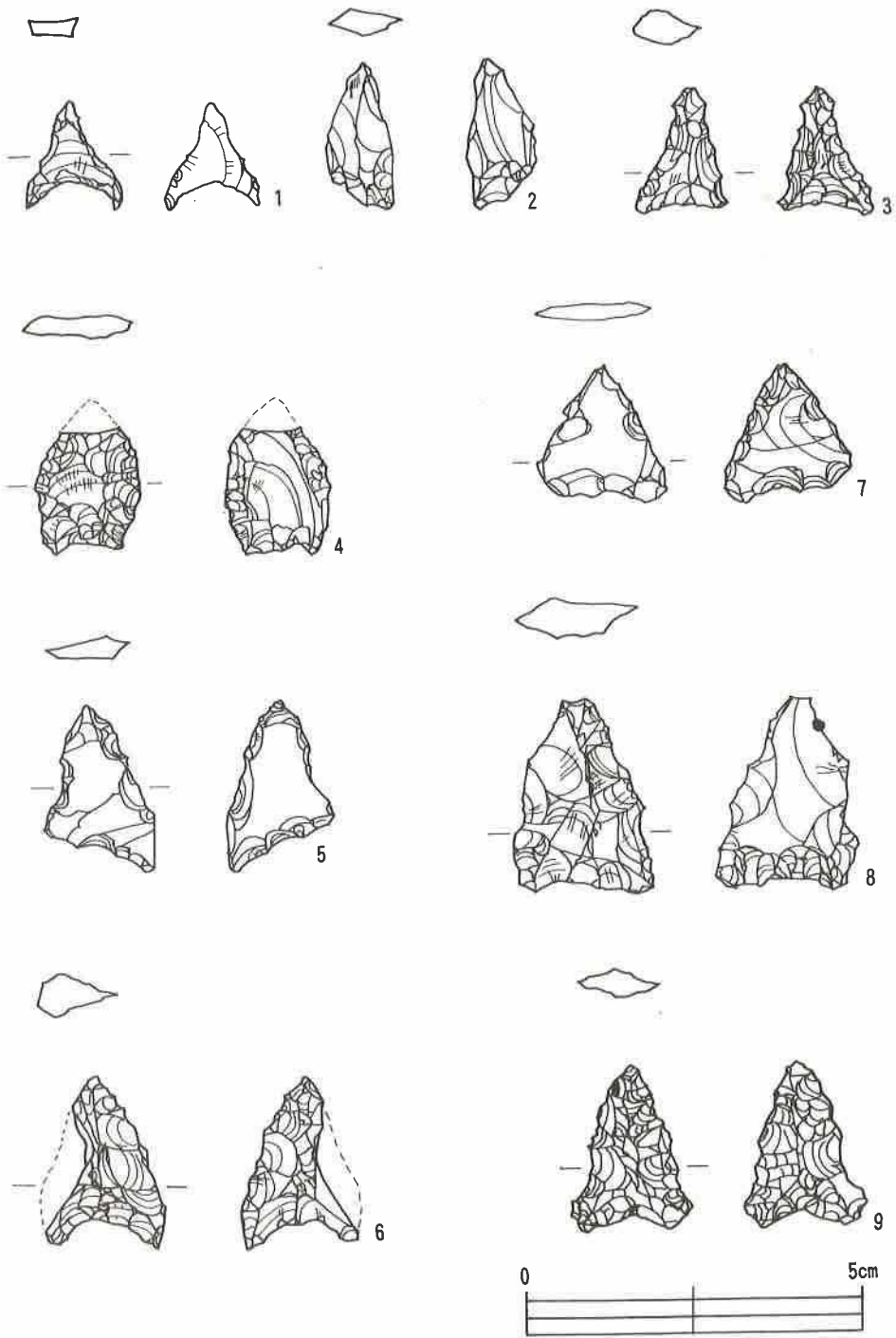
御物石器

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備考
110	22.1	7.5	7.3	粘板岩	欠	他	

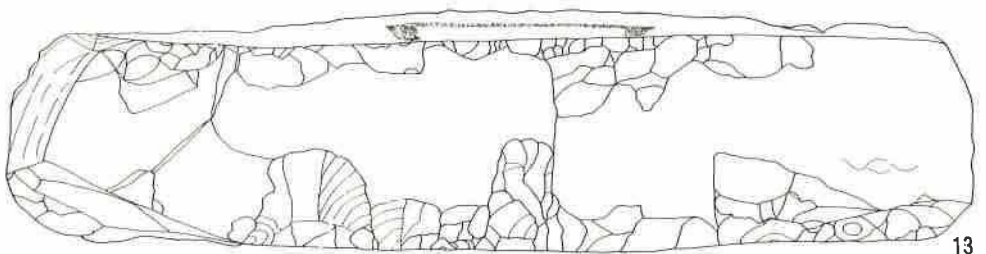
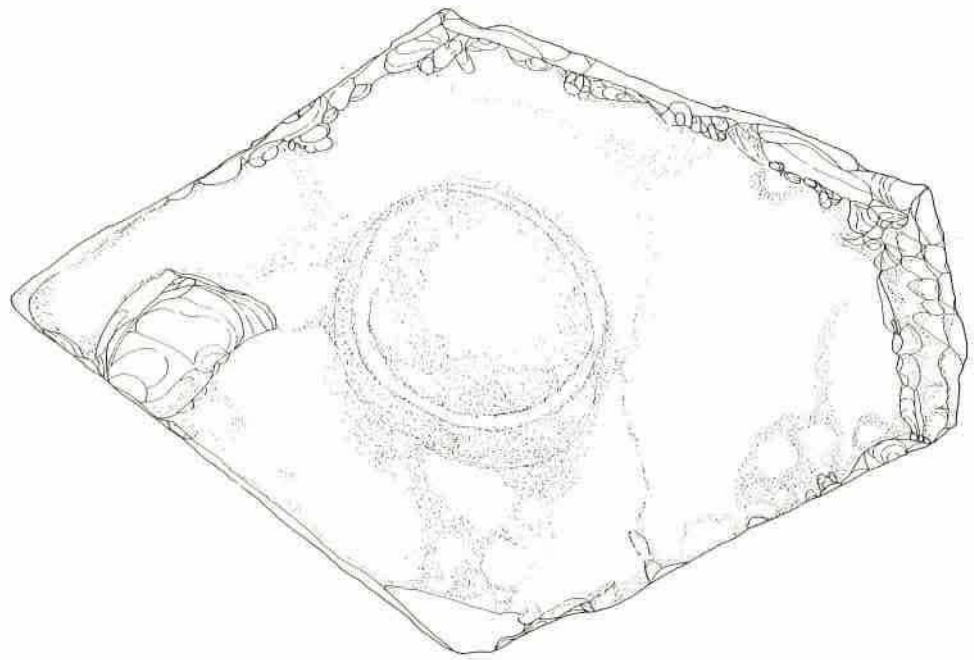
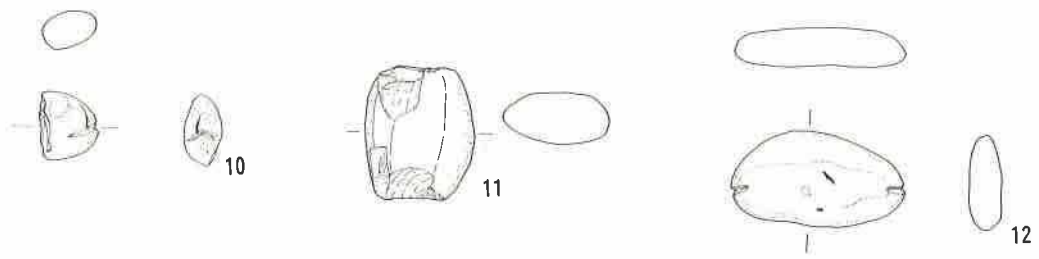
その他・剥片

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	遺存状態	所有	備考
111	10.2	5.8	3.8	安山岩	欠	公	
112	4.5	4.2	1.6	不明	欠	公	
113	4.5	4.7	1.0	チャート		個	
114	1.8	1.4	0.3	サヌカイト		個	
115	1.7	1.5	2.5	サヌカイト		個	
116	4.9	2.0	1.2	サヌカイト		個	
117	7.3	3.4	1.9	サヌカイト		個	
118	8.6	3.7	1.5	サヌカイト		個	
119	5.1	3.0	1.3	サヌカイト		個	

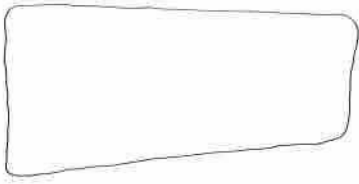
所有のうち、個は個人所有、公は公民館、他はその他を表わす。



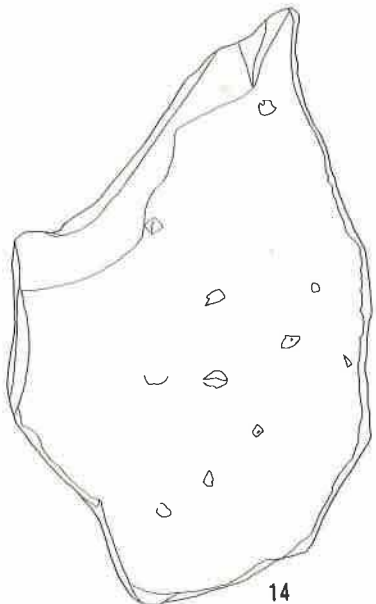
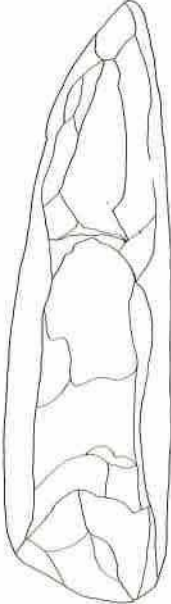
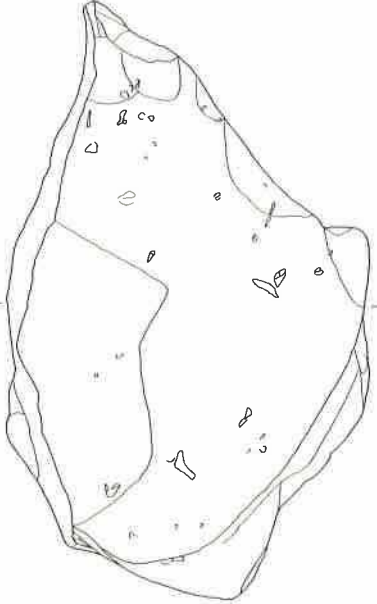
第33图 杉沢遺跡出土石器実測图 ①



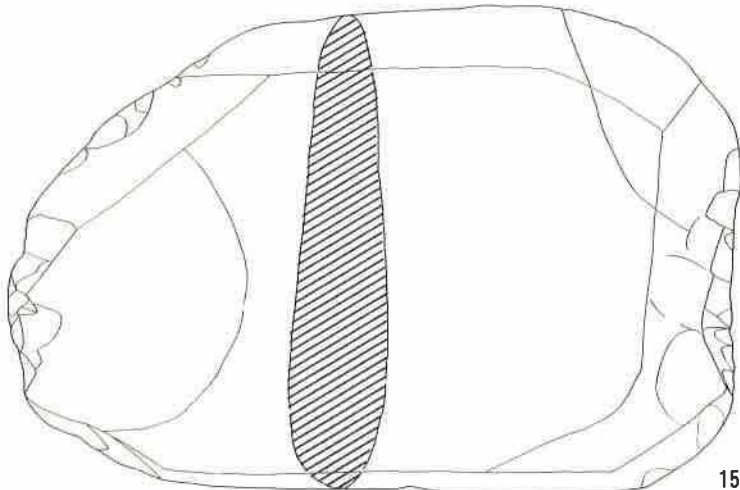
第34図 杉沢遺跡出土石器実測図 ②



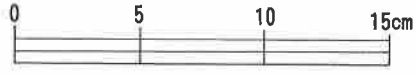
4000 147 200



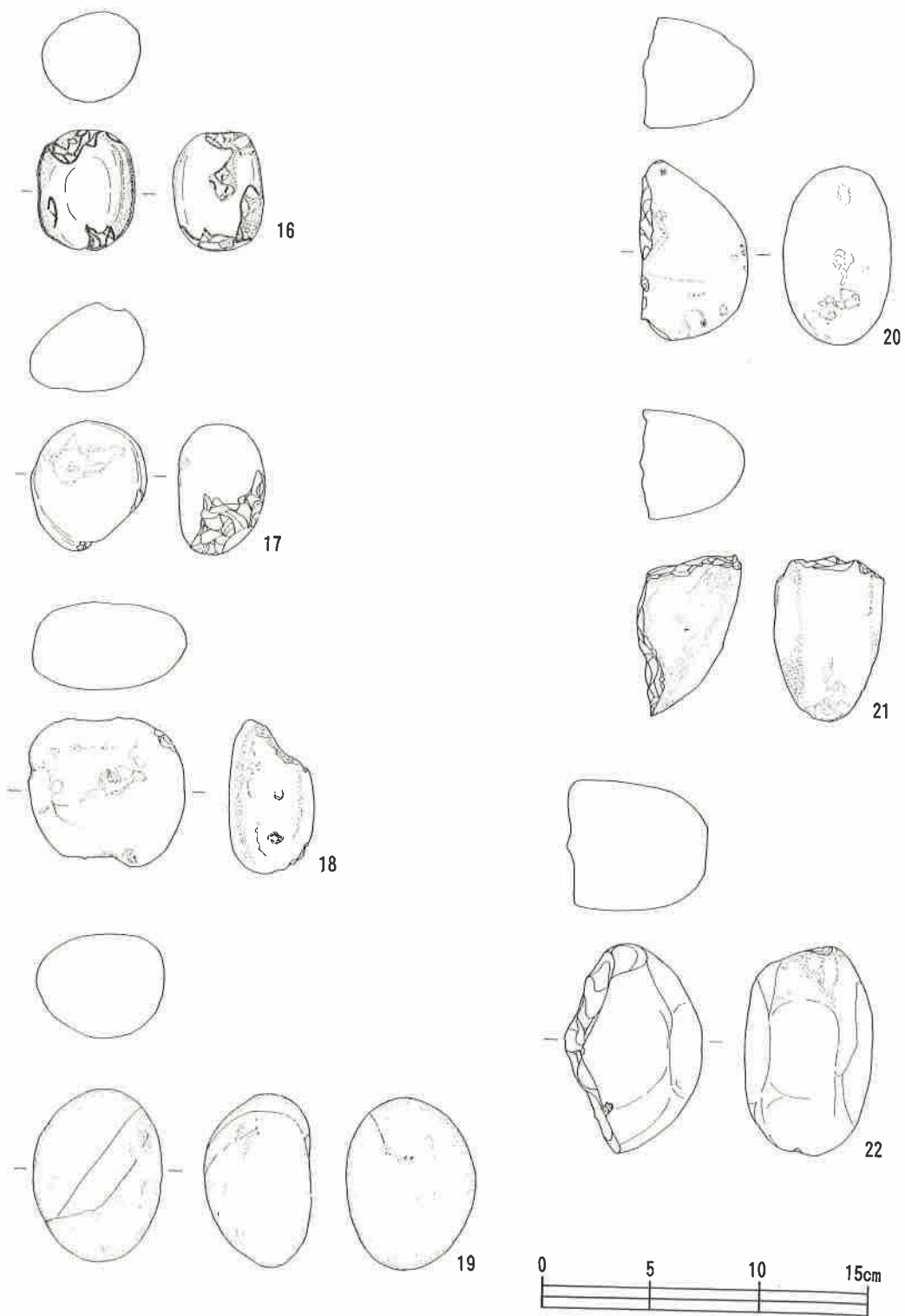
14



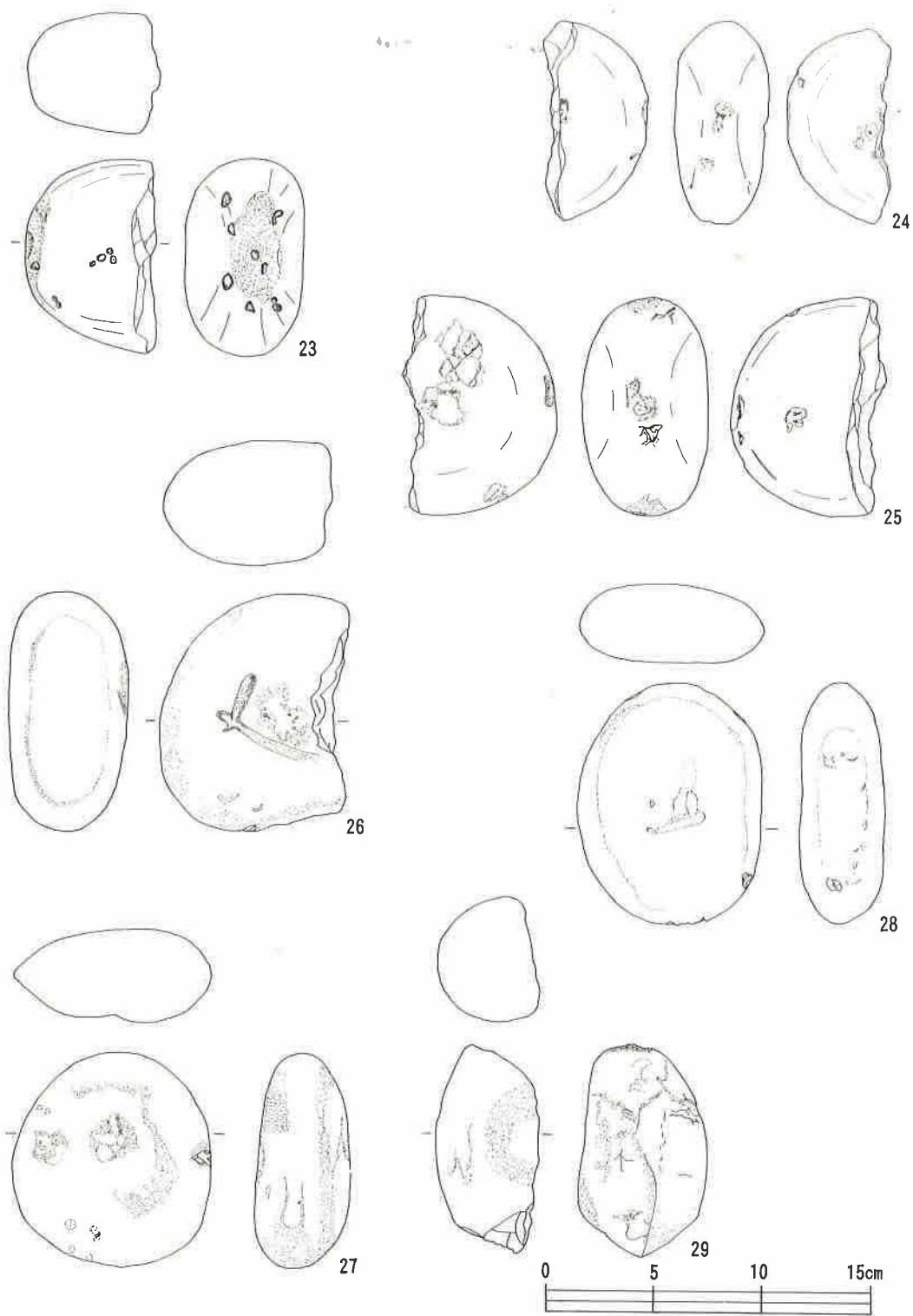
15



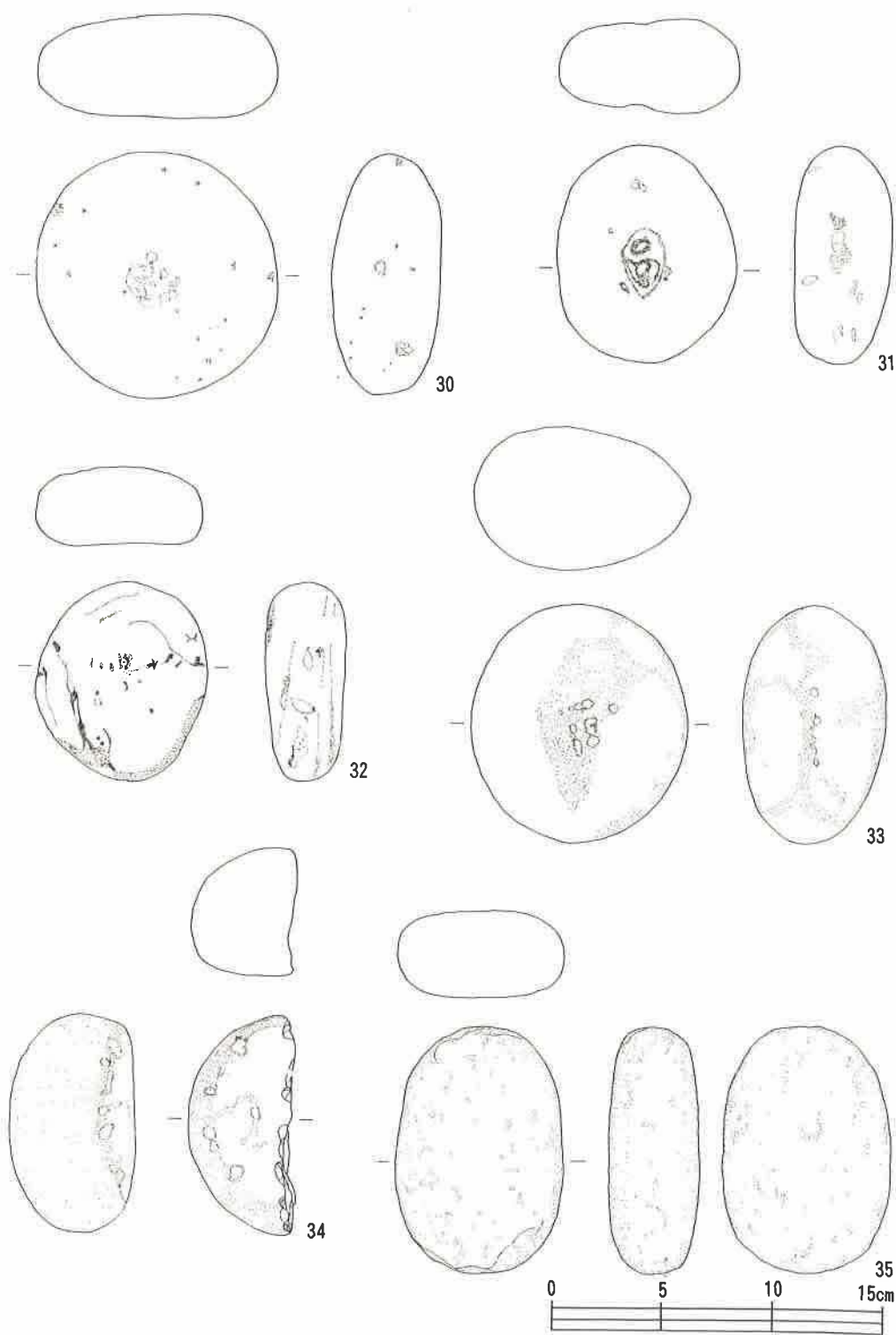
第35図 杉沢遺跡出土石器実測図 ③



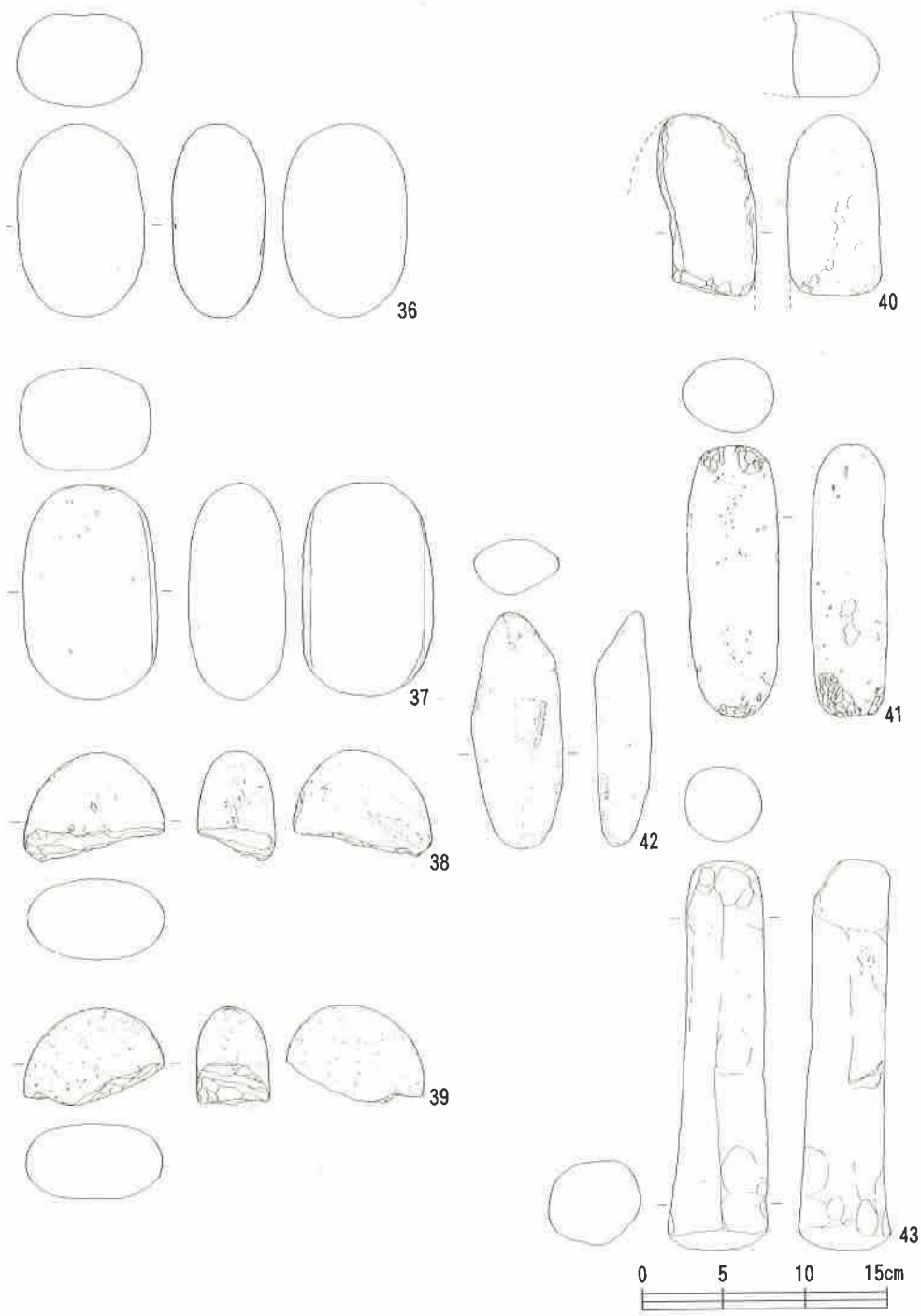
第36圖 杉沢遺跡出土石器実測図 ④



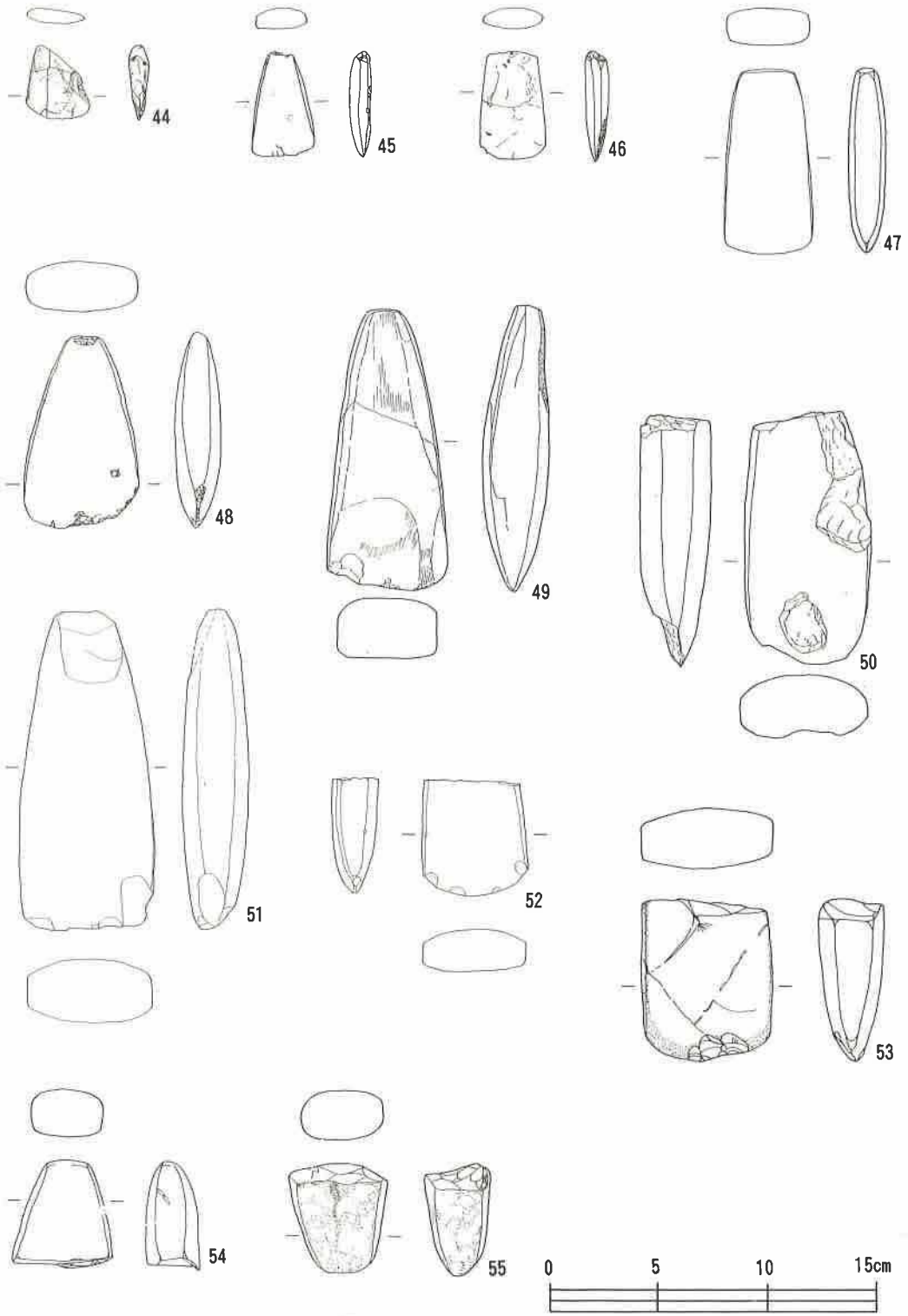
第37図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑤



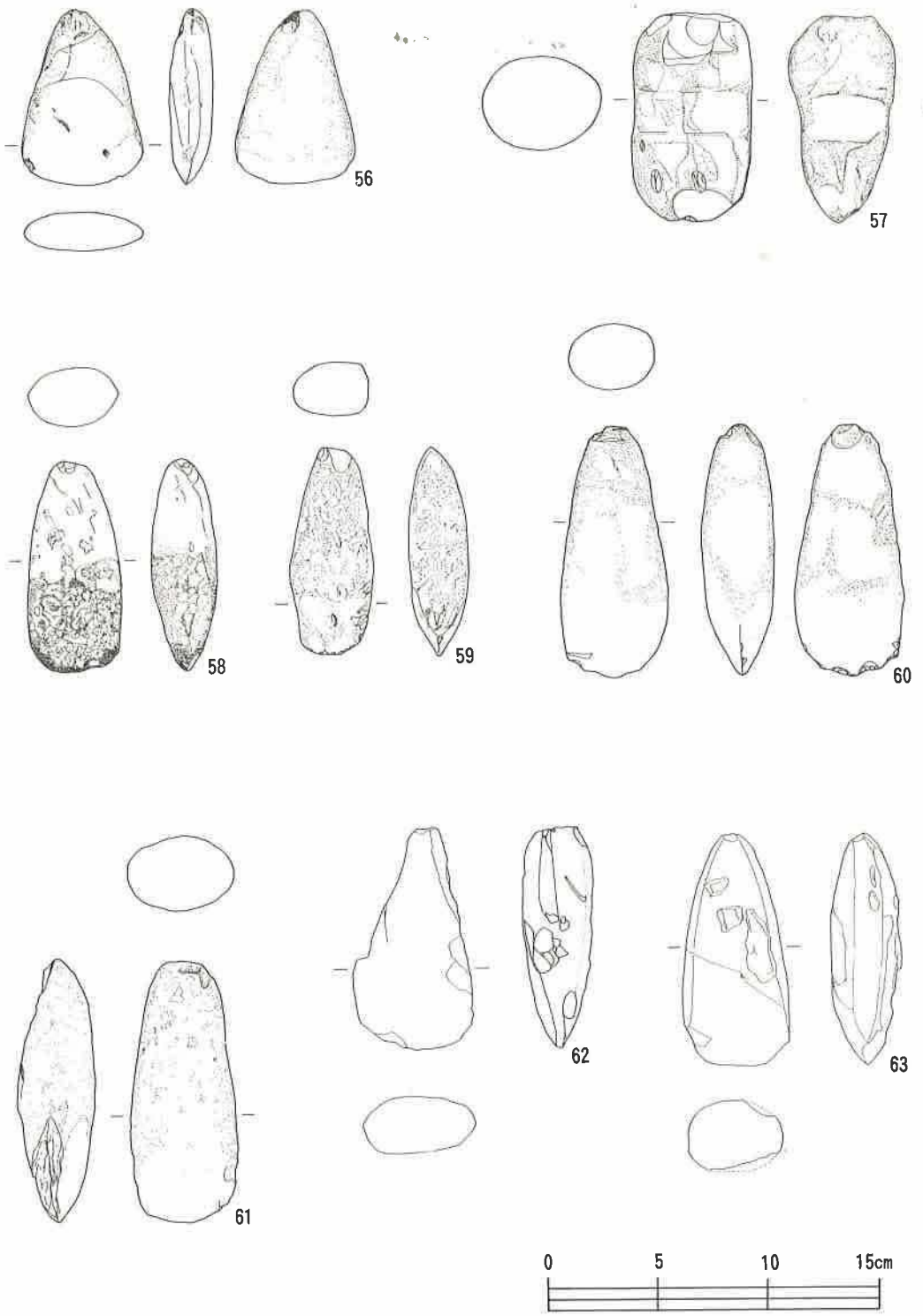
第38图 杉沢遺跡出土石器実測图 ⑥



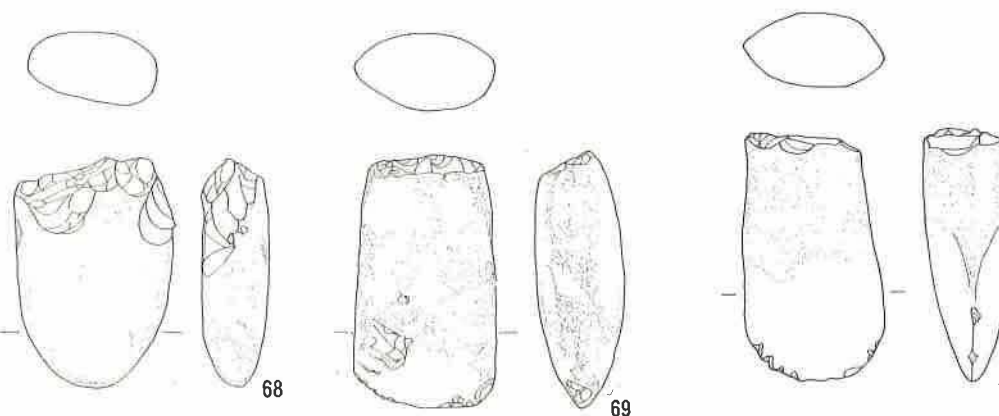
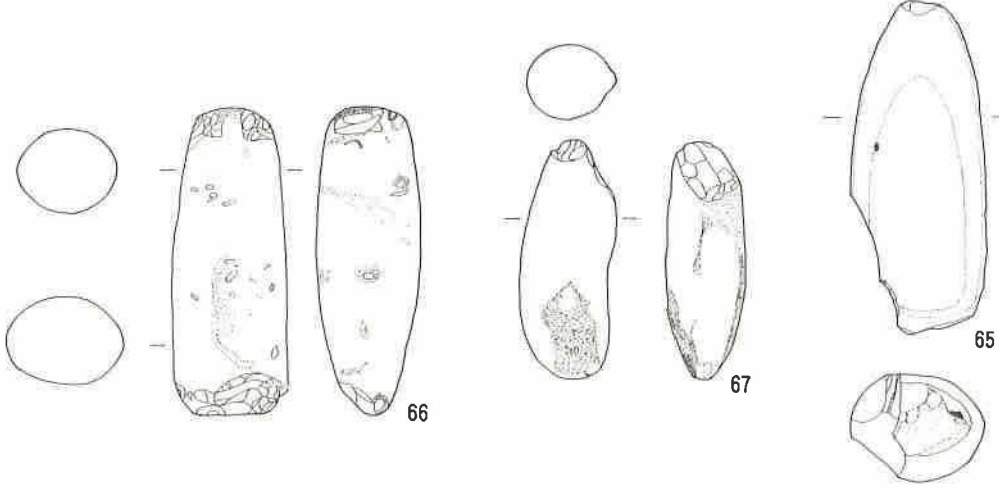
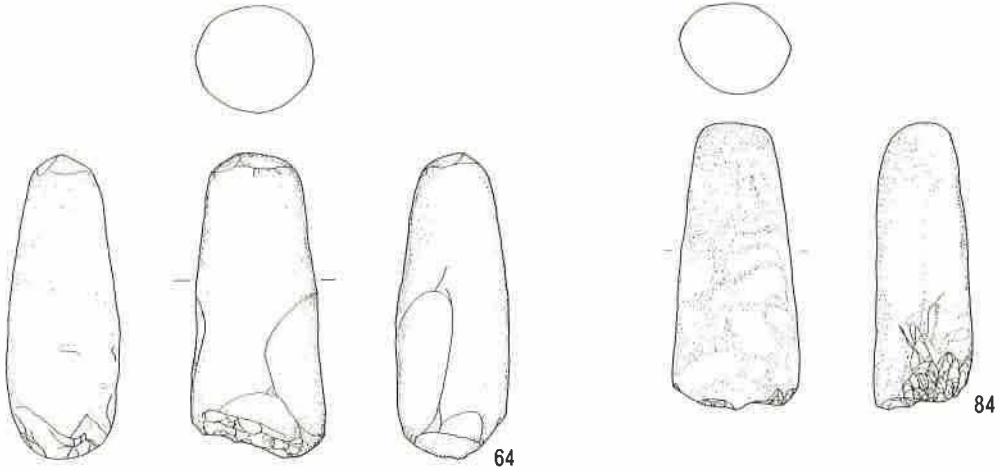
第39図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑦



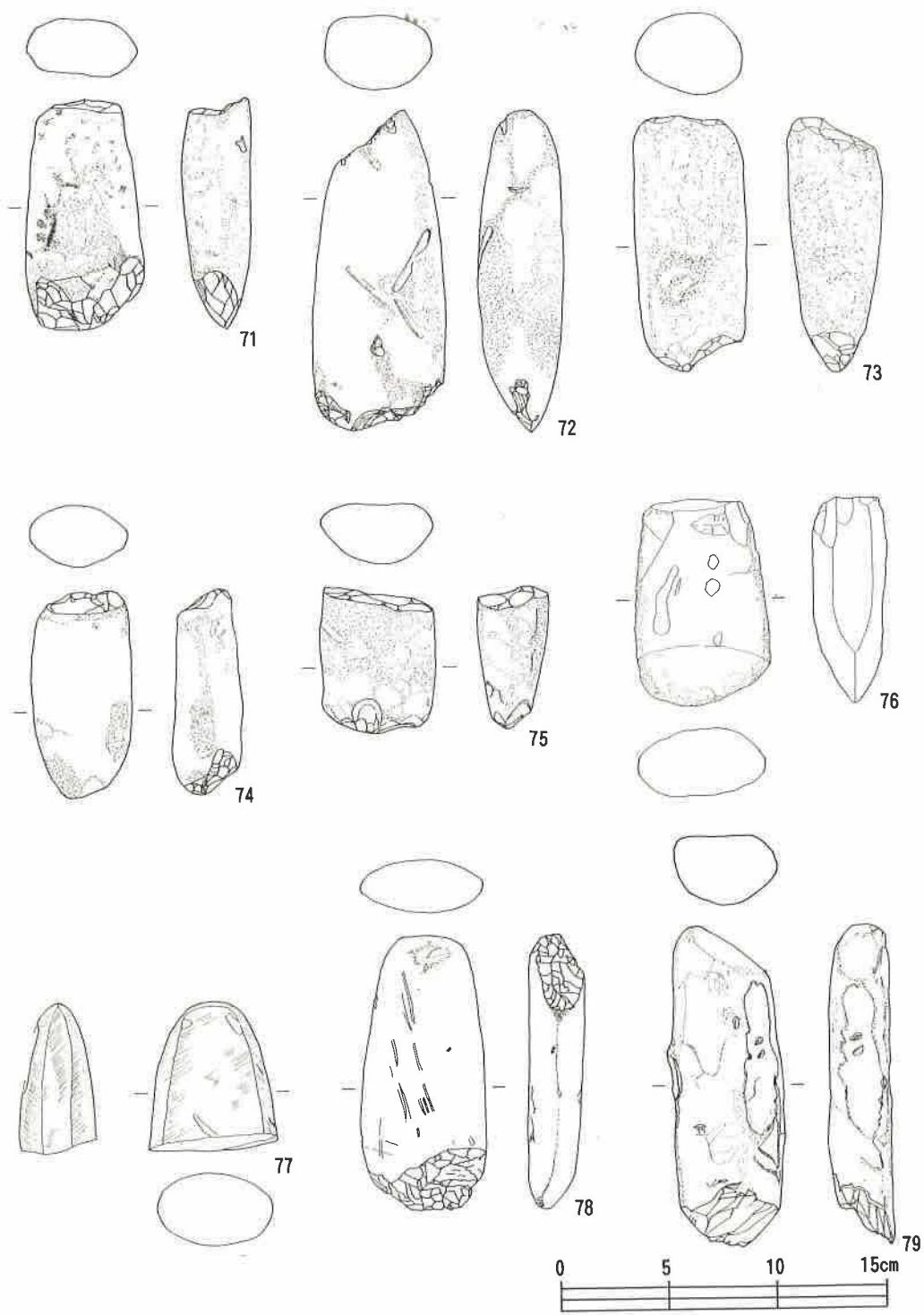
第40図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑧



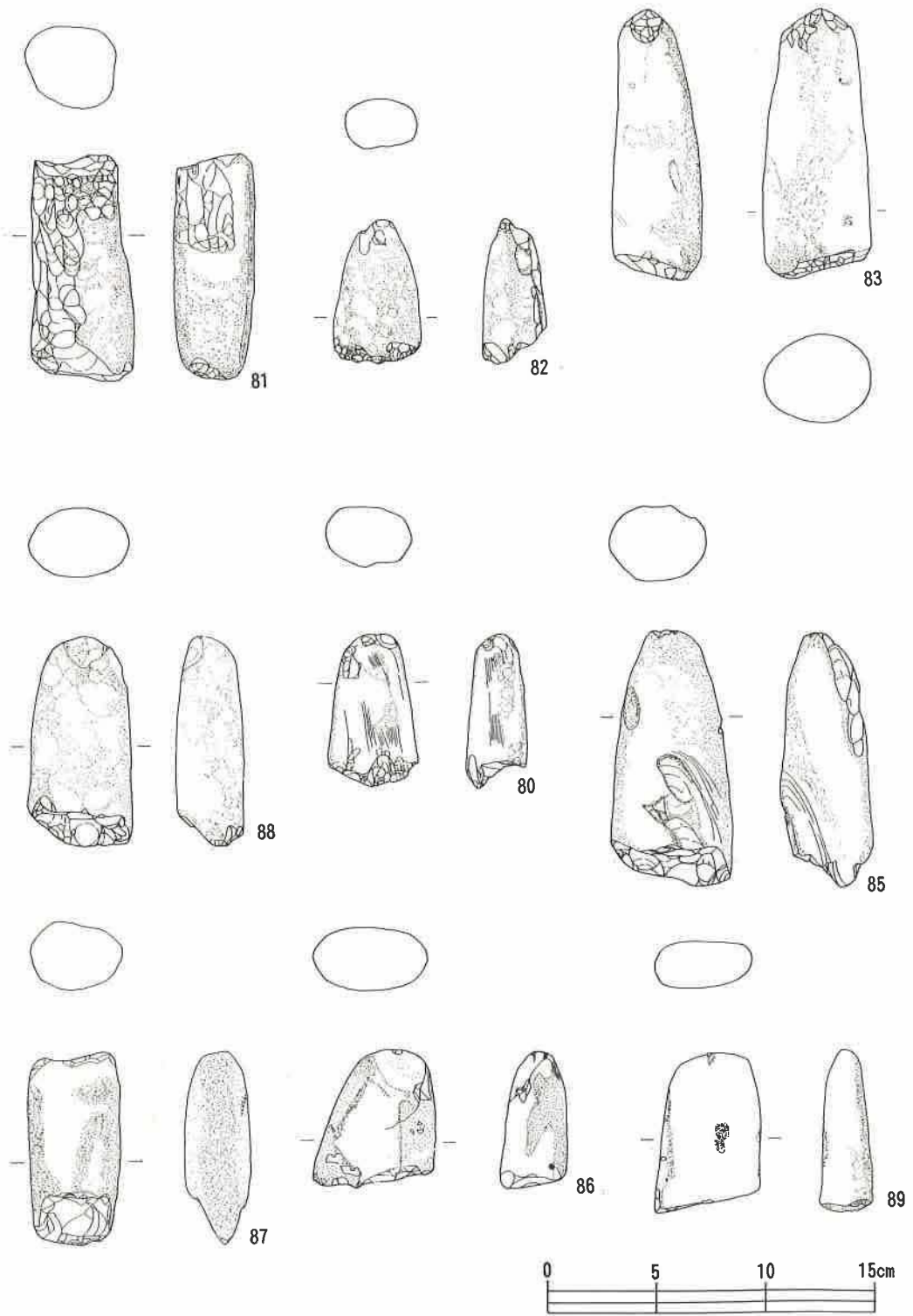
第41図 杉沢遺跡出土石器実測図 ㊸



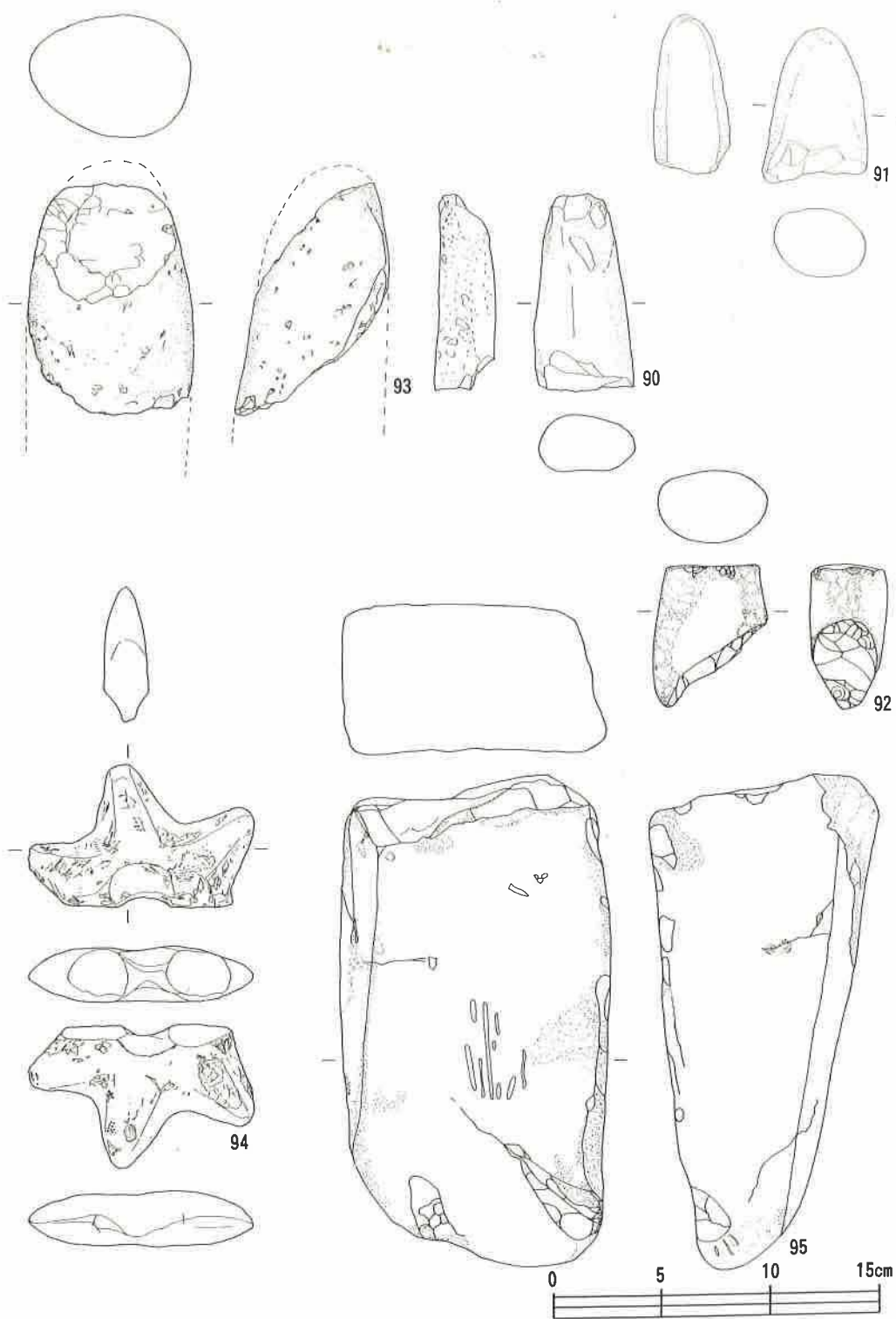
第42図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑩



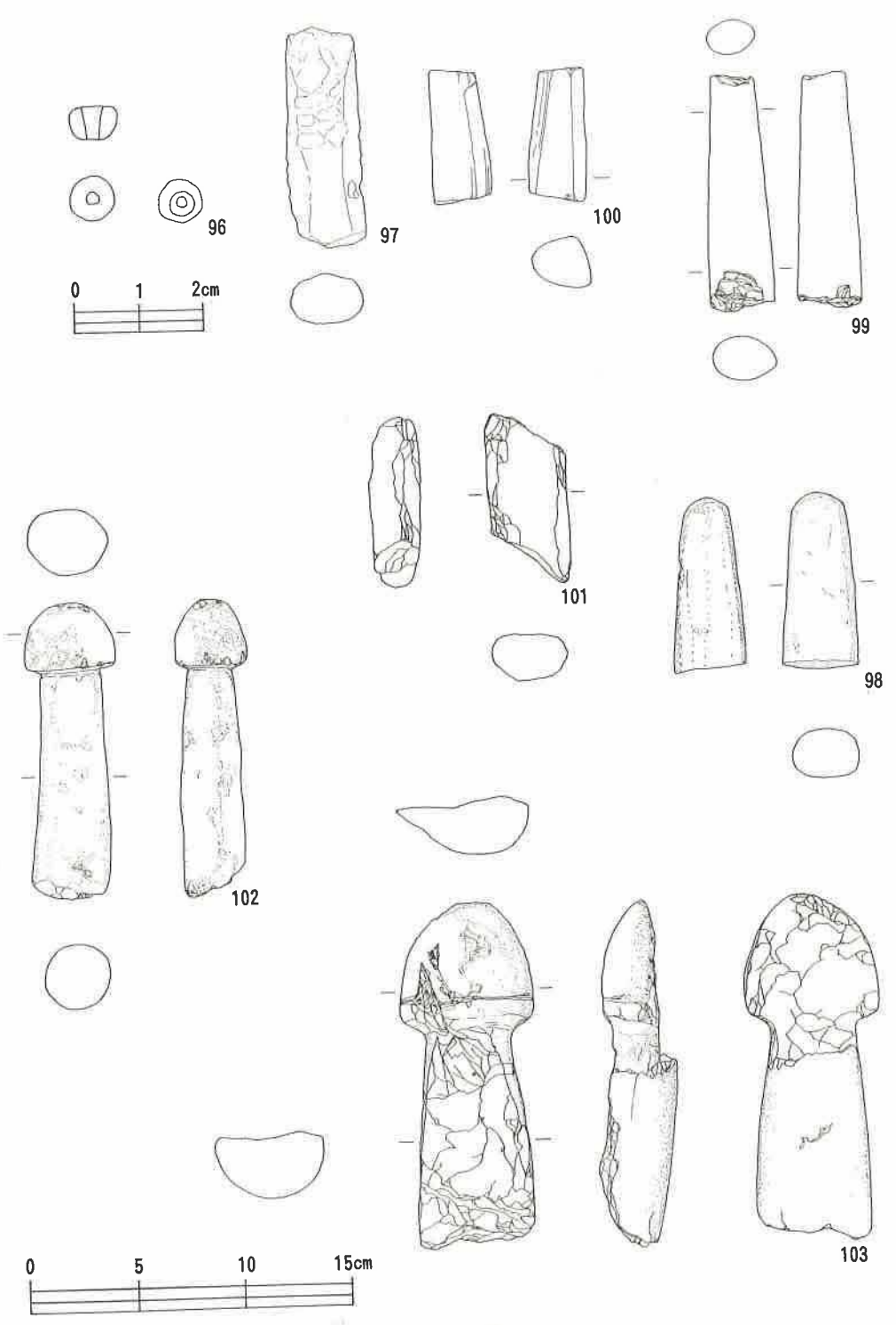
第43図 杉沢遺跡出土石器実測図 ①



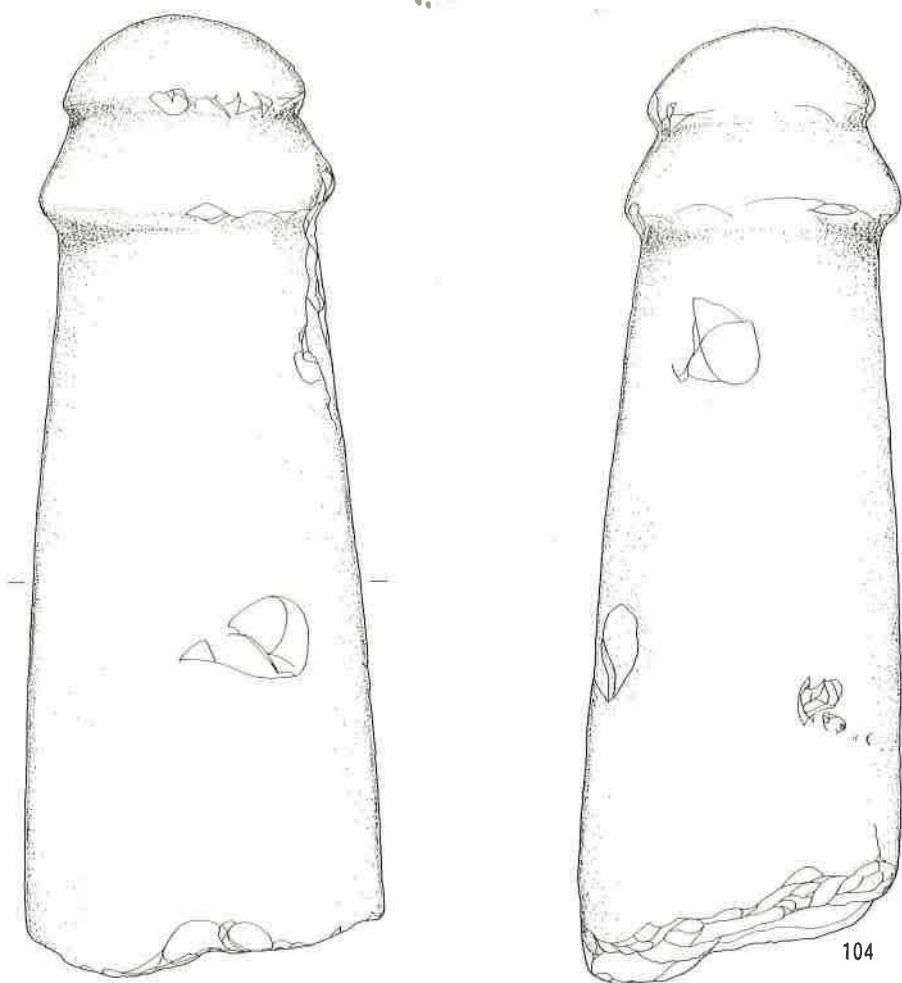
第44図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑫



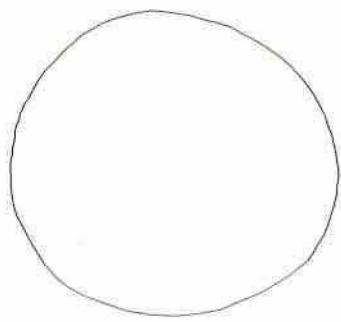
第45図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑬



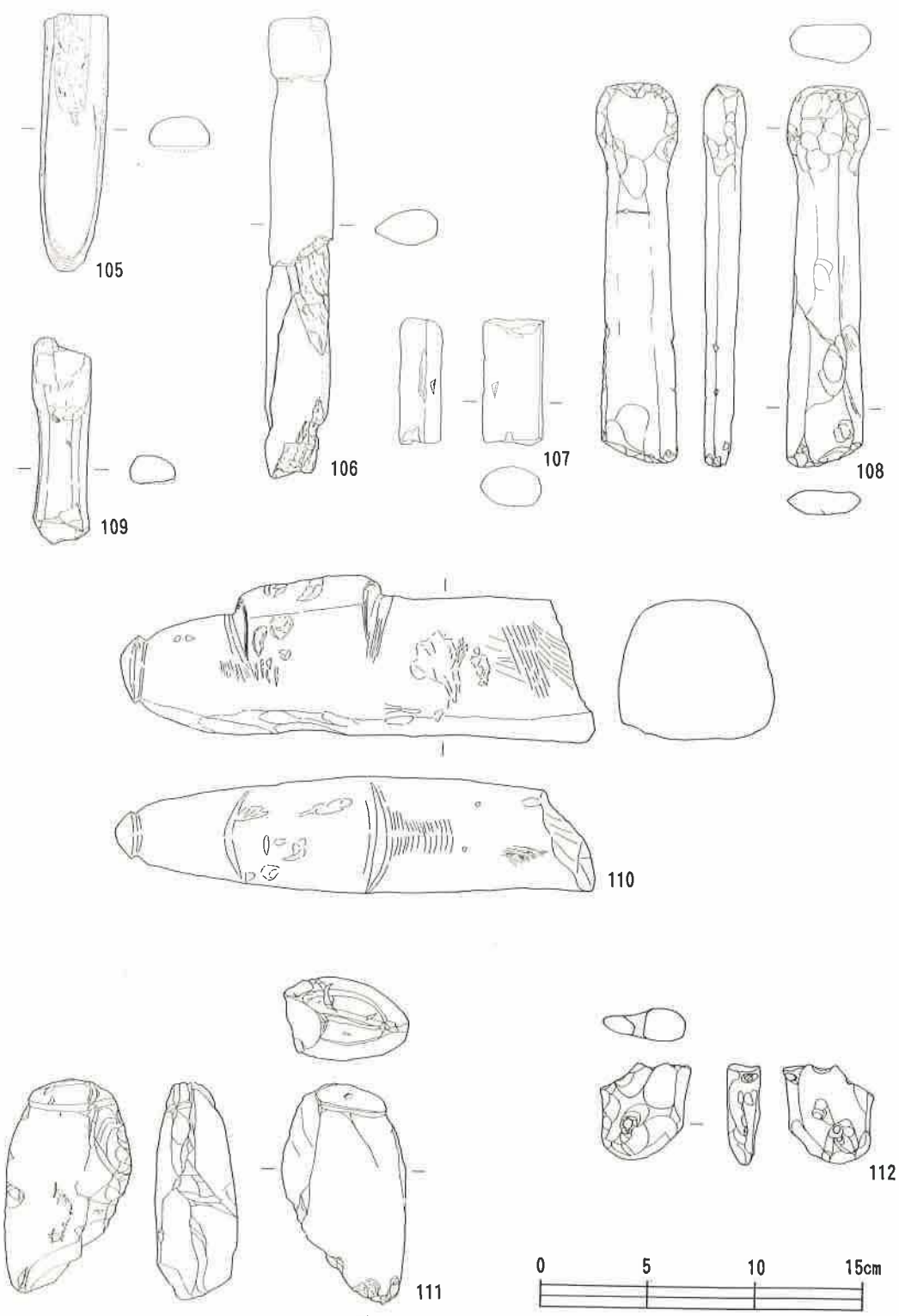
第46图 杉沢遺跡出土石器実測图 ⑭



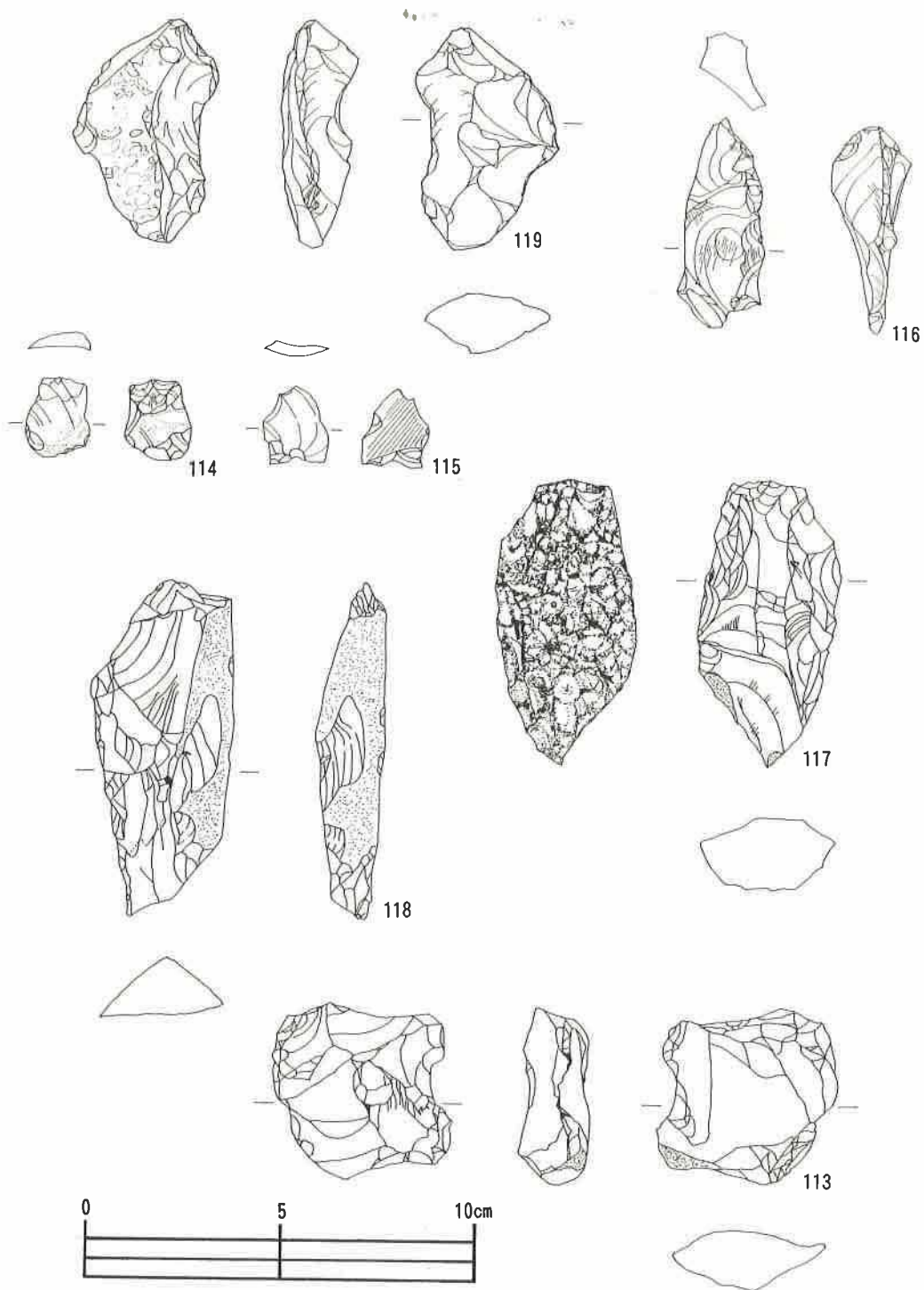
104



第47图 杉沢遺跡出土石器実測图 ⑮



第48図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑬



第49図 杉沢遺跡出土石器実測図 ⑰

遺物所有者一覧

(順不同・敬称略)

樋口 晋	高橋 芳光	西堀 慶治郎	藤田 和彦
大澤 寛	矢森 一成	辻村 彦治良	稲村 重一
丸本 真司	矢森 貞雄	辻村 孝男	要石 富美
玉泉 寺	善通 寺	松井 純典	吉川 保
笹木 清茂	児玉 英男	尾木 輝雄	松井 司
船川 俊治	谷口 美千代		

巻末になりましたが、厚くお礼申し上げます。

第5章 伊吹町 表

付表1 伊吹山寺関連略年表

付表2 伊吹町埋蔵文化財関係文献一覧

付表3 伊吹町内遺跡一覧表

付表1 伊吹山寺関係略年表

年 代 (年 号)	内 容
836(承和 3)	伊吹山が天下の七高山の一つに定められる。
850(嘉祥 3)	伊夫岐神社、朝廷より従五位下を授けられる。
851～54(仁寿年間)	高僧・三修が伊吹山に「一精舎」を建てる。(伊吹山寺の始まり)
859(貞観元)	伊夫岐神社が従五位上を授ける。
868(貞観 9)	朝廷から伊夫岐神社に弓箭、鈴鏡を奉られる。
877(元慶元)	伊夫岐神社が従三位を授ける。
878(元慶 2)	伊吹山寺が朝廷から「定額寺」に任ぜられる。
899(昌泰 2)	三修が伊吹山で没す。
1142(康治元)	僧・行観が太平寺の寺勢を高める。
1224(貞応 3)	長尾寺の僧・大乘が現在観音寺に所蔵されている伝教大師像(国宝)を造る。
1266頃(正元年間)	観音寺が現在の山東町朝日に移転する。(推定)
1200年代後半	京極氏信が太平寺に城を築く。
1308(徳治 3)	弥高寺と太平寺が本末寺をめぐって争論する。 文書に伊夫岐神社の一切経会を四カ寺が勤仕すると記す。
1327(嘉暦 2)	伊夫岐神社に後醍醐天皇から幕府調伏の令旨が下される。 (四寺が調伏祈祷?)
1333(元弘 3)	大名京極導誉が守良親王を奉じて太平寺から出兵し、番場で北条軍を討つ。 後伏見上皇、花園上皇、清蓮院宮らが太平寺に滞留。
1352～56(文和年間)	僧・深有が長尾寺を復興する。(蟬合伝説)
1439(永亨11)	長尾寺が長浜八幡神社三重塔建立に壺貫文を奉加する。
1476(文明 8)	長尾寺等が観音寺本堂建立に脇柱1本を奉加する。
1489(延徳 2)	このころ観音寺は23坊であった。 (「観音寺文書」)
1490(延徳 3)	このころ観音寺が延暦寺(天台宗)の末寺となる。
1495(明応4)	京極政高が弥高山より出兵する。
1496(明応5)	京極高清が弥高寺に布陣する。
1499(明応 8)	弥高寺が失火により焼失。
1492～1501(明応年間)	上平寺(大谷寺)焼失。
1512(永正 9)	弥高寺・松尾寺が兵火により焼失。
1513(永正10)	弥高寺本堂の勧進が行われる。
1502～21(永正年間)	長尾寺・上平寺が兵火にかかり焼失。(長尾寺は後に再建され49坊という)

年 代 (年 号)	内 容
1523(大永 3)	観音寺23坊。(「観音寺文書」)
1529(享禄 2)	京極家の山田、大津氏が上平寺の再興を神照寺に申し送る。 (神照寺は真言宗)
1536(天文 5)	伊夫岐神社修造のため僧・源盛、秀円が勧進を行う。 この時の記録『伊吹大菩薩奉加帳』に長尾寺16坊、弥高寺47坊、 太平寺36坊、松尾寺27坊、上平寺30坊などが見える。
1538(天文 7)	京極家の黒田、多賀氏が上平寺密蔵院領安堵を神照寺に申し送る。
1540(天文 9)	三之宮神社修造のための勧進がされる。 この時の記録『三宮奉加帳』に弥高寺16坊、太平寺35坊、松尾寺 6坊などが見える。
1552(天文21)	観音寺23坊。(「観音寺文書」)
1563(永禄 6)	文書に「伊吹社夏番之事 四ヶ寺勤之」とあり、社の行事に四カ寺が奉 仕。
1580(天正 8)	弥高寺が山の西麓に移るといふ。
1595(文禄 4)	石田三成、上平寺の寺領を安堵する。
1596～(慶長年間)	弥高寺が彦根藩の提封となる。(井伊家より山林が寄進される)
1616(元和 2)	上平寺に江戸幕府の掟書が与えられる。
1684～88(貞享年間)	黄檗宗の秀水禅師が松尾寺を再興する。 弥高阿伽井谷の岩窟に開山堂が築かれる。
1689(元禄 2)	僧・円空が太平寺中之坊にて十一面観音立像(町指定文化財)を造る。
1692(元禄 5)	長尾寺の調書に毘沙門堂ほか宗(惣)持坊・池ノ坊の2坊が記される。 悉地院(弥高寺)が長浜総持寺の客末となり五カ院に遇せられ大和国 長谷寺末となる。(真言宗豊山派)
1710(宝永 7)	松尾寺が失火により焼失。
1768(明和 5)	悉地院の日本堂が再建される。(明和8年、庫裡が再建される)
1786(天明 6)	悉地院の鐘楼が再建される。
1877(明治 9)	大久保の大火で長尾寺の里に接した坊が焼失。
1964(昭和38)	太平寺集落が集団移住。
1967(昭和42)	松尾寺が現在地小高野に再興される。
1986(昭和61)	弥高寺跡発掘調査実施される。
1988～89(S63丑元)	旧長尾寺の毘沙門天二体(県指定文化財)の修復が行われる。
1989(平成元)	長尾寺の新しい毘沙門堂が建立される。
1991(平成 3)	悉地院(弥高寺)の新年堂が建立される。

付表2 伊吹町埋蔵文化財関係文献一覧表

番号	文	献
1	大正 2年(1913) 滋賀県坂田郡役所編	『近江坂田郡志』
2	大正13年(1924) 中川泉三	「伊吹山下の石器」(『考古学雑誌』14-13)
3	昭和 3年(1928) 島田貞彦	「有史以前の近江」(『滋賀縣史蹟調査報告』第1冊)
4	東京帝国大学	『日本石器時代地名表』(第5版)
5	中川泉三	「坂田郡春照村杉沢辻村義男邸出土の石斧と弥生式土器」 (『中川泉三著作集2』刊行会)
6	昭和11年(1936) 柏倉亮吉	『滋賀縣史蹟名勝天然記念物概要』
7	昭和13年(1938) 小林行雄外	「近江坂田郡春照村杉澤遺蹟」(『考古学』9-5)
8	森本六爾	『弥生式土器聚成図録』
9	昭和16年(1941) 滋賀県坂田郡教育会編	『改訂近江國坂田郡志』
10	昭和26年(1951) 小林行雄	『日本考古学概説』
11	昭和36年(1961) 樋口清之	「古代湖北の鉄文化」(『歴史』9 長浜北高歴史部編)
12		『上代の近江』(近江古美術大観 考古編)
13	昭和40年(1965) 滋賀県教育委員会	『滋賀県遺跡目録』
14	昭和41年(1966) 岡田茂弘	「近畿」(『日本の考古学』2)
15	天羽利夫	「御物石器の研究」(『考古学雑誌』52-1)
16	昭和42年(1967) 外山和夫	「西日本における縄文文化終末の時期」(『物質文化』9)
17	昭和44年(1969) 末永雅雄・藤井祐介	「縄文晩期文化—近畿」(『新版考古学講座』)
18	田岡香逸	「近江湖北・湖東の石造美術(2)」(『民俗文化』70)
19	坪井良平	「伊吹山出土の明応の古鐘」(『滋賀文化財研究所月報10』)
20	昭和46年(1971) 杉原莊介・大塚初重	『土師式土器集成 本編1』
21	昭和47年(1972) 滋賀県他	『先史時代の文化』(近江文化史シリーズ 第2回展)
22	昭和49年(1974) 河井勇之助	「姉川源流地域の歴史」(『姉川源流地域学術調査報告書』 滋賀県)
23	昭和50年(1975) 三輪茂雄	「近江曲谷臼を訪ねて」(『民俗文化』145)
24	昭和51年(1976) 宇野茂樹	「伊吹山寺」(『柴田實先生古稀記念日本史論叢』)

番号	文	献
	昭和52年(1977)	
25	伊吹町文化財専門委員会	『伊吹山寺』(伊吹町文化財シリーズ2)
26	三輪茂雄	「粉碎機の元祖 西仏房(1)―滋賀県山谷遺跡第2次調査―」 (『粉体と工業』9-7)
27	三輪茂雄	「近江山谷白産地調査報告」(『民俗文化』169)
	昭和53年(1978)	
28	宮成良佐	「湖北地方の縄文時代遺跡」(『滋賀県文化財だより』)
	昭和54年(1979)	
29		『角川日本地名大辞典 25 滋賀県』
	昭和55年(1980)	
30	田中勝弘	「神ノ木塚」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-2』)
31	丸山竜平	「近江製鉄史序論」(『日本史論叢 8』)
32	滋賀県教育委員会	『滋賀県遺跡目録』
	昭和58年(1983)	
33	滋賀県教育委員会	『滋賀県中世城郭分布調査 1』
	昭和59年(1984)	
34	近江風土記の丘資料館	『近江の縄文時代』
35	文化庁	『全国遺跡地図 滋賀県』
	昭和60年(1985)	
36	長谷川銀蔵他	「上平寺城跡」(『近江の城』16)
37	用田政晴	「弥高百坊の調査について」(『近江の城』16)
38	小和田哲男	「京極氏の内訌と上平寺城」(『近江の城』16)
39	近江風土記の丘資料館	『近江出土の中世陶磁―常滑と輸入陶磁を中心に』
	昭和61年(1986)	
40	用田政晴	『弥高寺跡調査概報』伊吹町教育委員会
41	近江風土記の丘資料館	『近江出土の中世陶磁―実測図集成 I』
	昭和62年(1987)	
42	滋賀県教育委員会	『滋賀県文化財調査年報「昭和60年度」』
43	滋賀県百科事典刊行会	『滋賀県百科事典』大和書房
44	近江風土記の丘資料館	『近江出土の施釉陶器―多彩釉、緑釉、灰釉、瀬戸、美濃』
45	丸山竜平	「渡来人と絹と鉄―ヤマト政権を支えた湖北」(『湖北・古 代のロマン―長浜文化塾講演録』長浜観光協会編)
	昭和63年(1988)	
46	用田政晴	『杉沢遺跡発掘調査概要報告書』伊吹町教育委員会
47	近江風土記の丘資料館	『近江出土の施釉陶器―実測図集成 II』
	平成元年(1989)	
48	小島道裕	「上平寺城下について」(『近江の城』34)
49	兼康保明	「近江の板碑」(『文化財教室シリーズ』108)
50	滋賀県教育委員会	『滋賀県中世城郭分布調査 6 旧坂田郡』
51	村田修三	「湖北の城館」(『滋賀県中世城郭分布調査 6』)
	平成3年(1991)	
52	中井均	「近江の古城 II」(『文化財教室シリーズ』120)
	平成4年(1992)	
53	高橋順之	『伊吹町内遺跡発掘調査 高番遺跡・杉沢遺跡』伊吹町教育 委員会
54	高橋順之	『長尾寺遺跡測量調査報告書』伊吹町教育委員会

付表3 伊吹町内遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地		種類	時代	立地	地目	遺物	備考	文献
		大字	小字							
1	瀬戸山遺跡	甲津原	瀬戸山	散布地	古代~中世	山麓	水田	土師器		
2	治山遺跡	甲津原	向山	岩跡	中世	丘陵	山林・水田			50
3	下津原遺跡	甲津原	下津原	散布地	古墳~中世	山麓	水田	土師器、須恵器		
4	岩井谷遺跡	曲谷	岩井谷	生産	鎌倉~近代	谷	山林	石造物未製品		18. 23. 26. 27. 49
5	サナギ谷遺跡	曲谷	サナギ	生産	鎌倉~近代	谷	山林	石造物未製品		18. 23. 26. 27. 49
6	起し又遺跡	曲谷	起し又	散布地	縄文	山麓	水田	縄文後期土器		
7	ムカイラ遺跡	曲谷	ムカイラ	散布地	古代~中世	山麓	水田	土師器		
8	大平遺跡	甲賀	大平	散布地	古代~中世	山麓	水田	土師器		
9	大カイト遺跡	甲賀	大カイト	散布地	古墳~中世	山麓	水田	土師器、須恵器		
10	カン谷遺跡	甲賀	カン谷	散布地	平安~中世	山麓	水田	土師器、須恵器		
11	七廻り峠遺跡	吉槻		岩跡	中世	山頂	山・林		浅井町境	50
12	内座遺跡	上板並	内座	散布地	古代~中世	山麓	水田	土師器		
13	長谷遺跡	下板並	長谷、長谷下	散布地	縄文~中世	山麓	水田	石斧、土師器、須恵器		6
14	長尾寺遺跡	大久保	上ノ山	寺院跡	平安~室町	山麓	山林	陶磁器、石仏、石塔	伊吹山寺の一つ、三修創建伝承	9.22.24.25.39.44.54
15	小泉遺跡	小泉	中河原	散布地	弥生	山麓	畑地	弥生土器		
16	峯堂遺跡	小泉	峠	館跡	中世	山麓	山林		石垣、削平地、太平寺との関係	50
17	伊吹城跡	小泉	奥泉	集落跡	縄文~	山麓	水田・畑地	縄文土器、石斧、石剣、須恵器		2. 3. 6. 9. 12. 34. 28
18	伊吹上遺跡	伊吹	東川	城跡	室町	山麓	山林		石垣、削平地	33. 50
19	岩ノ上遺跡	伊吹	岩ノ上	散布地	弥生	山麓	水田	弥生土器、石鏃		
20	太平寺遺跡	太平寺	坂ノ内	散布地	縄文	山腹	雑種地	石斧	「太平寺A遺跡」を改称	9
21	太平寺遺跡	太平寺	坂ノ内	寺院跡	平安~室町	山腹	雑種地	石仏、石塔	伊吹山寺の一つ、三修創建伝承 「太平寺B遺跡」を改称	9. 24. 25
22	太平寺城跡	太平寺	坂ノ内	城跡	鎌倉~室町	山腹	雑種地		削平地あり、京極氏の居城	6. 9. 11. 33. 50
23	伊吹山遺跡	上野	伊吹山	経塚	中世	山頂	草地		石垣	9. 22. 25

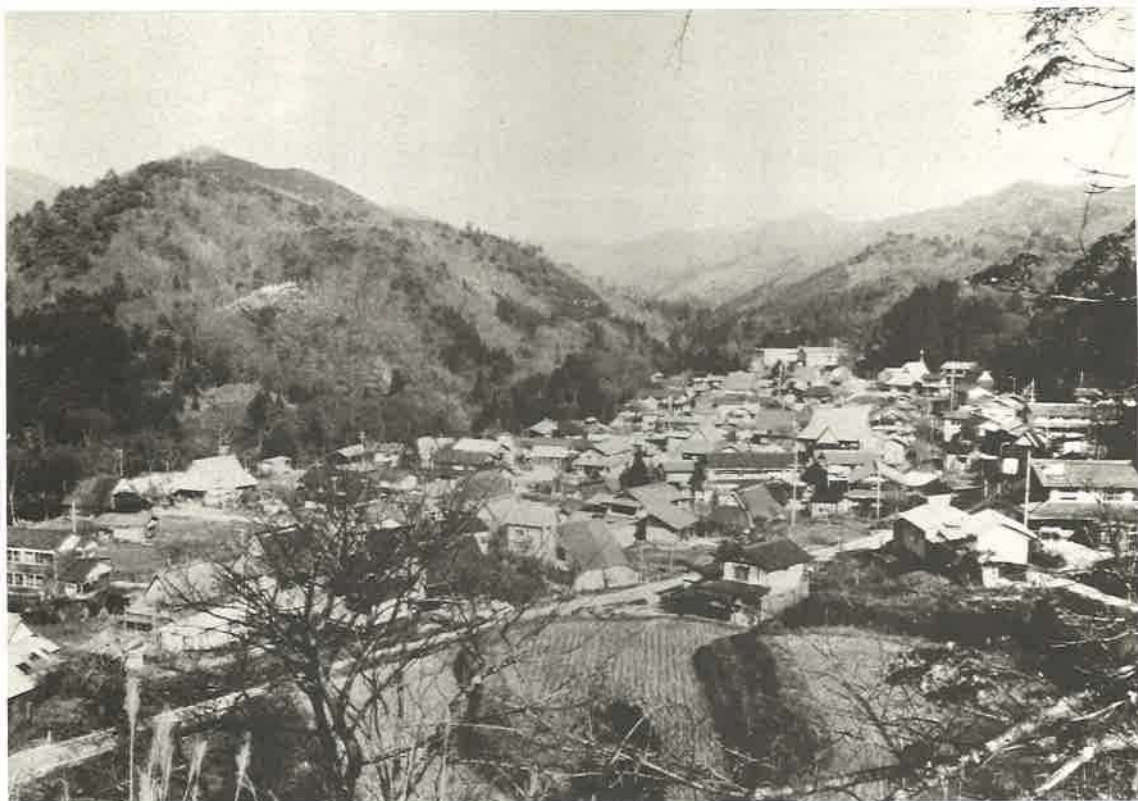
24	伊吹山頂遺跡	上野	伊吹山	散布地	縄文	山頂	草地	石鏃		9
25	行導岩遺跡	上野	伊吹山	行場	平安～	山腹	山林		伊吹山修験の行場の一つ	25
26	高屋端出遺跡	上野	伊吹山	岩跡	中世	山腹	山林			50
27	上野中ノ岡遺跡	上野	中ノ岡	寺院跡		山麓	工場地		「上野A遺跡」を改称	9
28	上野遺跡	上野	堀西他	散布地	縄文	山麓	山林	石斧	「上野B遺跡」を改称	
29	観音寺遺跡	上野	伊吹山	寺院跡	平安～鎌倉	山腹	山林		伊吹山寺の一つ、三修創建伝承	9. 24. 25
30	松尾寺遺跡	上野	伊吹山	寺院跡	平安～	山腹	寺地	梵鐘	伊吹山寺の関係寺院	9. 19. 25
31	人塚遺跡	上野	人塚	散布地	縄文	山麓	水田	石槍		
32	野頭遺跡	上野	野頭、登り道	散布地	縄文	山麓	畑地	石鏃、石斧		
33	弥高寺遺跡	弥高	西中毛、東中毛	寺院跡	平安～室町	山腹	山林	陶磁器、石仏、石塔	伊吹山寺の一つ、三修創建伝承 刈安尾城？	6. 9. 24. 25. 36. 37. 39. 40. 42. 44
34	上平寺城跡	弥高	赤谷他	城跡	室町	山腹	山林		削平地、堀切、京極氏の居城	6. 9. 33. 36. 38. 50. 52
35	堂ノ前遺跡	弥高	堂ノ前	散布地	縄文～弥生	山麓	畑地	弥生土器、石鏃	「弥高遺跡」を改称	
36	東野遺跡	弥高	東野、野畑	散布地	縄文	山麓	畑地	石鏃、石鏃、石匙		
37	伊豆畑遺跡	弥高	伊豆畑	集落跡	古墳	山麓	山林	土師器		
38	赤谷遺跡	弥高	平野	集落跡	平安	山麓	山林	土師器、須恵器		
39	祢宜田遺跡	春照	祢宜田	集落跡	古墳～中世	平地	水田	土師器、須恵器、陶器	「春照遺跡」を改称	
40	篠塚館遺跡	春照	細窪	館跡	中世	平地	山林			33. 50
41	春照館遺跡	春照	寺道	館跡	中世	平地	施設地			33. 50
42	高番遺跡	高番	繩手他	集落跡	縄文～平安	平地	宅地畑地	土器、陶器、石器、勾玉		9. 11. 31. 45. 53
43	大願寺遺跡	高番	宮ノ東	寺院跡		平地	竹林	瓦、陶器		9
44	杉沢遺跡	杉沢	門田他	集落跡	縄文～平安	平地	宅地他	土器、石器、甕棺、御物石器		2. 3. 5. 6. 7. 9. 10. 15. 28. 34. 46. 53
45	十王堂遺跡	杉沢	真経堂	寺院跡		平地	畑地			9
46	正明寺遺跡	杉沢	川西	寺院跡		平地	畑地		「正明堂遺跡」を改称	9
47	村木遺跡	村木	宮西	散布地	縄文	平地	水田	石斧、石棒		9
48	村木城跡	村木	村の内	城跡	中世	平地	宅地			33. 50
49	神ノ木塚遺跡	村木	神ノ木塚	墓跡	中世	平地	水田	土師器、五輪塔	消滅	9. 30
50	神戸遺跡	大清水	神戸	集落跡	古墳～平安	山麓	水田	土師器、須恵器		

番号	遺跡名	所在地		種類	時代	立地	地目	遺物	備考	文献
		大字	小字							
51	井の田遺跡	大清水	井の田	集落跡	縄文～弥生	山麓	水田	縄文中期土器、弥生土器、石器		8. 9. 20
52	竹カ鼻遺跡	大清水	竹カ鼻	散布地	古墳～	山麓	宅地	土師器、須恵器	「大清水233番地遺跡」を改称	
53	大清水屋敷遺跡	大清水	井の田	館跡		山麓	山林		削平地あり	50
54	大清水遺跡	大清水	丸山	散布地	縄文	山麓	畑地	石棒		
55	十蓮寺遺跡	大清水	堂ノ前	寺院跡	中世	丘陵	山林	陶器	字名あり	9. 50
56	岩砦山古墳	大清水	西岩原	古墳	古墳	山頂	山林	須恵器、土師器	円墳	9
57	天清城遺跡	大清水	西岩原	城跡	中世	山頂	山林		削平地あり	9. 33. 50
58	上平寺館遺跡	上平寺	神屋敷	館跡	室町	山麓	社地		削平地、土塁、庭園跡	6. 9. 33. 36. 38. 48. 50
59	上平寺南館遺跡	上平寺	高殿	館跡	室町	山麓	畑地		削平地	33. 36. 48. 50
60	上平寺遺跡	上平寺	大門西他	寺跡・ 墓下町跡	中世	山麓	宅地		「上平寺A遺跡」を改称	25. 48
61	上平畑遺跡	上平寺	上平畑	散布地	縄文	山麓	畑地	石斧	「上平寺B遺跡」を改称	6. 9
62	長福寺遺跡	上平寺	山神戸他	寺院跡	中世	山麓	山林	陶器	削平地	9. 48
63	寺林遺跡	藤川	上古屋他	散布地	奈良～平安	山麓	水田	土師器、須恵器		
64	藤川城跡	藤川	菜洗	城跡	中世	山麓	宅地			50
65	暖水寺遺跡	藤川	暖水	寺院跡		山麓	山林			9
66	今須道遺跡	藤川	赤坂	岩跡	中世	山頂	山林		岐阜県関ヶ原町境	50

圖 版



杉沢遺跡付近から伊吹山を望む



姉川上流・甲津原集落



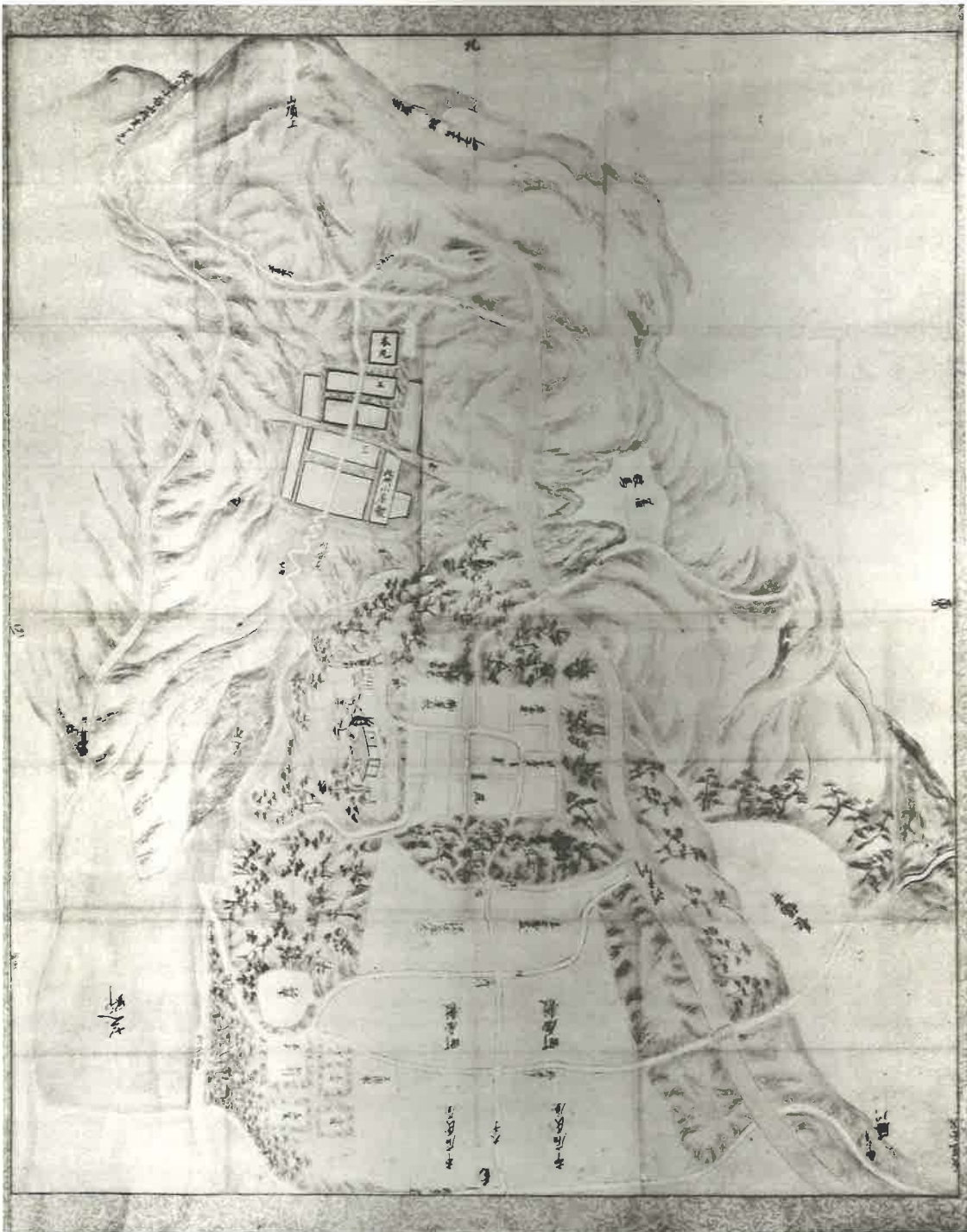
調査風景・表面採集



杉沢遺跡調査風景（昭和13年）



杉沢遺跡壙棺出土状況（同上）

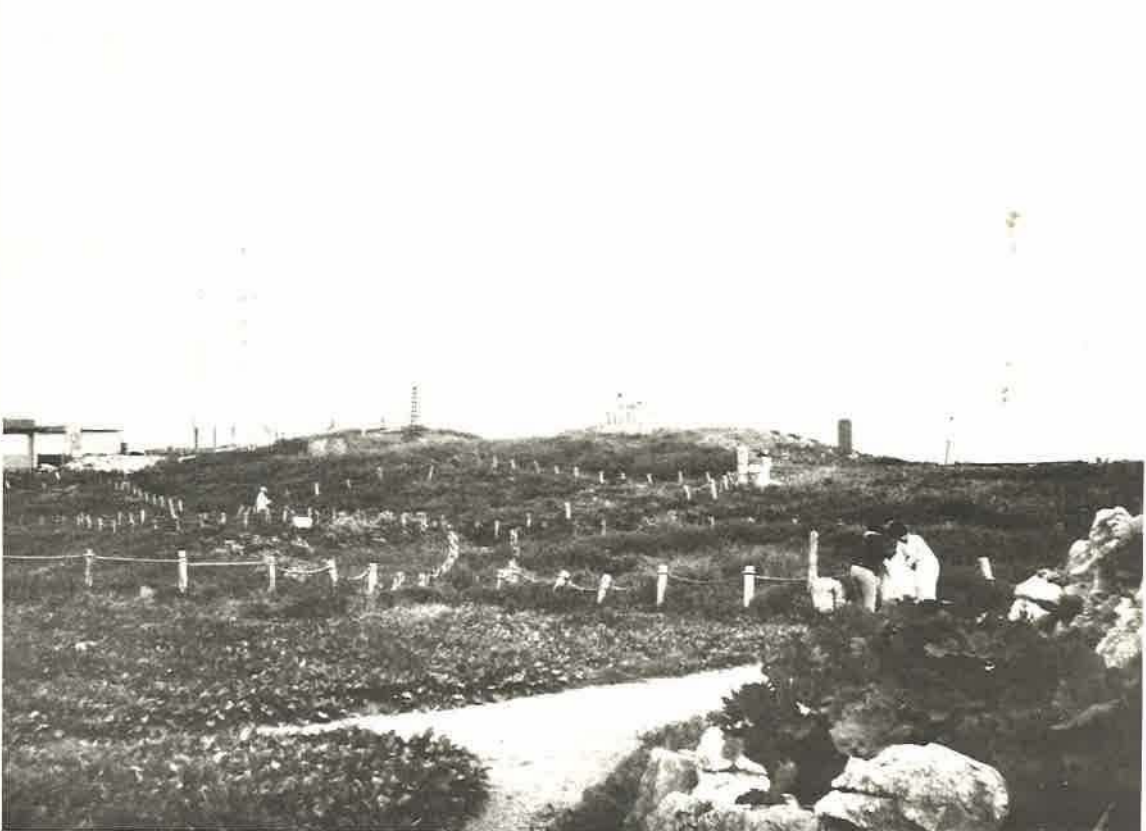


上平寺城古図

(近江の城友の会発行)



弥高寺遺跡遠望（上平寺城跡より）



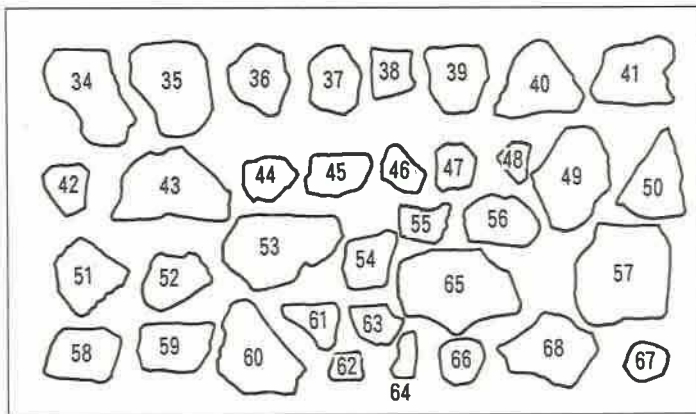
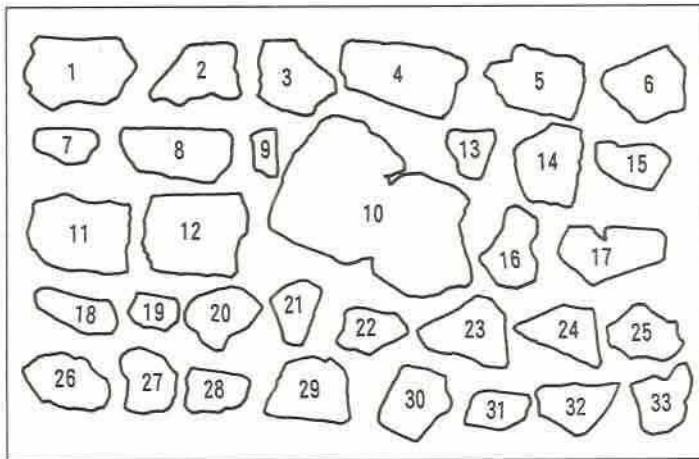
伊吹山頂

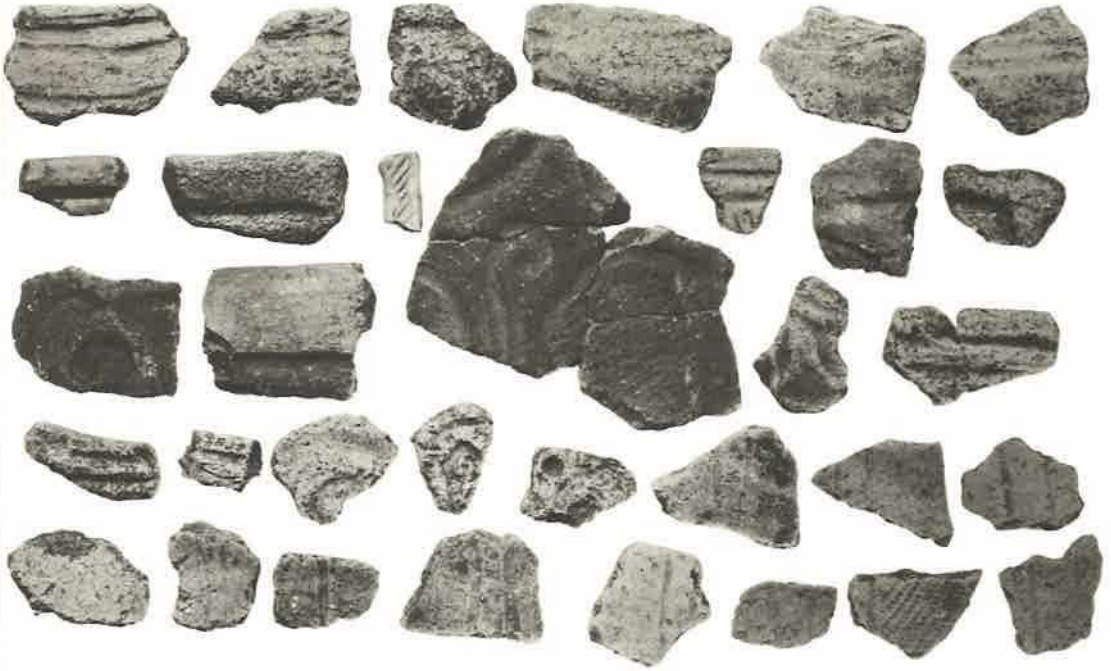


サナギ谷遺跡・石臼未製品出土状況

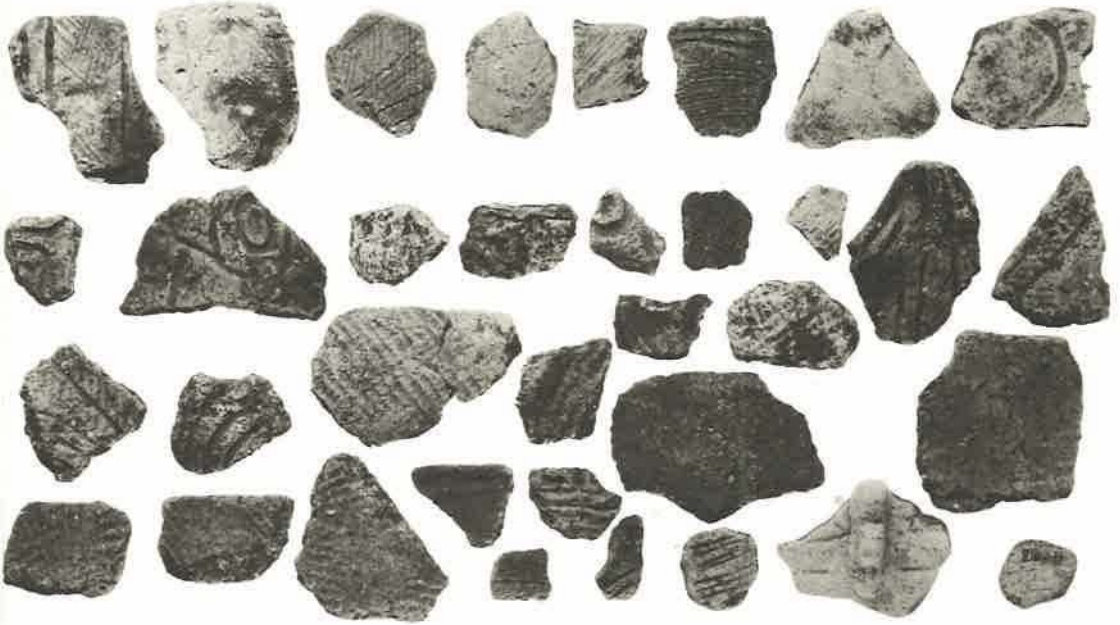


治山遺跡





井の田遺跡出土縄文式土器 ①



井の田遺跡出土縄文式土器 ②

伊吹町文化財調査報告書第3集
町内遺跡分布調査

1992年 3月

編集・発行 滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会
印 刷 垂井日之出印刷

